戰爭批判

アインシュタイン
フロイド
ショウ

1934
同人社

戰爭批判

ア・アインシュタイン
シーグムント・フロイド
バアナード・シヨウ

[illegible] 譯

1934

同人社

戰 爭 批 判

ア・アインシユタイン
ジークムント・フロイド
バアナード・シヨウ

生形 要 譯

1934
同 人 社


A. Einstein
G Bernard Shaw

序

現代の如何なる思想家といへども、戰爭といふ事實を見落すことは出來ない。また、一般大衆も、それを見逃すわけにはゆかない。と言ふのは、戰爭は今日の問題だからである。しかもそれは、「一個の單純な、明瞭な、比較的に輕易な問題ではない」（N・L・）世界は、「眞」の平和を痛切に待望しながら、戰爭の危機化を無限に包藏してゐる。そして、現實には、世界は、思想的にも、物質的にも、組織的にも、次ぎの戰爭のために、準備してゐる。

そもそも、戰爭とは、萬人の考へるが如くに、未開な原始時代の遺物であるか、或は、現代に於ける高度文明人の主要任務であるか。而して、戰爭は何故に起るのか。これは、おそらく現代に呼吸する人間として、だれしも抱くところの疑問であらう。

この問題に對して、、、、本質的究明をこゝろみることは、蓋し、最近の切迫した諸情勢

との關係において、重大な意義をもつものと信ずる。かゝる意味において、現下、學界の代表者であるアルバアト・アインシュタイン、ジクムント・フロイド、バアナード・ショウの眼に映じた戰爭觀を、譯出集錄したのが本書である。之に依つて、多少でも、戰爭研究の一端に資するところがあれば、幸である。本書の著述に就いて、色々御世話になつた千葉潔氏、石丸孝二氏並びに、本書の出版を快諾された小川治男氏に、深謝の意を表する。

なほ、本書の附錄として、戰爭に關する内外約三千種の文献を整理し、別册「戰爭論參考文献」として、近く同人社より刊行することを附記する。

一九三四年二月

蒲田小林町にて

生　形　要

目次

アインシュタインの戰爭批判

アインシユタインの戰爭觀

アルバアト・アインシユタイン

（前記）以下「アインシユタインの戰爭觀」と題して收錄したものは、世界大戰以降、一九三二年末迄でに至るアインシユタイン博士の戰爭に關する書翰や演說の飜譯であつて、Albert Einstein.—The Fight againt war. Edited by alfred Lief. The John Day Pamphlets. No. 20. 1933. に依つたものである。

ロマン・ローランへの手紙

——(A letter to Romain Rolland)——

【註】大戰中、アインシユタイン博士は、獨逸にあつて、新母國聯盟 Bund neues Vaterland——これは、一九一四年創立され、後に the German league for Human Rights と改稱された——の發起人として、戰爭反對鬪爭をやつた。因みに同聯盟の目的は、戰爭防止の對策を講ずるにあつて、當時

中立的調停の役割を演じてゐた。以下に掲ぐる手紙は、一九一五年三月二十二日、當時スヰスに滯在して居たロマン・ローランへ宛て、伯林から發信したものである。

新聞を通じて、また、私が關係してゐる新母國聯盟から仄聞したところに依ると、貴兄は、身命を賭して、獨佛兩國民の間に橫はる運命的な誤解を排除しようと、懸命にも努力されてゐる旨を知り、私は、それに對して、非常な賞讃と尊敬の意を表する次第である。貴兄の今次の企てが、惡性な流行病のやうに、前途有爲な人々を、完全に捕へて了つた不可解な幻想（註、戰爭を指す）から、呼び戻すであらうことを望む。われ〳〵は、將來に於いて、現在のヨーロッパの推移を顧みるとき、約三世紀に亙つて、鬪爭したところの文化的努力が、たゞ、宗教的な情熱から、國家主義的な情熱に變つたに過ぎないと思はれてもよいものであらうか。多くの學者でさへ、八ケ月以前には、頭腦から活動力を切り離されて了つたかのやうに、戰爭については、不感症であつたではないか。私は、これらの矛盾に就いて、貴兄の忌憚ない批評が聽きたいのである。また、私と、獨逸や諸外國の科學者との間の交渉からして、今回の貴兄の平和

運動について、何等か、役立つものがあれば、喜んで、それに從ふであらうことを附記する。

【註】これに對するロマン・ローランの回答は左の如くであつた。

「數ケ月後（註、一九一五年九月十六日を云ふ）アインシュタイン博士は、ヴウヴイ（Vevey）に余を訪問してくれた。……そして、その日は、午後から長時間に亘つて、話し合つた」

戰爭に對する机上觀念

——（Bookish notions of war）——

【註】嘗てアインシュタイン博士は、佛蘭西訪問の際、一九一四—一八年の歐洲大戰のため、荒廢に歸した地方を視察したい希望を述べたので、一九二二年の四月九日、パリ研究所のチャール・ノウドマン教授（Prof. Charles Nordmann）と一緒に、フランスの國境にあるドオルマン（Dorman）の廢跡を訪ねたことがある。その際、發表したのが「戰爭に對する机上觀念」(Bookish Notions of war) といふ論文である。

戰爭が如何に醜惡なものであるかを知らせるには、獨逸の全學生を——否、全世界のすべての學生を——このドオルマンの廢墟に連れてくれば充分である。またわれ〳〵は全學生を、こ

の地方へ連れて來なければならない。

各國民は、ことごとく、その思想があまりに机上論なために、相ひ互ひに、多くの間違つた觀念を持つてゐる。例へば、獨逸人の大半が、フランス人に對してもつてゐる觀念といふのは恐らく、餘りにも、文學的であるやうだ。他言すれば、ドイツ人が有する對佛觀念といふのは讀書によつて得た觀念に他ならない。私をして言はしむれば、恐らく、多くの人々は、戰爭について、また、戰爭が招致するところの荒廢については、單純に、文學的な机上觀念をもつてゐるにすぎないといふことである。だから、そう云ふ人々を、全部、こゝへつれて來て、この悲慘な有樣を見學させてやることは、まことに、望ましいことではなからうか。そして、それは、また、恐ろしいことでもある。

【註】猶、この「戰爭に對する机上觀念」は、ノウドマン教授に依つて、一九二二年四月十五日附の巴里イルストラシオン（L' Illustration）誌に轉載されてゐる。

餘り流行り過ぎた國家主義
――(Too much nationalism)――

【註】 一九二〇年七月、コロンビア大學が、アインシュタイン博士に、バアナード賞牌(Barnard medal)を贈呈した際、同博士は、大學評議員に對して、左の如き意味の書翰を送つたことがある。

「わたしは、國境を越へて、すべての學者が結び合ふ幸運な時代に於ける先驅者としての榮譽をよろこぶものである」

だが、一九二一年初頭のベルリンに於ける科學者の現實の生活はどうであつたか。ベルリンの新聞は獨逸科學の貧血を報じてゐた。また、エリアス・トベンキン(Elias Tobenkin)が、博士と會見した時に、博士は、科學の貧困よりも、人間の貧困について、多くの關心をもつてゐた。(New York Evening Post, March 6, 1921.) 因みに、ニューヨークのコロンビア大學はユダヤ人の大學と云はれるほど多數のユダヤ系の敎授や學生を抱擁してゐる。(小辻節三氏、ユダヤ人とは何か、讀賣新聞、昭八・一〇)

今日、科學は、戰爭の恐る可き惡影響を蒙つて、苦惱してゐるが、然し、先づ最初に考慮し、匡救せねばならないものは、科學の苦惱ではなくして、人類の苦しみである。そして、現在、

獨逸人は――東邦ヨーロッパの何處でもそうであるが――幾世紀の間、經驗したことのない懊惱を味つてゐる。全く、人類は、程度を越へた國家主義と、また、餘りに偏狹な國家主義とのために、苦惱してゐる。すなはち、些少な刺戟を與へたり、または、何等刺戟物をあたへなくとも、直ちに盲目的な愛國心に轉化して行く、現在の國家主義的潮流は、一つの疫病と見てもよい。

歐洲大戰前に存在してゐた國際主義――文化に關する國際主義、商工業上の世界主義、思想に對する廣汎な寛裕的な態度――は、眞に正しいものであつた。而して、この國際主義が復活しないならば、地上に、平和もなければ、また戰爭から蒙つた損傷もまた、全然癒えないことであらう。

こゝで言ふ國際主義とは、要するに、他國の慣習や內的生活を妨害することなしに、國家間の合理的な親善關係や、國民の穩健な協力と理解、相互的協調進步を計ることを意味するものである。而して、かゝる國際主義の立場にあつてこそ、科學や科學者が、人類に貢獻をなすこ

とが出來るわけのものである。從つて、科學者と言ふものは、國際主義の再生のためには、先づ、先驅者として活動せねばならない。

アメリカは、この國際主義問題に關しては、其他の何づれの國よりも進步的である。現に、アメリカは「國際主義的精神」とも稱す可きものを持つてゐる。またアメリカが國際主義的傾向にあることは、ウイルスンの理想が示すところであつて、その最初の成功と外部からの批評とは、まつたく、アメリカが國際主義的であることを立證してゐる。たゞウイルスンの理想が、終極に於いてどうであつたかは、此處では別問題である。

ウイルスンの講演が、熱心に歡迎されたことは、アメリカ民衆が、國際主義的精神を有してゐることを示現してはゐないのか。

更らに、アメリカの科學者は、先づもつて、此等の觀念を發展させ、それを成功に導くべき企てには、先頭に立つて、指導せねばならないと考へる。世界――これはアメリカをも含んでゐる――は、かくして、國際的親善關係に立ち戻らなければならない。平和事業は、アメリカ

に於いても、また其他の諸國に於いても、世界各國の政府が、その國際關係に何等かの不安を感ずる限りは、一歩も前進し得ないであらう。嫌疑や苦惱は、進歩を育むべき良き土壤とは申されない。宜敷くそう云ふ猜疑心は、早速にも、棄てゝしまはなければならない。そして、識者は如上の觀念を廢棄して、國際主義の先頭に立たねばならない。

私は、確固たる戰鬪的平和論者である。そして、世界は、旣でに餘りに多くの戰爭を體驗して來たものだと信じてゐる。次ぎに世界戰爭が勃發する時には、我々の文明は、完全に破滅するであらう。

【註】この文明とは、資本主義機構がもつ文明を意味する。

從つて、世界諸國は、戰爭の再發を防止するために、適當なる國際協定を樹立せねばなるまい。大陸の文明、すなはち、ヨーロツパ文明は、歐州大戰のために、非常に傷けられ、その進步もまた甚しく阻止されてゐる。しかも、損害は、今日に於いては、挽回するにはあまりに尨

大である。この次ぎに、戰爭が起れば、それは、ヨーロツパにとつて、誠に、最後的なものとなるであらう。

【註】米國のボーガルト博士の計算に依れば、歐洲大戰の直接並に間接經費は左の如くである。（單位百萬弗）

直接經費	一八六、三三三
間接經費（内譯）	
人命の資本還元價格	
兵士	三三、五五一
市民	三三、五五一
財産上の損失	
陸上	二九、九六〇
船舶	六、八〇〇
生産上の損失	四五、〇〇〇
戰時救濟費	一、〇〇〇
中立國人の損失	一、七五〇
間接經費合計	一五一、六一二

總計	三三七、九四六

「備考」　ボーガルト博士著「大戰の直接費と間接費」に依る。

【註】　以上は、アインシュタイン博士が、アメリカに到着する前に發表したものであるが——博士は、一九二一年四月二日、ニューヨークに到着——アメリカの新聞は、博士の戰鬪的な平和主義理論に就いては、別に何等質問を發しなかつた。アメリカ諸新聞は、むしろ、博士の相對性原理の方に多くの興味があつたやうである。また、市公會堂に於ける歡迎會の席上、ジョージ、ダブリュー、ウイツカーシャム（George W Wickersham）が、一九一四年の宣言書に、博士が不參加であつたことを回想して、質問を發したときに、アインシュタイン博士は、次の如く答へた。

現在の粗雜きはまる政治上の現實主義や、または、われわれを包圍してゐる唯物主義的な空氣が、低徊してゐるにかゝはらず、人類の希望は未だ〳〵放擲されてゐないと考へる。人類の希望のなかにある高尙な觀念の曙光は、少なからず現はれてゐるやうに思ふ。例へて云ふならば、アメリカ人が、世界の政治的舞臺で示した所作の如きがそれである。

國際協力に就いて

——(International Solidarity)——

【註】一九二二年六月十一日、獨逸國會に、獨逸の平和聯盟十一團體が、會合したその席上に於けるアインシュタイン博士の演說。

我々のみじめなこの地上に起る諸事件を、月の世界から、眺めてゐるやうに、私の立場をはなれて、わたしは、只今、赤裸々に提供したい。私はかく自問する。すなはち「今日、我々が直面してゐる國際問題の複雜さは、從前のものと比して、如何なる點に於いて、異つてゐるか」と。ところで「今日」といふのは、たゞ單に、今日の「此の日」を指示するのではなく、むしろ、過去半世紀を意味するのである。

この問題に對する回答は、至極簡單である。新らしい技術的な發明が、人間とその機械との量的關係を、從來の十分の一に縮少して了つたことである。その結果、人間は尨大な生產組織を作り、そして、人間の大多數は、機械に征服され、全世界に蠢いてゐる。人間が生產に利用される地域が擴大されれば、それだけ、政治的組織の發展も、これに伴はなければならないことは、合理的であり、また、事實上、必要なことでもある。

かゝる機械に對する人間の恐怖時代に於いて、我々は、恐ろしい體驗から、また、他面に於いて、現在の生産組織が、必要であることも知らされて來た。月の世界にゐる人は、吃度、人類が辛じて通つて來た恐ろしい試練の後に於いて、この生産組織が、極く少數のものに依つて完成されたことを觀察して、驚くにちがひない。その理由は、何であらうか。私の考へを以てすれば、大多數の人間は、歴史といふ記念の被害者にすぎなかつたからである。これは、甚だ妙な現象と言ふ可きである。

普通の人間は、すべて、ある出來事を、直接に、それが起つたまゝを生活の上に記録して、これを何等批評することなしに、比較的容易に、眞理に對して、彼等の概念を變へることが出來る。しかし、少くとも、印刷インキを吸ひ込んだ、批判の目をもつ人間は、眞理に對して、もつとも、冷淡であるがために、宿命的な羽目に陷入ることがある。國家は、印刷した言葉で、相互に、作用してゐる人々を以つて、組織されてゐるが故に、言語の社會は、同樣に悲慘な役割を演ずることがある。

彼等は、ある一定のブロックが形成されてゐる如くに作用し、そのブロック（註、印刷された言葉のブロック）の力は、非常な、强固さをもつてゐるが故に、言語の社會の組織成員は、概念の特異性も、また、獨斷性も知らず、また、偏破な世界觀にも、氣持がないのである。

私は、和蘭、佛蘭西、亞米利加を旅行して、語學の單位がもつ鞏固さを知つて驚いた。かく言語や政治に依つて、成長して來た人間集團の特徴は、恐ろしい程に融和し難いものである。また、この種族的な特徴は、過去幾世紀かの副産物である。

我々は、この根强い、精神的な、言語的障壁に對抗する戰爭は、恐ろしく難事であるとともに、また、その戰爭が戰ひ抜かれない間は、ヨーロッパの各國家間に、政治的協調なぞは、全く望み得ないことを知つてゐる。

かゝるが故に、私の信ずるところは、現在の世界狀勢では、物質的、精神的な協力のより大なる統一を必要視する者——理想的考慮は申すまでもないことであるが——は、以後「國のために、何をしやうか」と言はずに、「より大なる實在が存在し得るためには、國家は、何を成さ

ねばならぬか」と、尋ねるやうにせねばならない。

此の實在なしでは、國家は、決して存續し得ないであらう。つねに、決斷と根氣さとを以つて、善處し、あらゆる場合に、この主張を以て、實踐してゐる人だけが、精神的に、また知的な一致を障害してゐる城壁を突き破りうるのである。

私の主張することとは、國語の異つた、政治上文化上の觀念の異なつた人々が、國境を越えて接觸し合ふべきことである——然も、それは、何ものかが彼等の國の爲めに、しぼり取られるだらうといふ考へではなく、比較的獨立した科學の分野に於ける精神的な集團相互間に、國際的な連帶を結びつけることである。

斯くして、我々は、經濟的に存立し續け、精神的な生存を保護し得る確信を與へられる様な政治上の統一を——例へば、歐洲に——完成することが望み得るのである。其の時にこそ、世界は、眞に生存する價値がある。

國際聯盟に就いて

——(The League of nations)——

【註】學藝協力國際協會(The Committee on Intellectual Cöoperation)が、國際聯盟の一分派として設置された時に、アインシユタイン博士は、委員として參加を求められた。——一九二二年五月——これに對するアインシユタイン博士の回答は、左の如くであつた。

私は、學藝協力國際協會の委員會 Commission pour la Coöperation Intellectuelle に依る選任を受諾するものである。委員會が爲すべき事實の性質に就いては、餘り多くの知識を有しないが、卑見に依れば、現在に於いて、何人も、國際的協調の實現に努力する機關に對しては援助を拒むべきでないから、之の招請に應ずるのは、私の義務であると考へる。

【註】第一回會議は、一九二二年八月、ジユネーヴに開催された。アインシユタイン博士は出席しなかつたが、委員會宛に助援方を承諾し、彼自身の科學上の研究が完成に近づいてゐる爲、出席不可能なる旨を謝して電報を送つた。因みに、博士は一九二三年三月二十二日、委員辭任を申し出てゐる。

私は學藝協力國際協會が、其の事業達成に必要な力や意思をもたないことを、確信するに至つた。

確固たる平和主義者としては、同協會と今後、何等の關係を持たない方が良いと考へる。

【註】一九二三年六月、獨逸の平和機關紙 Die Friedensworte への手紙は、良く此の間の事情を説明してゐる。

私が學藝協力國際協會の委員を辭任したことは、現在の國際聯盟の活動では、大國側に依り作用される行動は、どんな野蠻的な行動でも、聯盟は、其の立場を守ることが出來ないと確信したからである。私が辭任を申出たのは、聯盟が、現在の機構内では國際的機關としての理想を具備せず、事實上、斯かる理想を傷けるものであるが爲めである。

然し、辭任はしたが、内心、多少の躊躇がないわけではなかつた。といふのは、私には、尚聯盟なる殼の中に、より良き内容が發するだらうとの希望を捨てなかつたからである。私の後任として、高潔の士であるハアルレム(Haarlem)のローレンツ教授(Prof. Lorentz of Haarlem)

が選任されたことについては、誠に喜びに耐えない。またそれは私の滿足するところである。國際聯盟よ。願はくば、將來、私の暴言が、誤りであつたと云はれる樣に發展してくれ。

【註】アインシュタイン博士は、一九二四年、聯盟の委員に復歸した――之に就いて、委員長は、博士自身の要求に依るものだと述べてゐる。七月廿五日から同二十九日迄行はれた第四回會議に、アインシュタイン博士は初めて出席され、委員會の企劃する事業には、忠實に勤めると述べた。七月十七日獨逸の聯盟參加を祝ふ伯林民衆の示威に對して、送つた博士のメッセーヂは、左の如くである。

强固なる國際的機關が創立されたことは、歐洲の生存にとつて、全く緊急な狀態が完成したことである。

【註】「ヘルマン・ベルンシュタイン氏（Herman Bernstein）へ」と題して、一九二五年五月十七日、ニューヨークタイムズ紙に、左の如き論文を寄稿した。

獨逸が、聯盟は絕對に無力であると思考したことは、誤りであつた。國際聯盟は、立派な意圖を有し、且つ、價値ある幾多の事業を成してゐる。然し、私が强調したい事は、米國の態度

を安定させない内は、國際聯盟も、其他の國際的機關も、存し得ないと確信してゐることである。

【註】「國際聯盟の十年間」(A decade of the league of nations) と云ふ諸家の隨感錄より——一九三〇年十二月。

私は國際聯盟の功績については、非常な關心を有してゐるが、聯盟の存在することに對しては、また、謝意を表してゐる。

【註】一九三〇年七月、委員會が非公式に會合した際に於けるアインシュタイン博士の演說。

私の考へを以てすれば、委員會の主要な事實は、青年の敎育を、一般的に、改善する方策を發見することに存する。國際聯盟は、世界中の小學校制度改善に援助することが、聯盟にとつては、一番立派な仕事であると考へる。

兒童に國際的協力の精神を敎え込む事は、誠に、立派な意義のある事業であり、また、成功

すれば、委員會の仕事は、充分に達成したと言つても良いわけである。一寸おかしな事であるが、科學の各部門に從事して居る、學者は、其の仕事が密接に關聯してゐるにも拘らず、學者相互の關係は、非常に薄いものになつてゐる。また學者が、一緒になつて働いてゐるのを見ることは、至難な事だと聞いてゐる。全く、學者達は、皆顯微鏡を鼻の先きにぶらさげあつてゐるのだから仕方がないが……。

科學者と愛國主義

——(Scientists and Patriotism)——

【註】「平和運動」(Die Friedensbewegung) と題する平和主義に關する小册子のなかから拔萃。因みに、同書は、クルト・レンツ Kurt Lenz 及びウオルタア・フエビアン walter Fabian の編輯に係るもので、一九二二年、ベルリン市、シユウエケ・ウント・ゾオン C. A. Schwetschke und sohn から刊行されたものである。

戰爭は各國民の協力に對する努力——就中、文化的努力に對する重大な障害である。戰爭は

智的勞働者から、その努力が基く所の內的または、外的なさまざまの條件を剝奪するものである。偶々、知的勞働者が强くして若い場合に、戰爭は、彼をして、破壞に導く機關の奴隷たらしめる、そして、若し、彼が强く若くない場合と雖も、兎に角、戰爭といふものは、興奮と厭惡の雰圍氣を以て、彼を包圍して了まふ。しかのみならず、戰爭は、其後に續く窮乏の爲めに長期に亘つて、壓迫的な經濟上の從屬を招致するものである。故に、凡そ精神的な價値を至上であると考慮する人間は、必ずや、平和主義者とならなければならないわけである。此の點は、若しも、われわれが過去の人物を、徒らに算へるのみでなく、良く是等を再吟味するならば、歷史が之を證明するものである。

科學は、果して、平和主義の發展に如何なる役割を演じて居るのであらうか。此點に就いて云へば、純粹科學の影響は、甚だ微弱なものである。科學を代表するものの多くが、――先づ最初に考へられるのは、歷史であるが――些かも、平和主義の素地を作らなかつたことは、明白ではないのか。特に、世界大戰當時にあつて、軍國主義的な、然かも、盲動愛國主義的な意

見を聲明することに於いて、不思議な程、科學は卓越して居つたのである。

ところが、自然科學に關しては、それは、全く異るのである。自然科學の代表者は、取り扱ふ部門の性質から、又、國際的に統制される協調が必要であるので、容易に、平和主義者が抱いてゐる國際的精神に賛意を表する傾向にあつたのである。又、戰爭を以て、經濟組識を破壞する經濟發展の障害物であると見做す經濟學者に取つても亦同樣であらう。

併しながら、自然科學が歷史的過程に及ぼす最大効果のうちで、我々に興味を與へるものは精神的な特性ではなくして、それは、物質的な方面である。自然科學に刺戟された技術的な發明は、今日の經濟組織と國際的に連結してゐる。斯くして、戰爭は、軍事上の近代的手段と相俟つて、遂に、汎世界的な關心事となるに至つたのである。痛烈な幾多の經驗が、此の事を、直接に、見せて吳れる時に、我々は、必ずや、戰爭を不可能ならしめる機關を創立しやうと意氣込むであらう。

【註】 一九三〇年六月のフオリユーム（The Forum）誌に、アインシユタイン博士は、「世界科學は、國

民的愛國主義の代りに、世界人的愛國主義を、われわれにあたへるわけにはゆかぬのか」と題する、次のやうな論文を寄稿してゐる。この論文は、ジェームズ・マアフィー（James murphy）との問答の速記である。

勿論、申すまでもない。科學の世界性については、聊かも疑ふところはない。文化的試練に於ける力としての科學の役割慣例といふものは、その見透しが汎世界的であるが故に、無意義な國家主義から人々を引き離して、世界的な、より該博な見解と強い影響とをもたらすものである。だから、國家主義は、科學の世界性に代る可き何者かをもつてゐなければ、その世界的といふ性質を放逐することは出來ない。が故に、科學こそ、何人でも依頼することが出來るところの廣大な何物かであるわけである。

【註】「愛國主義の薄弱な効果に就いて、エミール・レンゲル氏（Emil Lengel）に呈す」と題して、一九三〇年九月十四日附のニューヨーク・タイムズ紙に發表した論文。

約十七世紀までは、科學者は、一般に、藝術家とともに、共通の理想に依つて、結合されて

居たので、政治的な事件は、殆んど、彼等の協力や存續に對して、影響するところはなかつた。そして、かゝる文化的な團體に對する協力的な存續の今一つの刺戟は、ラテン語の一般的な使用であつた。われわれは、今日、かゝる牧歌的な時代を、たゞ、失はれた樂園として、回想するにすぎないのである。といふのは、今日の科學者はどうであるか。彼等の冷靜な、國際的規模を有する科學的研究は、今日では、全く、國家主義者の激情のために、破壞されて了ひ、彼等の協力的な一つの要素であるラテン語は、壞滅してゐる。之に附隨して、科學者は、極端な國家主義的な要求の提案者と化し、却つて、學者でない實際的な政治家が、人類がもつ思想の國際主義に關心をもつやうになつて來た。現に、國際聯盟を創設したのは、科學者ではなくして、かゝる政治家であつたのである。

國際的協力の理想をもつてゐる筈の科學者は、現在、何等なすところを知らない狀態である。が故に、學藝の國際的協力とか、乃至は、戰爭の平和的解決なぞは、×事勤務と××が廢止されなければ、決して、實現するものではない。要路者は、よろしく、かゝる×事勤務の拒

絕を保證することに依つて、人類に貢献し得たといへるのである。わたしは、すべての識者といふものは、直接にせよ、間接にせよ、どんな×事活動にも參加しない誓約を、なすべきであると考へてゐる。

平和に對する本能に就いて

——(The Instinct for Peace)——

【註】ソヴエート●ロシアの視察を目的としたアメリカ見學團の一行が、一九二九年七月、アインシュタイン博士を、獨逸ポツタムに訪問したことがある。「クリスチアン●センチユリイ」The Christian Centuryの編輯者であるポール●ハッチンスン Paul Hutchinson 氏に對して、アインシユタイン博士は、熱誠に、ガンデイを稱讃した後、アインシユタイン自身の平和主義が、果して、哲學的思考の結果であるか、または、近時の事件に對して、それが反動的であるかに關して、左の如く述べた。

私の平和主義は、本能的感情であつて、元來、人殺しに對しては、大小に拘はらず、唾棄すべき感情にとらはれてゐる。私の態度は、何等學術的な理論から得られたものではなく、さま

ざまな慘酷や怨恨に對する敵愾心に立脚するのである。私は、今、此の反動を合理化しやうとつとめてゐるのであるが、其れは、實際、後から附けたした思考に過ぎないとも云へる。私は、絕對的平和主義者である。私の生活の主要目的の一つは、常に、ヨーロッパの古來からの戰爭の慣例に反對することである。其の慣例は未だ其の勢力を維持して居るが、失望はしてゐない。

私は如何なる暴力行爲にも參加しないといふ神の誓を信ずるものであるから。

【註】一九三〇年十月のフォリユーム誌 (The Forum) より抜萃。因みに、同論文は、一九二一年ニューヨーク市サイモン・アンド・シュスタア Simon and Schuster 發行の現代哲學者列傳 Living Philosophies に再載。

私の社會正義及び社會責任に關する興味は、直接、世人と交際する願望の著しい缺乏に對して、奇妙な對照をなしてゐる。私は要するに、一人立ての馬で、團體的勤務の出來ない馬である。未だ嘗て、全く、心から、一國、或は、一洲に、或は友人仲間に、或る家庭にすら從屬し

たことはない。此等の結合は、常に淡い別離となつて消え去り、自分一人で引き籠らうとする願望が、年と共に深まつて來る。

かゝる隔離は、時には、苦々しいことであるが、されぱと云つて、他人の了解や同情から、自分を切り離すことは、些かも後悔するところではない。それに依つて、確かに、何物かを失ふであらうが、それは、他人の習慣や意見や偏見から獨立分離されることによつて、充分に償はれるし、又、かゝる變り易い根底に、心の安靜を求めやうと誘惑されることもない。

私が抱く理想は、民主主義である。何人も、個人として尊敬せらるべきであるが、併し偶像視されるべきではない。私が、不當な稱讃と尊敬とを浴びせられてゐるのは、運命の皮肉と申す可きである。此れに對する追從は、恐らくは、一般大衆が願つても得ることが出來ない或る種の觀念を、私が、微力ながら、理解し得たことに、起因するものであらふか。

如何なる事物でも、その決定的な終局に於いては、唯、一人の男が、良く考慮し、命令し、且つ、その責任の大半を、遂行したといふことにすぎない。併し、指導されるものも、只徒ら

に驅使されるのみではいけない。その指導者の撰擇が許容されるべきである。社會を階級的に分離することは、誤りであると考へる。最後には、彼等は、力に訴える。暴力の獨裁制度には、墮落が付き物である。何となれば、暴力は不可避的に、道德的には劣等なものを附隨し來るからである。歷史は、幾多の有名な暴君が、暴漢によつて、その位を襲はれたことを記して居る。

かゝる理由を以て、私は、今日の露西亞並びに伊太利に存在する制度に反對して來た。ヨーロッパの民主主義の形式を汚辱したものは、民主主義自體の理論ではなくして、政治的指導者の立場が不安定であつたことに依るものである。

亞米利加に於いては、政治的に、好い工夫を思ひ付いたと信じて居る。諸君は、合理的な期間を付して、大統領を選擧し、そして大統領が、然るべく任務を果し得るやう、充分な權力を與へてゐるからである。之に反して、獨逸に於いては、如何と云ふに、各洲が、個人の疾病或は失職の場合に今少し面倒を見るべきだと考へる。煩雜な人生に於いて、眞に價値あるものは、

國民ではなく、創作的な感じ易い個性であり、個人である。——個人は、共通的な群集が、思想も感情も鈍く、不活潑な間に、高倘な且つ、尊重すべきものを創造する。

私は、此の問題を取扱ふに當つて、集團的な精神の結果である——厭惡すべき×××を想起する。輕蔑されて居ることも知らずに、×樂に連れて、男子は、隊伍堂々と行軍を續ける。多少、此の男は、間違つた大腦を持つて居るに違ひない——要するに、脊髓だけで充分な男だ。此の命令的な英雄主義、無意味な暴力、呪ふべき誇大なる××主義よ——私は極端にそれらを侮辱するものである。

××は低劣にして卑むべきものである。かゝる行動に參加する位であるなら、死するに若かずではないのか。斯る人類に對する汚辱は、一刻の猶豫もなく、之を除去すべきである。若しも國民の常識が實業的或は政治的理由の爲めに、學校若しくは新聞を通じて、組織的に破壞されてゐなかつたならば、人類は、夙に、斯る汚辱から免れたことゝ、私は信ずる次第である。

平和豫算案・猶太人・國民性

——(Peace Budgets; Jews; Nationality)——

【註】一九三〇年一月十二日、伯林に開催された猶太人聯盟（アインシュタインは一九二九年同聯盟の設立に參加した）の總會席上に於けるアインシュタイン博士の挨拶。

吾人にとつて、實際的に必要なことは、現在の破滅的な××豫算に相當するだけの平和豫算——云ひ換へれば、平和的人頭税の確立に對して運動すべきことである。

人類は、平和條約が、唯、單なる紙片に記錄されるのみならず、人心に、深く銘記さるべき時代に到達して居る。

猶太人は、智能が最上の武器であることを、歷史上、證明して居る。暴力に壓迫されつゝも、猶太人は、戰爭を拒否することに依つて、其の敵を嘲笑し、却つて、彼等に、平和を敎へたのであつた。今や、人類の最上なる者は、擧げて、平和の觀念を遂行せんとしつゝある時、我々

猶太人は、數千年の悲しい體驗を、彼等の自由に使用せしむべき義務があり、又同時に、我々の祖先の倫理的慣習に對して、忠實に、文化的並びに宗教的方面の高尙な要素と結合して、平和の爲めの鬪士とならねばならぬ。

【註】「貴君は、獨逸人であるか、猶太人であるか、とのゲオルグ・シルヴエスタア・ヴイレツク George Syluester Viereck 氏の質問に對して應へる」

【註】一九二一年十月二十六日、サタデイ・イヴニング・ポースト The Saturday Evening Post より轉載。

私は獨逸人であり、またユダヤ人でもある。私は、自分を人間と心得て居る。國家主義は、誠に幼稚な病氣で、云はゞ、それは、人類の痲疹である。私は、種族を信じない。と言ふのは、種族は欺瞞であるからである。現在、如何なる國民と雖も、雜種の結合であつて、純粹の種族は存在して居らぬと信ずる者である。

【註】一九二六年四月十四日附のニユーヨーク・タイムズ New York Times 紙より轉載。

世間は、如何なる理由を以つて、偉人に、國民性の限界を與へるのであらうか。例へば、偉

大なる獨逸人とか、偉大なる英國人とかの如くに。

ゲーテは、常に、獨逸の詩人を呼稱されることに反對した。偉大なる人物は、單に、人であつて、國民性の見解から考慮されるべきではなく、彼等の成長した還境も亦何等考慮の必要なきものである。

規範としての軍縮即行論

——(Immediate Disarmament by Example)——

【註】一九三〇年一月二十一日附の、ニユーヨーク・タイムズ紙所載、アインシユタイン博士の「軍縮即行論」の全譯である。

各國民の上にかけられた尨大な軍備が、如何に、彼等凡べてにとつて、加重であるかは、すでに、一般に承認された公理である。

わたくしは、さらに、一歩を進めて、確信を以つて、そう言ふことが出來る。現在の狀態に

あつては、（註、現在の狀態といふのは、一九三〇年を差して言ふのであつて、今日に於ける非常時を言つてゐるのではない）如何なる國家と言へども、他の國の態度を無視して、軍備縮少を試みるも、何等の危險を蒙ることはないであらう。若し、事情が斯くの如くでなければ、（註所謂軍擴せねばならぬといふのならば）武裝を解除した國、あるひは、防禦的一部の軍備しかもつてゐない國は、極度に、窮地に陷り、危險且つ不利である筈である。それは、事實に依つて、立證される。

そして、今日に於いては、軍備擁護のすべての示威的な申立ては、すべてが、彈藥製造家や其他の財政的乃至は政治的野望の動機から、軍備の維持擴大化に、多大の關心をもつ人々に依つてのみ、支持されてゐることは、事實である。

また、若し、今にして、軍縮について、最初の眞面目な敎訓が行はれるならば、猶、その敎育的效果は、甚だ大なるものがあるであらうと考へる。何とならば、それに引き續いて採用される第二、第三の方法は、最初のものに比べて、至極、簡單になるからである。こう云ふ明白

な理由に依つて、最初の効果は、國家保障の觀念に脅かされてゐる各國の議會政治家の俗論を弱めるに充分であらうと信ずる。また、××は、一國の經濟的資産として、これを見ることはまことに、不當と云はなければなるまい。どこまでも、それは、人及び物の不生産的使用に止まり、また人間を最も活動的な時代に、××の形に依つて、一國の經濟的準備を蠶食するものである。――××業務にのみ偏執せしむることによつて、道德的墮落を招來することは、また申すまでもないことである。

平和主義者と政府

【註】ハンガリイ生れの平和主義者ロスイカ・シユヰイムア女史 Rosika Schwimmer は、××制度の支持を約せざる故に、アメリカの市民權を拒絕された。該事件は一九二九年合衆國大審院が之れを管轄した。アインスタイン博士は、一九三〇年七月三日婦人國際平和自由聯盟（The Women's International League for Peace and Freedom）のフリダ・パーレン Frida Perlen に次の書を送つた。

私は、シュウイムア夫人の立場は、總ての人道主義者の支援に値するものと信ずる。

政府は、人民を代表し、人民は未だに、××義務の陳腐な慣例の呪ひに縛られて居る。痛烈な我々の叫びである世界平和は、精神的な急進派が、やがて絶滅さるべき黨派によつて支配されて居る政府當局に對して、屈服を拒絶するに非れば、之れを完成することは、不可能である。此の必要を確信するものは、社會的に、同事件に對して、支持することを、當然の義務と考へねばならぬ。依つて、或は、××と一と××惹起するかも知れぬが、多數の有力者がかゝる態度に對して、道德的勇氣を有するならば、必ずや、好ましい結果を招來すべきものである。

かゝる態度は、××的であるが、××行爲によるに非れば、足かせを掛けられた個人は、束縛の鎖を破ることは出來ない。今日の狀態にあつては、かゝる救濟手段も、やむを得ないことである。

この確信に從つて、勇敢に、行動したシュウイムア夫人こそは、光榮ある人と云はねばなる

まい。

【註】シユウイムア事件に答へる爲め、アンソニイ・ジエー・グリフイン Anthony J Griffin 代表は、國會に一法案を提出した。アインシユタインは、右グリフイン法案に關して、次の如く述べてゐる。

眞のデモクラシーの爲めにも、かゝる法律は、絕對に必要である。

【註】一九三一年一月十日、パセデイナ Pasadena にアインシユタインを訪問せるグリフイン法案委員長マヴエリツク・ロイド Lola maverick Lloyd 氏に左の如く所感を述べた。

【註】上院議員リン・ジエイ・フレイジヤア氏 Lynn J. Frazier が、××を不法とする憲法の改正を提案した。一九三一年一月、アインシユタインはフレイジヤア案の決議を紹介する書をペンシルヴアニア委員會に送つた。

私は强國の自發的軍縮が、將來に對する決定的な第一步を意味することを確信する。かゝる一步は、何等特別の危險を意味せず、却つて、諸國民を、××主義の奴隸とする奇怪千萬なる危險を無害にするに役立つであらう。

暴力否定の役割

——(The Rôle of non-Violence)——

【註】一九二七年九月二十五日附のニューヨークワールド紙上にてジェームス・ビー・ホワートソン氏 James B, whartson に答へた一文。

私は、平和主義者である。全ヨーロッパが完全な平和主義者となるに非れば、其れ自身は絶滅するであらう。

【註】一九二九年、プラーグから發行された「眞理」Die Warheit と題する論文集中、アインシュタイン博士の「戰爭再發の場合、吾人は何を爲さんとするか」より。

私は、××の原因が、如何に判斷されるとも、無條件にて、××勤務に服するを拒絕し、又友人に對しても、同様な立場を採るやう說得する者である。

【註】アインシユタインは、單なる宣言にのみ滿足せず、あらゆる機會に於て、××主義並びに獨逸政府の壓迫に依る犧牲者の爲めに、挑戰的態度を採つた。獨逸の××主義者が、政治犯人の放免を確保すべく訴へた際、一九二五年一月六日ベルリンから發行される夜の世界誌上 Welt am Abend に次の如き所感を發表した。

猶、アインシユタイン博士は、一九一九年秋、ロシアの協商國「飢餓封鎖」に對する獨逸人側の抗議を指導した。

正しき見解を有する獨逸人は、何人も、若しそれが、鎭定と改善に寄與さへするならば、政治的特赦を望むにちがひない。何人と雖も、政治的正義にして、必要なる客觀性と偏見の絶無を成就し得ないことを以て、恥とする。政治的特赦は、正義の本質的義務の遂行を意味するものである。

【註】一九二九年八月、パレスタインに於て、猶太人に對し無法なる暴動を起した數名のアラブ人に、死刑の宣告が下された時、アインシユタイン博士は、パレスタインの高級委員に書を送つて、其の減刑を嘆願した。即ち、次の如くである。

私は、パレスタインの暴徒に課せられた死刑執行を免じた英國委任領當局側の判決に贊意を表することを公言する。而して、私は、貴下に私の宣言を減刑のため利用あらんことも附記する。

【註】フインランド政府が、ケロッグ不戰條約に調印後、同國青年アルント・ペクリネン Arndt Pekurinen は、××義務規定の承認を拒絶した爲め、一九二九年十一月十五日、捕縛投獄された。この事件に關して、同國國防大臣の許へ、アインシュタイン博士が署名した War Registers' International 抗訴狀が傳達されたが、同大臣は、徵兵制度は文官指導による交替の非戰鬪的勤務を規定すと答へたが更らに同二月十一日、アインシュタイン博士は左の如く、これに答へた。

貴下の書翰に依り、フインランドは、兵役義務が、一國に與ふる難問題を、眞に價値ある模範的な方法で、解決したことを私は知り得た。

【註】併し、ペクリネン Pekurinen が、拒絕したのは、軍用財産を保護する消防隊への服務要求の拒絕であつたので、國防義務と同樣なるを知るに及び、アインシュタインは三月七日再び書を送つた、

フインランドの友人は、貴下に送つた私の感謝狀が、誤れる推察に基けるものと、指摘した。道德的な且つ、充分な理由を以て、何人も、××勤務（××又は××組織とは關係のない）反對者に對する處分に對して、正當なる要求をせねばならない。貴國の市民エイ・ペクリネンPekurinen の場合も同樣である。故に××勤務拒絕の故を以て彼の名譽を傷つくる刑罰を受くるのは、道德的と認めることは出來ないのである。

【註】ムウニイ•ビリングス Moony-Billings 事件も亦、國家の權力に對する平和主義者の態度のよき實例であつた。一九三一年三月八日、トム•ムウニイ•モオルダー國防委員にアインシユタイン博士は左の如き一文を呈した。

私は、カリフオルニアに、如何に奇妙な司法狀態が現存し、有力團體に服せざる人々が、如何に專橫に取り扱はれて居るかを熟知してゐる。貴國に於ては、西歐に於けるよりも甚だしく富の支配が、當局に對して權力あるものであり、少數者の英雄的爭鬪が存在することも亦よく知るところである。

現在惡く報導されて居る團體が、その存在を確信するならば、アメリカ人の元氣は此の重大な事態を征服することと信ずる。

【註】一九三一年六月、カリフオルニア州知事ジエームス・ロルフ氏に所懐を述ぶ。

私は、現在の場合、疑もなく、正義の失業であることを確信して居る。故に州知事閣下が、十五年の悲しい運命を經たムウニイ・ビリングス事件の關係者に對して、絕對的特赦を與ふることに依つて、始めて、眞の正義が遂行されるであらうことを信ずる。

【註】アインシユタイン博士が、一九三一年二月三日、アプトン・シンクレアを訪問した際、「貴兄は軍備並びに戰爭の危險に對してアメリカの勞働祭の義務を如何に考へるか」との質問に對して、博士は書面を以て左の如く、回答した。

今日、アメリカ合衆國は、世界に於ける最强國である。故に、軍國主義及び××の危險に對する効果的な挑戰は、眞に是等の問題に關する市民の立場に依るものである。また、特に、社會主義者にとつても、同樣で、彼等が××の危險に對する實際的鬪爭に於ける利害は、別に辯

明を必要としない。

【註】アインシュタイン博士は、數度の機會に於いて××忌避者及びその家族の救濟資金の設定を主張した。又屢々博士個人としても、寄附を爲したことがある。一九三一年三月、シカゴ市民に依つて、アインシュタイン平和資金として、二千弗の金が集められ、博士自ら之を管理することになつた。コペンハーゲンのポリテイケン紙 Politiken にも別の資金委託の件が載つて居る。卽ち左の如し。

デンマークの作曲家、ヴイクター・ベンデイツクス夫妻 Victor Bendix の記念資金一千クローナアは、國家が、義務遂行を怠つた、逆境にある人々の爲めに、每年配分されることになつて居る。是れは、××に反對した人々も包含する。私の見解に依れば、××は當然排擊すべきもので又個人の自由を抑壓せんとする如何なる手段に對しても、我々は、良心に訴へて、敢然之と戰ふべきものであると信ずる。故に、此の度、（一九三〇年）私は、××に反對して、卷添へを喰つた二人の人に、上述の資金を分配するものである。

【註】ハイデルベルヒのナチス派學生が、世界大戰を恥辱なりと述べた一教授の放逐を求めたるに際し、博士は、一九三一年四月ベルリーナー・タウゲブラツト紙に寄書した。

寛容、正義、眞理の理想を行ふを得ず、遂に、エミイル・ジエー・グムベル教授 Emil J. Gumbel に反對した大學生の行動は、憐れむべき現代相の一つである。グムベル教授 Gumbel は、政治的殺人に、憤慨して、之と戰ふことに依つて、倫理的規範を支持して居つたのである。かゝる人物を迫害する國民や、又、その暴動に對して、何等の抑制も敢てせざる指導者達は、果して、如何になりゆくべきであらうか。

怖るべきは、經驗淺き青年達が、我儘勝手な行動によつて、誤導されることである。若し、此儘に放任する時は、必ずや、フアッシズムの如き壓制政治の恐怖時代を出現するやも知れない。

【註】一九三一年二月十六日、カリフオルニア工學院學生に對する演說より。

現代の機械文明時代に於ては、科學上の發見は、人間に依り誤用されて居る。毒ガスは、××で人を殺す爲めに用ひられ、平時に於いては、科學的發見は、工場に於ける機械に使用せら

れ、人間は奴隷と化して居る。彼等は、工場から歸ると、疲勞し切つて、人生に嫌惡を感じて來る。諸君は、唯發明するのみでなく、科學の誤用を防止するに努むべきである。

【註】アインシュタインとハインリッヒ•マンの主唱にて國際人道聯盟より、ユーゴウスラヴイヤ政府に對して、抗議が提出された。次いで、彼等は、一九三一年五月、同政府に對し、クロアト人の殺害者に對する放免に關して抗議した。

クロアト人に對する慘虐と虐待は、增加しつゝある。此の怖るべき狀勢に關して、吾人は、國際人道聯盟に對し、クロエイシヤに於ける暴動を鎭壓すべく、あらゆる手段を盡さねばならない。

政治的武器としての殺害は、認容せらるべきものに非ず、又政治的殺害者が、國民的英雄とされるに至つては、眞に言語同斷である。國際人道聯盟は、須く、此の小さき平和な、そして文明的な國民を保護する爲めに、あらゆる援助を與ふべきである。

戰鬪的平和主義

――(Militant Pacifism)――

【註】一九三〇年十二月十四日、ニューヨークのリッツ•カールトン Ritz-Carlton に於いて、アインシユタインが演說せんとした時、通譯が選定されて居らなかつたところ、聽衆の中からロスイカ•シユウイムア夫人 Rosika Schwimmer が申出たので、アインシユタインは、之れを受け入れ、次の如く述べた。「予はシユウイムアー夫人の御援助を喜ぶものである。何となれば、夫人は、私の主張せんとする理想の爲めに。勇敢に戰つたところの女性であるからである」と。

平和の理想に依つて、結合されて居る人々が、會合を催す時は、必ず彼等の仲間のみに限られて居る。之れでは、狼が外で待つて居る時の群羊の如くではないのか。私は、平和主義の演說者には、常に、この困難が伴ふものと信じて居る。旣に、平和主義者であるところの群集に對してのみ、彼等の主張は屆き、其の他には、及ばぬのでその効果が無いのである。平和運動の障害は、この點である。

抽象を離れ、現實を考へる眞の平和主義者は、單に、その主義を云々するに止らず、實際的に價値あることを、爲さねばならぬ。行爲が必要なので、單なる言辭のみによつては、何處に於いても、平和主義者を獲ることは出來ない。運動をよく指導して、直ちに爲さねばならぬことを始めねばならぬ。

この方法に關しては諸君は、先づ、次のことを吟味する必要がある。即ち、現在の××制度の下に於いては、各人は、祖國の爲めに、人を殺すといふ一つの犯罪を犯して居ることである。總ての平和主義者の目的は、他人をして、××の不德を自覺せしめ、世界を×役の奴隷的義務から、解放することにある。此の目的を達成する爲めに、左に二つの方法を示す。

其の一つは、既に實行に移されて居る。即ち××に對する妥協せざる抵抗又は如何なる狀態に於いても、×役を拒否することである。××制度が存在する國に於いては、眞の平和主義者は、×役を拒否しなければならない。多くの國に於ける多數の平和主義者は、平時に於いて、多大の個人的犧牲を拂つて、×役義務を拒否して居る。斯くすることに依つて、彼等は、如何

に××が勃發しても、戰はざるべきを、表示して居るのである。

××制度の存せざる國に於いても、眞の平和主義者は、如何なる場合に於いても、武器を執らざるべきを、平時に於て、社會に宣言すべきである。是れ亦、××反對表明の一つの效果的なる方法である。——以下八行略——

××反對者の採るべき第二の方法として、提案せんとするものは、今少し合法的なものである。即ち平時に於て、國際的立法に依り、×役拒否の權利を樹立することである。×役義務の受諾を好まざるものは、此の立法を主張し、之れに依つて、祖國の爲め、又は、人類の爲めに×役に代はる可き、奮鬪的な仕事を爲し、吾人の××反對は、何等利己的なものではなくして國際紛爭は、××以外の他の方法に依つて解決されることを證明すべきである。又、吾人が××に反對するのは、快樂や卑怯の爲めではなく、又祖國や人道に盡すことを思はないが爲めでもないことを立證せねばならぬ。若し、吾人が、この大役を身に引受けるならば、世界の平和に、寄與するところ、一層甚大であらう。

、私は、かゝる立法は、實現性に富むと信ずる。諸君の機關が、次の會合に於いて、こう云ふ主張を採用することを提案したい。恐らくは、國際聯盟も、平時に於ける×役拒否を、國際法化するに、賛成するであらう。

私は、更らに、各國の平和主義者が、×役を拒否せんとするも、財政が許さゞる人々を救助すべく、資金を蒐集することを提案する。又此の目的の爲めには、國際的機關、並びに、國際的平和資金の設立も主張する。

最後の忠告は、以上の目的を達成せんが爲めには先づ、實行が肝要であるといふことである。然らば、世界は注目するであらう。我々の聲は聞えねばならぬ。聞えれば、卽ち、効果が伴ふ。小さな聲で、叫んで居る間は、我々は羊――平和主義の羊――の境地を脫せざるものであらう。

主權の制限

——(Limitation of sovereignty)——

【註】一九三一年十二月二十二日附、ニューヨーク・タイムズ紙所載のアインシュタイン博士の論文拔萃である。

先づ私の政治的信念を述べれば、國家は、人民の爲に存在するもので、人民が國家の爲に存在するものではない。これは、人間の個性を、人間が有する種々の價値のうちで、最高のものとした人々が、定めた古い原則である。此の點を、充分に理解する要を認める。この點に就いては、殊に、現代の樣な組織と標準化の時代では、重ねて言ひ度くない。國家の最重要な使命は、個人を保護して、創造力のある個性に發達させる樣に仕向けることであると信ずる。

國家は、我々の召使でなくてはならない。我々個人は、國家の奴隷であつてはならない。我々個人を、×役の義務に服させる時、特に、奴隷的な仕事の目的が、他國民を滅亡させる爲と

か、又は國民の自由を侵害する爲に、用ひられ時には、國家は、此の命令を破るものである。我々は、唯、我々個人の自由な發展に貢献する際にのみ、國家に、身を捧げるべきである。斯かる言葉は、アメリカ民衆には、明かに受入れられるが、歐洲人には、受入れられそうにない。故に、我々が希望するのは、反×運動が、アメリカ人に依り、強く支持されることである。

次ぎに、軍縮會議の問題であるが、我々は、それを、一笑に附す可きものであらうか、嘆くべきだらうか、或は、希望を持つべきものであらうか。假りに、怒りぽい、喧嘩好きの人間が住んでゐる都會があると假定する。其處では、何時も生命に危險があるので、生活は、甚しく脅かされてゐる。當局は、此の恐るべき狀態を、救濟しなければならない筈であるが、市會議員も、市民も、短劍を腰にする權利を放棄するものがない。動亂の數ケ年を經て、愈々、市當局は、此の問題を論議することに決し、其の結果『各市民が町に出る際、携帶を許す短劍の長さは何寸とか、又は、切れ味は、幾何』といふ形で、討論されることになつたとする。

然し、狡猾な市民が、刺殺行爲に對し、(法律や、裁判所や警察を通じて)訴訟を起さない限

りは、町の治安は從前と同樣、不安狀態に置かれてゐる。しかも、此の許された範圍内に、短劍の長さや、切れ味を決定することは、一番强い、一番喧嘩好きの者の自由になつて、結局、弱者は强者の思ふまゝに弄弄されるだけである。

以上、比喩を引用した目的は、直ちに明白になるであらう。事實上、我々には、國際聯盟も國際裁判所もある。然し、國際聯盟は、單なる集會所に過ぎないし、國際裁判所には、何等其の判決を强制するだけの力がない。之れ等の機關は、國家が、攻擊された場合、之に保證を與へることは、出來ない。

此の事業を心に留めて、佛國が安全保證なしには、軍縮に贊成しない態度を、判斷する必要があらう。

若し、我々が、各國家の主權を制限することに同意せず、又は、若し同時に、國際裁判所の判決を公然と或は隱然と破棄する國家に對し、他國が共同工作を取ることを承諾しなければ、我々は、一般的無秩序な危險狀態から脫することは出來ない。國家の主權が、無制限である以

上は、どんな工夫をしても、攻撃に對して安全保證を與へることは不可能である。各國家は、承認された裁判當局の判決を强行する樣な大災害を侚も××するのか。—(以下二十二行略)—現在各地で、非常な高潮に達してゐる國家主義は、各國家の×役——蜿曲に云へば、國民の××——に服す義務に、密接な關係がある。國民に、××の義務を要求する國家は、國民に國家主義的な氣持を鼓吹する必要がある。そして、それは、××の効用に對して、心理的な準備として、役立つものである。

在學中の靑年に對しても、また、そう云ふ信仰を以て、臨むが故に、私の意見を以てすれば××制度が、紹介されたことは、白人の道德的沒落の主要原因である。そしてこの沒落は、我々文化の持續性、否、我々の存續性に就いて、重大な疑問をもたらしてゐる。この呪ふべきものは、(其の社會的恩惠と共に)旣に、フランス革命のなかに、發端があり、それから、間もなく、他國民の間に傳播しておつたのである。

其の結果、國際的な見方を抱き、國民的な盲目的愛國心に反對する者は、世界の××制度に

對しても、戰はねばならない。道德的見地より××に服することを拒絕することは、苛酷な迫害に曝すことであらう。然し、迫害は、其の昔、宗教上、殉教者が蒙つた迫害に比して、社會に對し、恥しいことだらうか。我々は――ケロッグ不戰條約にある如く――××を不法視し、同時に、個々の人々を保護することなしに、國家の××機關にゆだねることが出來るだらうか。

若し、軍縮會議で、我々を、組織的な技術的な方面に制限せずに、又、直接に敎育上の理由から心理的な方面を考慮しないならば、國際的に、個人が××に服することを拒むことの出來る法律上の方法を具備する可く努力せねばならない。この方法は、疑ひもなく、有力な道德的影響を有するものだらう。

國民の決心

――(The Peoples Determination)――

【註】アインシユタイン博士が二度目のカリフオルニア行の際——一九三一年十二月三十日ロスアンゼルスに於いて——ジユネエーヴ軍縮會議に就いての質問に應へて。

ジユネエーヴの軍縮會議に依つて、世界は初めて永久の平和を得る方法の發見に、絕好の機會を與へられてゐるが、軍縮問題は、各國の全權の力だけでは、決して解決はつかない。世界の國民は、其の國の全權に向つて、××は全く無用物だと言ふ信念を吹き込んでやらねばならない。ジユネエーヴ會議の成果は、討議の結果、得られるものではなくして、軍縮と平和問題に關する世界の輿論の强さとその性質如何に依つて得られるものである。

【註】之れより三日後、パセデイナ Pasadena で、文明は破壞される危險に瀕してゐるか、否かの質問に應へて。

私の考へる所では、國際的な了解とその組織が欠けてゐることは、重大な危險であると信ずる。此の點に就いて、科學的研究は、問題解決に直接的な力を有してはゐない。唯、人々の決心のみが、問題を解決するものであらう。

【註】一九三二年一月卄日、カリフオルニアのウイツテイー Whittier の中學校で行はれた軍縮問題大講演會に於けるアインシユタイン博士の演說。

現在に於いて、××主義のため重大な危險が切迫してゐることは、多少とも、現代人の感知するところであらう。然し、不幸にも、結果は、倫理的な標準を高めやうとして、得られたものではなく、寧ろ、崩壞の危險や、物質的な損害をおそれて得られたものである。國民は、軍縮會議に、非常な期待をかけ、改善される樣に希望してゐる。國民が、危險と××解消に對して、力を與へ得る程に、眞面目に正直になつた時にのみ、良好な結果が得られるものではなからうか。

文明に對する危險

——(The Danger to Civilization)——

【註】一九三二年一月二十五日、パセデイナ Pasadena に於けるカリフオルニア工藝學硏究所 California Institute of Technology 主催に係はる晩餐會の席上にて。

敬意に沈默してゐるのだと云ふ疑ひを招き度くないが故に、この機會を利用して、沈默のまゝ放棄して置いた問題に對して、述べて見よう。卽ち、それは歐米文明の基礎は、危險に瀕して居り、目に見へない、內部的な力が、我々の存在を脅威してゐるが故に、我々は、不安と焦慮に包まれてゐるといふことである。我々は、過去にも增して、物財に富み、生產手段が豊富であるにも拘らず、人類の大部分は、非常な窮乏に苦しんでゐる。生產と消費は、高度に沈滯化し、公共機關に對する信用は、從前には、見なかつた程度にまで、低くなつて了つた。それは、經濟機關のすべての循環組織が、不治の病に惡化してしまつた樣なものである。

この病氣の原因に就いて、多くの立論が討議され、純然たる專問的な治療が、回復をもたらすものだと思はれてゐる。『何故、生產と消費の均衡が適當な手段に依つて、回復されないのか』と樂觀論者は尋ねるが、悲觀論者は、これに反して『何故、我々の文明は、ローマ帝國が沒落した如くに、內部的崩壞に依つて、沒落しないのか』と問ふのである。どちらが、正しいのか。我々は、どちらに、賛成するのか。

私は、之に對して、遠くから眺望してゐる傍觀者の立場で、回答しよう。申す迄もなく、我々の文明は、文化の維持と發展とに基づいてゐる。そして、文化の糧は、二つの方面の源泉から、攝取されてゐる。其の一は、イタリイの文藝復興に依つて、甦生、擴大されたギリシア精神に依るもので、之は、人類に、『良く考へ、觀察し、しかして創造する』との命令を與へてゐる。第二の源泉は、ユダヤ教と初期のキリスト教から流出してゐる。之は、『全人類に對して無慾の奉仕を爲し、此の魂を救へ』といふ法則に表現されてゐる。これを要するに、我々は、文化生活の創造的な、道德的な、根元を取り上げなければならない。中世紀の末葉に至る迄、我々の文化は、唯、第二の源泉に依つてのみ、培養されて來た。而して、その文化は、貧弱なものだつたが、然し、確固たるものであつた。然し、文藝復興期に創造的な根元が、益々增大して來た時に、着々と文化は、隆盛を極め、各時代の人々を捕へつゝ、現在に至つてゐる。文化が發展した結果、恐るべき文明と技術が要求され、同時に、夢想だもしなかつた人口の激增が惹起され、物質的、精神的生活標準の增大が問題となつた。

我々は、又道德と云ふ源泉が、我々の生存の條件であることを、忘れてしまつて居る。然し現在の不健全な狀態の中に、我々が一驚することは、此の源泉が非常に減つて來たことである。此の源泉だけでは、我々は、取り返しのつかぬ樣に運命づけられてゐるのである。各時代の創造的な天才が、我々に讓渡してくれた器械が、有力であればある程、器械を有效に使用する爲には、より偉大な、そしてより純な、道德力が必要である。此の災害に打勝つ爲には、我々に、知識が欠けてゐるのではない。

すべての幸福に貢献する、人々の無慾な、責任ある献身が欠けてゐるからである。

また、これを、細論すれば、國民の正義感が、裁判の仕損ひに對して、取消しを求めるには餘りに力がないことは、既知の事實である。政府が行ふ協定は、經濟的には、實行不可能であることが認められても、一般民衆に認められなければ、問題にはならない。國家は、××行爲——その行爲が人類に及ぼす影響及び公式的に認められた道德律と兩立しないことは、疑ふ餘地のないことであるが——に對して、物質的にも、心理的にも、用意してはゐないのか。斯か

る多くの質問は、絶えず繰返へされてゐるが、それに對する答へは、唯懷疑的な微笑のみである。ハインリツヒ・ハイネの皮肉な文句、『馬鹿者が應答を待つて居る』といふ樣に。

最後に、斯かる大多數に、斯くも公正に語らせて下さつた、アメリカの自由な、制度に對して、深厚の謝意を表する次第である。

軍縮に漸進的方法なし

——(No Gradual Way to Disarm)——

【註】一九三二年二月一日、パセデイナ Pasadena のヴイスタ●デル●アロヤ●ホテル Vista del arroya Hotel で擧行されたロスアンゼルス大學主催にかゝはる國際關係に關する世界事情研究の晩餐會の席上にて。

軍縮計畫の實現が、益々困難に直面するのは、この問題に關して、難關が未決のまゝ、等閑に付せられてゐるが爲めである。大體、或る事業の目的は、一歩一歩、前進して、始めて、ゴ

ールに到着するものである。例へば、絶對君主制から民主制へ推移する過程を考へて見給へ。然しながら、今、此處には、そんな漸進的な方法では、とても達せられない或る目的がある。××の可能性が取り除かれない限り、國家は、來るべき××に勝利を保證する爲め、常に、充分な準備をして、之を放棄しようとはしない。そして、青年は、好戰的な傳統のなかに教育され、偏狹な國家的虛榮は、かくして、好戰的感情と共に、青年達を訓練する。國家は、一朝有事の際は、國民のかゝる感情の表れを、直ちに、×事上に使用する。武器を取ることは、戰爭を是認し、戰爭に備へる爲であつて、決して、それは、平和に備へるためではない。であるからして、軍備縮少は、生やさしい段階を經て、行はれるものではなく、一足飛びに行はれねばならないもので、さもなければ、軍縮は、全然、行はれるものではない。斯かる偉大な變化を、人間生活に支へるためには、非常な道德的努力が豫め必要である。——即ち、深く根ざした傳統をかなぐり捨てることである。論爭が起つた場合に、自國の運命を、國際仲裁裁判所の判決にまかせて、何等の留保なしに、當局の協定に依り、紛爭を處理する樣に、常に考へてゐ

ない者は、眞に××を回避せんと決心してゐるものではない。『徹底的にやつつけなければならぬ』と云ふのが、我々の標語である。と云ふのは、從來、平和を保證する爲めに、拂はれた努力が、皆ことごとく、不滿足な妥協を行つて、頓坐してしまつたことは、否定出來ない事實である。軍縮と安全保證とは、此の兩者が、完全に一致してこそ、始めて、得られるものである。安全保證は、國際間の決定を支持し、之に從つて、各國家が、責任を以つて、承諾を支へることに依つてのみ、確保される。

これを要するに、我々は、現在、十字路に立つてゐるのである。我々が平和に行く道を取るか、又は、暴力——之は我々の文明には、ふさはしくないものである——への道を辿るかは、我々の決定如何に懸つてゐる。一方には、個人の自由と全體の安全といふことが、我々を待つてゐる。他方には、個人を奴隸にし、文明を破壞する脅威が、迫まつてゐる。であるからして我々の將來の運命は、我々が、これを決定すべきものではないのか。

【註】カリフオルニア州のサンタ・バアバラの公會堂で、一九三二年二月二日、開催された市民大會へ

のメツセーヂ。

今日、アメリカは、國際政局に重大な力を有するから、アメリカ市民は、軍縮を欲するならば、軍縮問題に重要な立場を占めることが、甚だ大切なことである。

單に、軍備の縮少を希望するだけでは、まだ、充分ではない。お互に、接觸してゐる國々は軍事的侵略をされない保證を得る樣な、國際的條約を結んで、攻擊を受けないやう、保護されねばならない。

世界に平和を確保せんと希望する者は、同國の、×權の一部を放棄する覺悟が、なくてはいけない。又、條約や國際裁判所の判決に依り、確保した無條件な關係を要求せねばならないのである。

經濟封鎖に就いて

――(The Economic Boycott)――

【註】南カリフォルニア州の十一大學の各代表が、國際問題に關して、輿論を喚起させる計畫を組織した。アインシュタイン博士は、一九三二年二月二十七日パセデイナ Pasadena の市公會堂に開かれた會合で左の如き講演を爲した。

過去の時代から、我々は、非常に價値のある遺産を受け繼いでゐる。それは、進歩した科學と技術とである。此の遺産は、過去に於いては、保證されなかつた、我々の生命を、自由にし且つ、立派に飾り立てる可能性をもたらしてゐる。然し、此の恩惠は、又一方に於いては、過去に於いて、經驗された程恐ろしい危險を、我々の存在の上にもたらしてゐる。

從前にも增して、文明人の運命は、其の振ひ起し得る道德的な力に懸つてゐる。從つて、我々の前に置かれてゐる事業は、過去の人々が、解決した事業に比して、決して、それは、生やさしいものではない。

人間の食料品や、其他の物品に對する欲望は、從前よりも、僅少な勞力に依つて、滿足され得る。然しながら、此の爲に、勞力の分配と、完成品の分配との問題は、益々、困難になつて

來た。我々は、皆、經濟力の自由な相互作用、秩序なく拘束されない個人の財産權力の獲得運動は、最早、自働的に、此の問題を適當に解決するものとは思はない。我々が、必要とするものは、生產、勞働、分配の間に、計畫ある組織を、與へて、價値ある勞働の生產力を破滅させたり、人口の大部分を、貧困に陷入れたり、殘虐に落ち入ることを、防ぐことである。

若しも『神聖なる利己主義』が、何等、拘束されないで、經濟生活の上に、悲慘な結果をもたらすとせば、之れは、猶、一層、惡い標準を國家間の交涉に與へるものである。軍事上、技術的な進步は、非常なもので、××を避ける方法を、發見しなくては、人類の生命は、到底耐へ忍べない程である。此の目標が重大である樣に、從來、×事上の技術完成に、拂はれた努力は、全くつまらぬものである。

××の危險を縮少するためには、武器を制限したり、××行爲に、制限的な規則を設けたりする計畫がある。然し、戰爭は、社交的な遊びとは違つて、其の相手が勇敢に、規則を守るやうなものではない。問題が、一國の『生死』問題になる場合には、そんな規則とか、協定なぞ

は、全く、一文の價値さへ、ないものになる。唯、無條件に、××を放棄するといふ意思のみが、役立つのである。

この目的の爲めには、國際仲裁々判所の創設だけでは、充分ではない。此の裁判所の判決及び各國協致の行動で、强行される保證が、與へられなくては、ならない。斯かる保證あつてこそ國家は、眞面目に、軍縮をする勇氣を有するに至るだらう。

例へば、今、假りに、英、米、佛、獨、伊國の各國政府が日本政府に對して、支那に對する××類似行爲を直ちに、中止しなければ、完全なる經濟封鎖を斷行すると要求するとした場合、諸君は、日本に喜んで、こんな危險な暴險に、自國を陷ち入らせる責任を、取る樣な、無暴な政府があると思ふであらうか。

何故、斯かることは、起らないのか。何故、各國民、また、各國家は、おのゝきつゝも、生存を維持しなければならないのか。それは、各人各國が、お互ひに、慘めな瞬間的利潤を慾求して、全體の幸福や、繁榮の爲めに、服從しないからである。

これこそ、私が、最初に、人類の運命は、今日に於いては、適去に於けるよりも、ひどく道徳力に依存してゐると云つたわけである。何處にでも、愉快な成功せる生活に導く路は、自制と克己を通して、横はつてゐる。では、何處から、斯かる發展へ導く道徳力が現はれるのか。唯、それは、青年時代にあつて、研究の結果、知識を强固にし見解を自由にすることの出來る者から、道徳力は現はれるのである。依つて、我々年長者は、諸君は我々に與へられなかつたものに向つて、諸君の全力を盡して、努力し、獲得されることを、衷心より希望するのである。

【註】右の講演の通譯者は、ウイリアム・ビイ・ムンロオ William B Munro 博士であつた。

ジユネエーヴの無用物は何か

——(Futiltity at Geneva)——

【註】アインシユタイン博士は、アーサー・ポンソンビー卿（Lord Arthur Ponsonbey）と同伴して、英

國のインフイルド（Enfield）から、ジユネエーヴを訪問、一九三二年五月二十三日、其處で、新聞記者と會見した。ポンソンビー卿はその會見對話は、ロマン・ローラン（Romain Roland）や、ビクトール・マルギユリツト（Victor Marguerite）に對する挨拶である旨を述べて、「世界の人民は、五年間に、完全な軍備の撤廢、××手段――卽ち、徵兵、補充兵、徵募兵の制度とか、武器軍需品の製造――の卽時放棄を主張して、問題を處理するの時が、既に來てゐるのだ」と語つた。次にアインシユタイン博士は左の如く語つた。

私は、今、語るべき義務を感じて、諸君に、所信を述べるのである。現狀に對する私の所感を、簡單な言葉で、語りたい。勿論、此處に居る友人とは、あらゆる點で、一致してゐることは、重ねて、こゝで云ふまでもないことである。

先づ、最初に、ジユネエーヴで、用ひられてゐる制度に就いては、其は、悲劇と云はないまでも不合理なものと云ひ得るであらう。大體、規則で、××を廢止したり、又は、戰鬪方法を規定することは、全くおかしなことである。技術家の力をかりて、技術的な方法で、××を避け得るなぞは、絕對に、出來ないと、信ずるものである。唯、重要なことは、如何なる場合に

も、××に參加せずと言ふ意思のみである。依つて、問題は、如何にしたら、我々は、××に訴へずに、之の窮狀が打開出來るかといふことである。××放棄の決心が、熟慮の結果、編成された政策にしつかり結び附いてゐない限りは、××や、武器を・放棄することは、望み得ない。人類社會の、あらゆる問題に於けると、同樣に、我々が、成さんとすることに關して、人格と意思との問題がある。智識は、決してそんなに重要なものではない。ジュネエーヴには、知識は有り餘つてゐる位だ。然しながら、偉大な人間の性質に就いては、未だ私は、此れと云ふ程のものを見てゐない。

私の友人が、語るべき所を、色々と語つてしまつたので、此れ以上、此の問題に、深入りしたくない。それよりも、諸君の御質問に、御答へすることの方が、大切であらう。と、信ずる。

【問】軍縮會議委員の目的に就いて、如何。

【答】我々は、ジュネエーヴで、委員達が、成しつゝある結果から見て、我々一生涯、或は我々の子供達の時代に、軍縮が行はれるであらうことには、滿足出來ない。

【問】道德的軍縮が先づ先きに行はれねばならないか、如何。

【答】御質問は、例の、鷄が先きか、卵が先きかの問題と同じことである。一體、どちらが先きであるか。

道德上の軍縮は、絕對に、必要な事であるが、これは、宜敷く具體化する必要がある。が、故に道德上の軍縮は、實質的な軍縮と同樣に、困難なことである。

竿頭、更らに、一步を進めてみよう。私の確信する所では、當地に來てゐる有力な人々は、恐らく、充分意識せずに、實力を少しでも放棄する考へは、毛頭なく、たとへ、改善し得る充分な希望があつても、さう云ふ望みには、目もくれないでゐるやうに見へる。最も重要な仕事は、獨自の考へを有する人々がその分野に應じて、××縮少に對して、努力させることである。多數の人々も、我々が、當面してゐる問題に直面する時には、甚だ無力であるのは、また、事實である。

【問】國際仲裁々判所が保證を與へることは、可能なりや、否や。

【答】私の考へを以てすれば、各國が、裁判所の規定を承認するばかりでなく、無條件に、之を實行に移す旨を、嚴肅に、誓つて、結ばれた國際仲裁々判所は、丁度、各國内に、これと類似の機關を設け得ると同じく、可能なことであると考へるのである。若し、商業界に、紛爭を處理する仲裁々判所がありとすれば、國際間に、充分な力がある場合には、そう云ふ組織を、國際間に有することは、可能である。それが、可能か否かは、斯かる機關の組織へ、總ての紛爭を持ち出すと考へる意思の如何によるものである。これは、主要な點である。卽ち、唯、若し各國、各國民が、國家の×權を放擲して、その紛爭を、國際的處理機關に委任する用意がある場合にのみ、國際間の關係は、進捗するものである。これは、より偉大な目的達成の爲には、個々の力と自由を放棄する意味でもある。

【問】平和運動に關して、指導者は必要なりや、否や、如何。

【答】私は、絶對に、指導者としての人又は機關を創造することは出來ないと考へる。若し道德力が斯かる指導者の爲めに、發見されれば、その時には、指導者も輩出するだらうが、其

れ以外には、不可能である。國際聯盟に就いては、問題は簡單だ。同聯盟は、事業を開始したがその進む路は、何處へ行くのか見當がつかないでゐる。聯盟は、何等の結果を得る意思がなければ、何故、熟練の人士を招聘したのであらうか。

【問】ジュネエーヴ議定書に就いて、博士の所感を問ふ。

【答】我々は、少しでも、主張をまげてはならない。少しのものを得るために、主張をまげることは、大なる罪である。我々は、常にジュネエーヴ議定書の爲めに、奮鬪しなければならない。

【問】婦人問題並びに勞働者階級に就いて、如何。

【答】國際婦人協同組合(International Women's Cooperative Guild)、國際婦人平和自由聯盟(The Womans International League for Peace and Freedom)とか、其他、諸婦人團體がある。而して、我々は、我々の力の達する範圍内に於いて、これらの人々や、機關に働きかけねばならない。婦人に對しては、非常な希望を持つてゐる。先づ、婦人は男子を說いて、×

×義務を拒絶させねばならない。これは、大變な効果をもつものである。勞働者階級の運動に就いても、また同様である。×縮を惡用する政治屋は、勞働者階級に對しては、つねに、×縮が不合理であることを說き聽かせやうとしてゐるからである。

【問】××反對に就いて、博士の所論を問ふ。

【答】我々は、××反對の目的を達成するためには、あらゆる手段を用ひなければならないと確信してゐる。唯、單に、文學を生み出すだけではいけない。各人は、何等かを成さんとする時には、つねに、或物を賭けてもやる樣な覺悟が、なくてはならない。その他の方法は、唯遊戲に過ぎないものであつて、これは、絕對に避けなければならない。

【問】軍縮會議で、妥協を拒む時は、その國家は、死の晩鐘を打ち鳴らす樣なものでないのか。

【答】全く、その通りである。だが、私は、妥協は不可能で、目的を持たないものであるとは、考へない。然し、當地で、求められる樣な妥協は、望みのないものであると信じてゐる。國際間の紛爭が、××で、解決される限り、××を規則のある遊戲と考へることは、不可能で

る。人は、お互ひに、混棒や出齒庖丁で、殺し合ふことが出來る。ある。境遇は人々を支配する。人は、お互ひに、混棒や出齒庖丁で、殺し合ふことが出來る。從來の經驗に依ると、その場合には、人間は、規則等に從屬するものではない。これが、間違つた目的に向ふ、第一歩なのである。

【問】インテリ屬の組織問題に就いては、如何。

【答】××に反對する人は、各々、危險を被むり、且つ、忍ぶだけの勇氣がなくては、ならない。でなければ、彼には、發言の權利はない筈である。眞に、××反對の運動に盡力しやうと思ふ識者は、この原則を、絕えず、總ての仕事に就いて、責任ある日々の仕事に迄で、適應し、同時に、又輿論の攻擊の前にも、勇敢に立つて進まなければ、駄目である。

蛙鳴蟬噪

——(The Cackleing of Geese)——

【註】一九三二年十二月、獨逸の愛國婦人團體が、アインシュタイン博士は、共產主義の信奉者だ、また、W・R・Iの會員であると非難し、獨逸の國務省に對して、同博士の旅券下附願を撤回しろと、强

烈に抗議を申込んだことがあるが、それに對して、アインシュタイン博士が、聯合通信に送つた聲明書なるものが、左の如きものである。

諸君!! 賢名にして、愛國的情熱にもへてゐる、我が親愛なる婦人達の、今回の行動に對して、留意せられんことを。而して、また、雄壯を誇つたローマの權勢も、或る時には、その忠實な家鴨達の冗說に依つて、充たされたことがあることにも心を留められよ。未だ甞て、私は、婦人からして、斯かる激烈な御叱りを蒙つたことはない。また、偶然にも、左樣な場合があるとするも、これ程、多數の姦しい御歷々の方が、團結して、叱言を提供されたことは、私にとつて、はじめての經驗である。

然し、彼女等の纖細な態度は、ほんとうに、正しいものであらうか。

牢固として拔くことが出來ない程、頑丈に作り上げられてゐる彼等資本家を、まるで、其の昔、クリート島の食人王ミノタウルス (Minotawlus) が、美しいギリシャの乙女を、むさぼり喰つたと同じやうに、美味そうに喰ひ殺そうとするもの――しかもそのものは、唯、自分の

女房との內話喧嘩以外は、どんな戰爭にも、正面から反對ばかりしてゐる、野卑な下素男である――を、どうして、貴婦人方の前に、野放しして居いたのであらうか。

【註】やさしい貴婦人までが、この下品な男に、注目されるやうになつたのは、如何なるわけであらうか。

【附記】本章に就いては、左の邦文文獻を參考せられたし。

アインシュタイン著
藤田秀夫氏譯　戰爭と民族に就いて　昭八・七
竹內時男氏著　アインシュタインと其の思想　大一一・一〇
內外新刊新聞社　內外新刊新聞　大一一・一一・二四（アインシタイン博士特輯號）
改造社　改造　大一一・一二（アインシュタイン號）
石原純氏著　アインシュタイ相對性理論　大一〇・一二
モスコースキイ著
高橋誠氏譯　アインシュタイン、思索の路をたどりて　大一一・一一

戰爭に關するフロイドとの論爭

――"Warum Krieg?"―Ein Briefwechsel zwischen A. Einstein und S. Freud. 1933.

アルバアト・アインシュタイン

【註】本稿は一九三二年夏、巴里に本部を置く International Institute of Intellectual Co-operation (Institut International de coopérntion Intellectuelle)（學藝協力國際協會、國際聯盟の分派的機關）がアインシュタインとフロイド兩博士に、依賴せる、戰爭理論に關する二人論爭のうち、アインシュタイン博士が先づ、フロイドにあてたところの戰鬪的平和論にその結論をもつ通信文の飜譯である。

一九三二年七月三十日、獨逸ポツダム（Potsdam）市外カプウト（Caputh）にて

【註】ポツタムとは、伯林の西南十六哩に在るプロシヤのブランデンブルグ州ポツタム區の首都で、其處はアインシュタインが終生をさゝげたる天體觀測その他の實驗に充てられたアインシュタイン塔があることを以て、著名である。アインシュタイン夫妻は、一九三三年三月まで同塔内に生活してゐた。

フロイド敎授に問ふ。

突如ではあるが、今回、ジュネーヴの國際聯盟や巴里に在る學藝協力國際協會の要望に依り、私は色々な問題に就いて、意見を確然と吐露してくれる適材を自選しなければならない次第にて、幸ひ此の機會を利用して、文化斷面に刻まれた現實の諸問題の本質に就いて、尊兄と忌憚なく意見の交換を試みたいと思ふ。問題と云ふのは、他でもない。戰爭の危險から人類を救ひ出す方法がありや否やと言ふことである。實は、學藝協力國際協會が、吾等二人に與へた問題といふのは、以上の意味合ひに於ける戰爭の根本義に關するものである。

この戰爭たるや、先づ生や死が我々の體驗せる文化發展に對して、どう云ふ關係を持つかといふ問題を提供してくれるが、斯かる關係は、今日では、あまりに常識的な問題となつた觀が

ある。ところが實際は、さにあらず、戰爭とは何であるかに對して、從來議論百出であるが、戰爭の根本義を取扱つた論文は、殆んどすべてが、正鵠を脫してゐるやうに思はれるのである。

加之、此の問題を職業柄深く究明せねばならない世間の學者、教授達が、今日では、戰爭理論を云々す可くあまりに不感症患者的で、また彼等學者は、當面の現實から遠く隔離されて、世界の諸問題を靜觀してゐる科學者――科學の研究に沒頭して居るところの――の意見を矢鱈に訊ねたがつてゐる。斯く申したからと云つて、私は一科學徒ではあるが、私の意見を振り廻して人間の意識や感性について、何等かの見識を誇示しやうといふつもりではない。

從つて、私は學藝協力國際協會の委員から依賴をうけた『戰爭とは何ぞや』といふ課題の檢討に當つて、當該問題を明解しうるや否や、甚だ疑問であるが、少くとも、より精確な問題解答への捨石たらしめるために、此の問題の上に橫はる人間の本能的生活に就いて、卑見を二、三披瀝して、以て貴兄の卓識に訴へることが出來れば、私の企ては達せられたといふも可なの

である。

尤も、一般社會人には、戰爭に關する心理學的な相互關係や、從つて、それから生ずる社會問題には了解しにくいきらいがないでもないが、戰爭を科學的に分析することは、蓋し一般社會人にとつても、可なりに關心をもつであらうと信ずる。また、フロイド教授ならば、此の困難な問題解決も、精神分析の立場から、容易に、而かも精緻に叙述し得るであらう、また、戰爭の本質も、精神分析の鏡に照して、はじめて、その何ものであるかが、了解されるものであると信ずる。

先づ、國民主義者が抱だく或種の偏狹さを避けるために、私は、以下、個人的には、當該問題に對して、超越した（云はゞ、支配的な）觀點から、見透して行きたいと思ふ。と言つて、私は、國民主義を排擊するわけではないが、私の言はんとするところは、即ち、國家相互間に惹起するすべての紛糾は、これを、國際協調の立場から解決せんがために、或る立法的な國際的組織——國際裁判所の如きもの——が必要であるといふ信念の普及である。

【註】アインシュタインの戰爭理論の主旨をなすものは、要するに、合法的な國際的立法機關の樹立にある。同博士が、最近、國際聯盟關係の諸團體や、ナチス犧牲者救援會乃至ソヴェート友の會に名前を連ねてゐるのも、右の如き、國際平和の信念からであらう。

私をして、言はしむれば、國家といふものは、宜敷く、この國際的立法機關が宣する命令に追從して、國際間の事變紛爭は、すべて、同立法機關の裁決を待ち、隔意するところなく、その裁決に服すべきである。また、國家は、領土の大小、勢力の强弱に拘はらず、國際的紛糾は、この最高法廷に提出して、その肯否を仰ぐ可きものである。

【註】國際聯盟は、世界戰爭の大慘禍に鑑み、戰爭は人類の生存と文化とを脅威する害惡なるを實感し世界永遠の平和に對する不可避の欲求より生れた、所謂ヴェルサイュ條約に基く、世界的政治團體であるが、世界の二大强權國アメリカとソヴェート・ロシヤとが、同聯盟の門外に置かれ、最近では獨逸や日本が脫退するに至り、現實的國際聯盟は、英佛資本の利益擁護のために存在する感があり、現在では、それは、アインシュタインの意味する世界平和確立のための國際的立法機關とは、言ひ難い現狀を示してゐる。

國際的立法機關の確立、それは確かに信念としては、結構なものであるが、現實的にそれを見れば、或る難關が伴ふてゐる。即ち、國際的立法機關が裁斷を下すためには、元來、裁決は人間が創造した社會契約であるがために、多くの場合、それは同機關外の或る强力の壓迫に依つて甚だしく歪められる傾向を有してゐるからである。のみならず、國際的立法機關自體までが、現實には、政治的强力のために變色されるからである。而して我々が、最とも吟味を加へねばならぬのも、かゝる强力と最高機關との矛盾である。要するに、權力や法律は、國境を越へてすべての上に蔓延する性質をもつてゐるが、社會そのものが、法的秩序を行使するだけの强力をもつ場合には、上述の如き裁決は、社會の名の下に、また社會的利益のために表決されるに至るのである。

【註】アインシュタインは社會（Community）といふ語を使用してゐるが、この場合、我々は、基本社會形態の構成及び分析を必要とせねばならぬ。（關榮吉氏著　社會學研究　四十九頁以下）（高田保馬氏著　社會學原理　九八四頁―一、〇〇〇頁）（高田保馬氏著　社會と國家　九五頁）（加田哲二氏著　社會學概論一六五頁―一八七頁）。

しかし、現在では、斯くの如き超越國家組織を具體化する可能性は、甚だ少いやうである。而して、此の場合に於ける超越國家組織とは、それが具有する權力に依つて、各種の裁決を斷行するところの支配力（服從）の絕對性をもつ機關を云ふのである。

從つて、我々は、最初の原則に戾らなければならない。即ち、國際的協調を欲求し實現するためには、すべての國家が、或る程度まで、無條件に、國家行動の自由——國家主權——を萎縮化せねばならぬからである。從つて、現今の社會情勢の下にあつては、かかる超越的な國際的協定の完全な保障は、如何なる方法を勞しても、期し得ないものである。

即ち、最近十ケ年間に於ける國際協調の實績を顧みるに、世界諸國の熱誠な支持があつたにも拘はらず、それが、不成功に終つてゐるのは、要するに、各國協調への作用を心理的に削減するものが、其の間に、介在してゐるがためであらう。然らば、その心理的障害とは何を言ふのであるか。

私の愚見を差しゆるすならば、その心理的障害とは、あらゆる國家機構內に存在する支配階

級の强力關係が、その國家主權の限度と觝觸するがためである。而して是等の政治的支配力は宛然、欠食兒童の一群にも等しく、その他の經濟的生産部内の活動から生ずる殘飯に依つて、辛くも餘命を繼いでゐる。彼等が恒に願望してやまないものは、只管、射利貪欲でしかない。

國家機構内にあつて活動してゐる、決定的な勢力をもつ少數者は、社會的諸關係を否定して謂はば「家内安全」を計り、自己權勢の强化のために、武器を製造して、賣買するところの一握りの集團としか考へられない。

【註】要之、戰爭とは、化學や工學と同じやうに、科學(Science)である。と同時に、それは商賣(Trade)である。(Scott Nearing—War. p4 中川龍一氏譯戰爭五頁)封建時代に於いては、戰爭は、國王同志の最高スポーツであつた。ところが、實業家や製造家や、銀行家が擡頭して、一國の政策を左右する時代になると、戰爭は、スポーツではなく、純然たる一つの商賣(Regular Business)と化する。(Lehmann-Russbüldt—War for Profits)(Bernad Shaw-Major Barbara)だから、スコット・ニヤリングは、戰爭とは何ぞやといふ質問に答へて、次の如く言つてゐる。「技術的に言へば、戰爭とは科學である。經濟的に言へば、戰爭は幾百萬の生活の糧を作り出して、幸運なる小數者に尨大な利潤を生む多岐雜多な商賣である。これを政治的に言へば、戰爭は、彼等の權益擁護とその擴大化の手

段として使用される支配者階級の武器に他ならない」と。(Scott nearing—War. P, 10.)

然し、この簡單な事實を認めただけでは、當該問題の根低を組成する實體を、價値評價するには、僅か初步の試みにしか過ぎない。而して、同問題の本質は、斯かる事實の上に、さらに錯綜を極めてゐる。それは、少數者の權力が、如何にして、大多數の人間の意志を屈折させてしかも見事に、それを操縱し得たかといふこと、そして、また、その大多數の人間の意志は、如何なる理由に基いて、少數の欲望獲得の實現のために、戰爭の渦中に投ぜられ、苦惱し、多大の損失を招來せねばならないかといふことである。此の場合、斷つて置かねばならぬのは、大多數の意志について云々する際に、私は、敵を攻擊することは、國防の最善の方法であるといふ信念(註、クラウゼウイツツ將軍の信念は、これである)のもとに、民衆の最高權益を擁護し、職業のために、戰爭に參加せざるを得ないところの、すべての階級から選出された「神聖なる兵士」を見逃してはゐないことである。

【註】スコット・ニヤリング著、戰爭論六十二頁には、この點を要約して、左の如く述べて居る。
『大多數者は、戰費を支拂ふが、戰爭に勝たうと、負けようと、何づれにしても、大多數者の負擔には變りはない。ところが、少數者は、屢々戰爭企業に依つて、巨利を占める。若しも、決定的な戰勝を博すれば、彼等は巨富を獲得し、領土を擴大することが出來る。さらに、連戰連勝の場合には、曾てローマやイギリス帝國がやつた如くに、全世界を統一し、それを搾取することが可能となる……』(正木千冬著戰爭經濟學二〇頁―三一頁)(ジノヴィエフ著佐野學譯マルクス・エンゲルスと戰爭問題、白揚社版一六七頁―一七三頁)(ニコライ著戰爭の生物學―山本宣治譯―三一七頁)

更らに、この問題を明白にするためには、我々は、少數者が、今日で言へば、即ち支配者階級が、學校や新聞は、申すまでもなく、敎會に至るまでも、自由自在に操縱してゐる事實を、指摘すれば、充分であらう。斯るが故に、少數者は、大多數者の感情や理性を編成改へしたり、轉向させたりすることが出來るのである。

【註】戰時に於けるプロパガンダや、大衆獲得の方法に關しては、次の如き著述がある。
一、Lasswell—propaganda Technique in the world war. 1933.
一、田中豊著、戰爭と宣傳、昭六・一〇
一、內務省警保局編、獨逸プロパガンダの研究　六七・七

一、東邦通信社調査部編、次の世界戰爭と共產黨の軍事政策　昭四・六
一、白揚社譯（レーニン）アヂテーションとポロパガンダ　昭五

然し、これだけでは、這般の事情の全般を、言ひつくしたとは言へない。問題は、まだ未了のまゝ取り殘されてゐる。と言ふのは、彼等、少數者の目論見が、所期の計畫通り進捗して、大多數者の野蕃な感激をそそりたて、遂には、彼等の生命を投げ出させたのは、果して、何故であらうか。この疑問に對する回答は、一つしかあり得ない。

何となならば、人間には、元來その性質のなかに、怨恨や破壞を欲求するところの、或る本能衝動が祕んでゐるからである。平常の場合では、かゝる破壞的本能は、潜伏してゐるが、非常時に際して、それは、突發的に爆發する傾向を多分に有してゐる。しかのみならず、そう言ふ心理的作用は、協同的な意識の力を享けると、容易に沸騰し、活動的狂燥狀態に這入るものである。だが、しかし、我々が考慮を拂つてゐる多くの要素を綜合することは、恐らく、至難な藝であらうし、これは、その道の專門家（註、精神分析學者）が、人間のかゝる本能を探究す

ることに依つて、始めて、解決されるであらう一つの謎である。

【註】ニコライ教授は、言つてゐる。思慮ある人で、戰爭の何かよいところを述べた人は、未だ嘗て一人もない。然るに、今日は、殆んどすべての人が、戰爭を愛好し且つ讃美してゐるのは、何故であらうか。元來、「理性」は、戰爭をば決して是認する事は出來ないし、又將來も是認しないであらう。それに、近代人が是認させようと試みたが、それは、無駄にも、失敗に終つてしまつた。このことは、古人もよく知つてゐたから、それ故に、戰爭を呪咀したのであらう。しかし、古人は、如何に人間の好戰本能が强いか、それがすべての理性よりも、猶底深く、人間意識に根ざしてゐるかを知らなかつた。此のことをば、近代人は戰慄し且つ讃嘆しつゝ經驗したが、しかし又もや誤つたのは、此の本能が、我々すべての中に、熾烈であるから、それを讃美しなければならぬと信じたところにある。正當な判斷は、此の兩面を知る事によつてのみ生ずることが出來る。然るに、最とも生一本の戰爭反對者でも、何かしら、其を贊成する樣なことを言つてゐる。一種根元の衝動、すなはち、人間の力も奧深い深泉を想起させる何物かゞ、我々をして戰爭を愛好せしめるのではあるまいか。(ニコライ著、戰爭の生物學、山本宣治氏譯、二九―三〇頁)(小泉丹氏、戰爭の原始形態　三―一二頁)

扨て、最後に、我々が研究せねばならない問題は、人間の心理的興奮の發展を阻止せしめて以て人類をして、上述の如き憎しみや、破壞の心理狀況に陷入らしめぬことが、可能である

か、どうかといふことである。而して、以下、我々は所謂「文化的」に立ち遲れてゐる大衆（註、組織をもたない浮動的な意識形態）に就いて論じて見やう。我々の經驗に依れば、是等不幸な共同的暗示に掛りやすい（註、突發的に本能を改變する）のは、むしろ、いはゆる「インテリ」（知識層）（Intelligentzia）と稱する一群であつて、要するに、「インテリ」（知識層）であることが、生產と直接に接觸してゐないがために、たゞに、印刷された紙（註、書籍を云ふ）を通じて、形式的に、一番やさしい方法で、また、そつくりそのまゝ、すべてのものを攝取するの傾向があるために、價値のない日和見的な生活をせねばならなくなり、彼等インテリゲンチュアは、應々にして、好戰的本能の奴隷と化するのであらう。

【註】知識者並びに中間階級については、左の如き、邦文文獻がある。
隈部征夫著、中間階級の硏究（一―一八頁）
青野季吉著、中間階級論（春秋文庫のうち）
加田哲二氏、中間階級の一考察（三田學會雜誌、昭八・七・一―二頁）
不破倫三譯（ゾンデル）新帝國主義論（一七〇―一七六頁）
室伏高信著、中間階級の社會學、昭和七・六・日本評論社

以上の所論を要約して、わたくしの結論をのべる。すなはち、わたくしは、これまでのところで、たゞ、國家間の戰爭、換言すれば、國際的紛爭のことのみに言及して來た。が、しかしわたくしとても、人間の攻擊的本能は、また、他の形式や、別の條件の下で、作用することはよく了解してゐる。例へば、內亂（Civil Wars）といふものは、昔では、宗敎上の目的から發生したものであるが、今日では、それを、社會的機構の要素に從つて生ずるものであり、または、それが、民族的少數者の迫害なぞから惹き起されるものであることを知つてゐる。

しかし、人と人との間の、もつとも典型的な、また、もつとも熱狂的にして無謀な形である紛爭を、わたしが、ことさら、くどくどしく論じ立てたのは、おそらく、そうすることが、すべての武力的抗爭を如何にすれば根絕せしめるかの對策を發見する、もつとも、適切なやり方であると思つたからである。

文明協會譯、インテリゲンチア　大一三
岩波書店編、中間階級問題（雜誌「思想」特輯號）

【註】アインシュタインは、戰爭の本質、戰爭の社會心理學的な研究をなすことによつて、世界平和への道を辿らんとしてゐるものの如くである。

さらに、われわれは、戰爭の心理的解釋に就いて、ニコライ教授の所說を述べ、アインシュタインの所論と對して、研究してみることとする。

ニコライ教授は言ふ。好戰慾は、一種變妙な本能として、民族の血の中にあつて、時が來れば（註非常時化）現れて活躍するが、平和の時には、其の樣な酩酊は、人工的に作らなければならない。好戰本能は、人類にとつて、必ずしも、不可欲、或は特有な屬性ではない。人間がその本性に從へば、最原始時代から、平和な社會的動物である以上、好戰本能は、むしろ、逆に、人類の思想の汚辱として說明されてゐたのである。この事實は、人類の解剖學を少しでも、研究すれば、判ることである。（ニコライ著、戰爭の生物學―山本宣治氏譯―四一頁）從つて、戰爭は、一般生物にあつては、單純な生物學的鬪爭、即ち生存そのもののための鬪爭であるが、人類にあつては、戰爭は、必ずしも、好戰的本能から生起するものではなく、一定の社會的生活組織の支持又は發展のための鬪爭である。（長谷川如是閑氏、戰爭論　二一七頁）

アインシュタイン博士が、戰爭とは何であるかに就いて、科學的な解決をあたへやうと試みてゐるのも、この點にあるやうだ。一般生物は、嚴格な意味に於ける戰爭をもたない。戰爭は、人類の社會組織に於てのみ發生する現象である。從つて、戰爭を、たゞに、心理學的に說明するわけには行かぬのである。戰爭の社會的究明については、エヌ・ブハリンの名著「ミロヴオーエ・ホズヤイストヴオー・イ・イムペリアリズム」―野村武一氏譯「世界經濟と帝國主義」二二五―二五四頁參照）

扨て、われわれにとつて、もつとも緊急的な焦眉の問題（註、戰爭）の檢討に對して、貴兄が、これまでの幾多の論文のなかで、或は直接的に、或は、間接的に、多くの回答をあたへられてゐたとは存じますが、併しながら、特に、貴兄の輓近に於ける諸研續に照し合せて、世界平和に關するこの問題の分析をこゝろみられんことは、まことに、われわれ人類にとつて、有難いことである。また、世界平和に對する貴兄の一つの提案（註、戰爭の精神分析）によつて戰爭に對する、さらに新しい効果的な方策が生れてくるにちがいないと信ずる次第である。

アルバアト・アインシュタイン

【註】戰爭に關するアインシュタイン博士の理論は、卽ち、上述せる如く、徹底的な世界平和主義的なもので、科學的な戰鬪平和論とも云ふ可きものである。而して、更らに、彼の社會理論は、如何なるものであるかと云へば、ヴェ・ユリネツツに從へば、それは、辨證法的唯物論を支持するもので、彼の理論は、數學の純粹に質的な分科たるトロポロギイ―位置解析―（註、ケレケヤルト『トロポロギイ講義一頁』）と結合して、現在流行の「自然辨證法」に一つの基礎をあたへたものである。（ユリネツツ著、精神分析學とマルキシズム、陶翙郞氏譯、九頁）

アインシユタインに就いて

アルバァト・アインシユタイン（一八七九年三月十四日生れ――）は、申すまでもなく、現代最高の獨逸理論物理學者で、「相對性原理」の名とともに、世界的榮光を担つてゐるユダヤ系の獨逸人であるが、また博士は、勝れたる進歩的社會思想家でもある。

彼の名ほど、最近の十ケ年に於て、科學者並びに、一般世人の間に、類例のない偉大なる學者並びに思想家として、強く感銘せられたものは、なかつた。一たび彼の相對性理論が、世に傳へれらるや、すべての人たちが、爭つて之を知らうとし、そして、今更に、彼の革命的思想と雄大無比な內容とに驚嘆したのであつた。かやうな出來事は、恐らく、將來の自然科學界に

於いても、極めて稀にしか起り得ないであらう。(石原純氏「アルバアト・アインシユタイン」——春秋社、大思想エンサイクロペディア、五卷、自然科學三七一頁——)

アルバート・アインシユタクンは、一八七九年三月十四日、獨逸のウルムに生れた。幼時その兩親とともに、ミユンヘンに移住し、そこで、小學校及びギムナジウムの敎育を享けたのである。彼の氣質は、甚だ沈思的であり、時には、神秘的な夢想に耽る有樣であつたが、特に、數學に秀で、また、物理學に興味をもつて居た。一八九四年に再び、兩親に從つて、伊太利のミラノに移つたが、彼は、半年の後、修學のために、スヰスに赴き、アラウの州立學校に學び、次いで、二年後に、チユーリツヒのポリテクニウムに入學した。そして、一九〇〇年に、二十一歲で、同師範科を卒業した。彼はそれらの學生時代に、既でに運動體の光學に就いて、獨學で、研究してゐたと傳へられてゐる。また、彼は、幼時から、音樂を愛好して、自ら樂器を彈じ、特に、ヴアイオリンに於いて優れたる技能をもつてゐた。また詩文學を解して、これにも親んでゐた。彼の風丰が科學者であると共に、また、如何にも、奧床かしい詩人肌である

のは、これに依つて、推測することが出來る。

彼は、なほ、ユダヤ人の家系に生れたために、獨逸なぞに於いて、續々人種的迫害をうけたけれども、その對象として、彼の思想は、恐らく餘りに、高遠であつた。即ち、かゝる事情のもとにあつて、彼は、超然として、しかも、むしろ「民族協和」のために、一臂の力を盡くしてゐた。

だが、アインシュタインにとつては、ユダヤ建國とか、國籍がどうであるかなぞは、あまり重要な問題ではなかつた。彼の兩親がイタリイへ轉住してしまつたので、彼はドイツの國籍から離脱されやうとした際、久しくそのまゝに放任してゐた如きは、如何に、彼が國籍に對して無關心であつたことが了解される。全く彼にとつては、彼が世界の一分子であるといふことだけで充分であつたのである。國境のない平和的な世界こそ、彼のもつとも深く望むものであつたからである。

要するに、彼が、自然科學に於ける最大の偉人として、尊崇せられてゐるニユウトン以後に

於いての、最高の自然科學者であることには、だれも異論を差しはさむものはない。彼がもつとも力をつくした自然科學の論文——特殊相對性理論や、光量子假說やブラウン運動の理論など——とともに、それは永遠に殘るであらう。稀な、そして奇蹟以上に、より確かな現實的な一つの驚異として。加ふるに、戰鬪的平和論者の名に於いて。

既でに、一九一四年十月下旬、アインシュタイン博士は、ヴィルヘルム・フエルシュタア（獨逸教育學者、一八六九年生れ——）や、ゲオルグ・エフ・ニコライ（獨逸生理學者、一八七三年生れ——）等と共に、かの『九十三人の十月宣言』（註、「九十三人の十月宣言」とは、一九一四年十月上旬、獨逸西部戰線が、佛軍の逆襲で一時的失敗を來した當時、同國學術界の九十三大家がそれ〴〵署名した全獨主義的宣言書で「文明世界に對する宣言」と題する六項目よりなるファッショ・パンフレットである。）に對する一つの回答として、『歐羅巴人に對する宣言』を公表し、世界大戰に關して、早くも、平和的提唱を試みたことがある。同宣言の全文を掲げれ

ば、即ち左の如くである。我々は、そこに、アインシュタイン博士等の眞摯な文化擁護と平和主義を窺ふことが出來やう。

歐羅巴人に對する宣言

【註】前述せるが如くに、一九一四年十月初旬、獨逸の九十三名の識者が、祖國獨逸は、戰爭の害に惡對して、何等の罪もない旨を宣した宣言書を發表したが、之れは、獨逸の軍國主義は、全く國民を保護する立場にあるものであると、文明諸國に訴へたものであつて、アインシュタイン博士等は、公式に、此の宣言書に署名を求められなかつたが、十月中旬に至つて、彼は、ゲエ・フア・ニコライ教授や、樞密顧問官ウイルヘルム・フェルシュタア等と共に、これに對抗して、「反對宣言書」EncounterManifesto を、歐羅巴人に向つて公表した。この點については、アインシュタイン著、戰爭反對論、(ジヨン・デイ・パンフレット)、一頁參照。

『工學と通商とは、明らかに、吾人に事實上、國際的連關が存する事を認めしめ、且つ、吾人を、世界共通の文化にまで、促進しつゝある今日に於いて、文化のために、其の共力の誼を中絕せしめたる事、今の戰爭(註、世界大戰を指す)より激しきは、曾て無し。斯くも、

著しく意識せらるゝ所以のものは、蓋し、其の中絶によりて、吾人の甚だ苦痛を感ずる所の共通の連繫の數、甚だ多かりしを以て也。

斯樣に、其の狀態に驚く必要なくんば、世界文化を考ふること甚だ薄き人々は、其の主義の支援のために、戰ふべく倍加せる責任を有す可し。されど、世界文化を念頭に置くと、期待す可き人々、卽ち學者、藝術家が、今日に至るまで、殆んど專ら語りし所は、事實上の連關の中斷と共に、其の關係の永續を希望する事すら消滅せしかの觀があり。其は、彼等が明らかに一種の戰爭氣分より語りしにて、少くとも、平和について云々する所なし。

斯かる氣分は、何等愛國の熱情に語を籍るとも、宥恕す可きには非ず。其は今まで、全世界が、文明の名の下に了解せしところのものの內容に背き、また斯かる氣分が有識者共通の物たらんには、其は不幸なるべし。

而して、其の好戰氣分たるや、唯に文化のために、不幸たるに止まらずして、今暫く、すべて眼前に蠻行を敢てなして求めつゝある究極の目的、卽ち各國家の國民的存在に對しても

不幸たることは、吾人の信じて疑はざる所なり。

世界は工學のために小となる。今日歐州大半島の諸國の互に密接せることは、恰も、昔日の地中海岸の更に小なる半島に於ける諸都市の如し。而してヨーロッパ（否、吾人は殆んど世界と言ひ得べし）は、既でに多種多樣の關係に因りて、禍につけ、幸につけ、互ひに結びつけられたる一個の單位なることを示すものなり。

故に、ヨーロッパが、其の全體の組織不完全なるがために、嘗て希臘にてありし如きと同一の悲劇的運命に陷らざらんやう、少く共、試みをなし、又防止を企つるは、是れ、歐州に於ける有識の仁人の爲さざる可からざる義務なる可し。ヨーロッパも同胞の戰ひにより疲弊し、終に滅亡すべきものならんや。

蓋し、現今の激烈なる戰鬪は、一に凱旋者をも出さず、恐らくは、戰敗者のみを殘す可し。假令、戰爭の爭點は、今猶不分明なりとも、平和の條件が、將來の戰爭の源泉とならざるやう、總べての國の識者は、凡ゆる勢力を之に傾倒すべく、務めざるべからざるなり。な

ほ、此の戰爭に依りて、全ヨーロッパの狀況は、宛然、可動可鍛の狀態に陷りたれば、此の事實をば、歐羅巴より一の有機的單位を創造するに利用す可く、其がために、工學的且つ又知識的要件は、充分備はりたれば、識者は此處に於て一層の勞を致さざる可からざるなり。

如何にして、此の歐州の秩序が可能なるか、今、此處には、措いて論ぜず。唯、吾人が基礎として力說せんと欲するのは、卽ち其の土地と住民と文化とを守らんがために、歐羅巴一單位として起つべきは、今なりとは吾人の確信して疑はざる所なり。

吾人は、此の意志が多くの人に、潜在せることを信ずる。而して此の共通の意見を發表すべく、一の勢力をなし、働かんことを希望する。此の目的のために何にも勝りて必要なるは歐羅巴文化を念頭に有する人、卽ち斯くて、ゲーテが、一度嘗て「善き歐羅巴人」と豫言的に呼びたりし人々すべてが、共力することなり。銃砲の轟音の眞只中にても、彼等集りて聲を上ぐれば、全く聞かれずに、消へ去る事なからん。我等其の望を棄つ可からず。況んや、殊に其の「明日の善き歐羅巴人」の中に、今日、知識階級に於いて、旣でに、尊敬と權威と

を有するすべての人を見得る時に於てをや。
されど、其の歐羅巴人が、先づ集る事必要なり。吾人の所謂「歐羅巴人」、卽ち其の人にとりて、單に地理學的の一概念に止まらず、更に心中の一重要事たる如き人々、斯かる歐羅巴人が歐羅巴に在る事充分ならば、(我等、さあらんことを希ふ)一の歐洲聯盟を招致すべく試みられんことを欲す。其の折、彼等は語り、而して決す可し。
吾人自身は、其が爲めに、單に奬勵し且つ招待せんと欲する者なり。卿、若し吾人の同志たらば、此の歐羅巴の意志に對して最も遠く迄響く反響を作らんがため、直ちに署名して以つて大いに決するところあらんことを、吾人は希望して已まざるなり。(山本宣治氏譯に依る)
以上は、歐州大戰當初に際して、ファッショ的一握りの偏狹な全獨主義學者に對するアインシュタイン等の反駁文であるが、最近恐怖的なナチスの行動に對して一矢むくいてゐる博士の

近事と併せて、そこに相通ずる進步的な批判水準を我々は知り得るのである。

【註】 Marley, L—The Brown Book of The Hitler Terror and the Burning of The Reichstag. 1933. P. 160—193. 333—340 並びに序文

また我國の勞働組合運動が、全く停滯して、アナキズムが凋落した大正十一年十二月の思想動搖期に、アインシユタイン博士は、日本を訪問して、新學說「相對性原理」の體系を、我が國の科學界及びあらゆる知識層に向つて、發表したことがある。その當時、他面に於いて、博士は、世界主義の立場から、科學的な平和論の一斑を我國有識階級の文化意識に對して訴へて行つたのだが、しかし、この後者の業績は、一般的に知られなかつた。

【註】 改造、アインシユタイン特輯號、大一一•一二•參照。

わづかに、博士が、同十二月十日、京都「みやこ」ホテルに於て、ニコライ敎授の名著『戰爭の生物學』の日本譯への序文として、譯者山本宣治氏にあたへた書簡のなかに、博士の戰爭論を窺知するにすぎないが、それは次の如くである。

『戰爭は無意味であり、而してその戰爭を防止するための或る國際的組織が必要であると言ふ信念を普及させることは、今日の政治的著述の最とも重大なる任務であると、私は考へる。この見地よりして、私は衷心より本書（註、戰爭の生物學を指す。）の普及を悦ぶものである。本書が、かゝる問題に對して、實に多方面な且つ深刻なる刺戟を惹起し得るものであり、歴史によつて累積したる根太い偏見を打破するに適したる著述であるがために。』

（山本宣治全集、第一卷、戰爭生物學上卷一頁のアインシユタインの序文より）

更らに、一九三三年三月、荒れ狂ふヒツトラアのユダヤ人壓迫の槍玉に上り、アインシユタイン博士は、獨逸ポツダムにあるアインシユタイン塔。（註メンデルゾーンが一九二一年に竣工した獨逸最大の天體觀測所）を逐放され、難をイギリスに避けたが、同地にあつて、博士が會長になつてゐる國際ユダヤ人協會の委員の手で『ヒツトラア恐怖政治のブラウン・ブツク』（一九三三年九月二日刊行）を、出版せしめたため、屢々、暗殺の危機に瀕した。

【註】 同書のなかで、例の「共産黨が獨逸議事堂に放火する計畫が、二月廿四日リーブクネヒト會館襲擊の際發見された」といふプロシヤ政府の報告書を捕へて、眞に然らば、プロシヤ內相で、國會議長である、ゲーリングその人が、何故に適當なる手段をとつて、議事堂を守らなかつたかと、ヒツトラア陰謀のからくりを暴露したためである。(東日、昭八•一〇•一)(Marley, L—The Brown Book of The Hitler Terror. 1933. P. 43—53. P. 313—332.)

ナチスがユダヤ人に對して行つた大膽な行動は、果して、文化的であらうか、また、非文化的であらうか。そのなかでも、アインシユタインに對する警察的迫害の如き、アインシユインの財産沒收の如き、博士が、現代に比類なき文化的貢獻者である限りに於いて、そも〳〵、人類全般に對する責を感じないといはれるであらうか。

アインシユタイン博士が、ベルリンのアカデミイの切實な招聘をうけたのは、一九一三年のことであるが、當時、アインシユタインはスウヰス、チユーリツヒのポリテクニウムの教授であつたし、その國籍も、スウイスにあつたのである。であるからして、ドイツにとつては、どこまでも、他國に屬するアインシユタインに、來てもらうた形になつてゐる。わざ〳〵他國人

を招聘して、反ユダヤが偶々ナチスの擬制的な運動目標であつたがために、一九三三年に至つて、これに報ゆるに、國外追放や財産沒收を以つてすることは、どんな辯明もとりあげることなしに、非難されなければならない。

【註】勿論、アインシュタインをドイツに迎へるに際して、アインシュタインがユダヤ系の出であることや、ドイツに生れながら、國籍をスウヰスに移してゐたことなぞの理由で、一部のドイツ人の反對があつたと傳へられてゐるが、プランクや、ネルンストのやうな有力な人々が、熱心に、招聘を主張したので、遂に、これが決定されたとのことである。そして、ベルリン大學の敎授として、また、アカデミイの會員として、さらに、カイザア・ウイルヘルム協會の物理學硏究所長として、一九一四年のはじめにドイツに赴任したのである。かやうな事情からしても、普通ならば、これを些細な事柄で追放するといふのは、アインシュタインの人格をも無視した大なる侮辱でなければならない。もつとも、ナチスにいはせれば、アインシュタインは、アメリカやフランスで、ドイツに不利な言語をなしたとし、これを反逆的であるとまで曲解してゐるのであらうが、公平な局外者から見るならば、彼は一人の平和主義者に外ならないとするのが、おそらく、眞實である。――（石原純氏、平和主義者としてのアインシュタイン、東朝、昭八・一二）――

だが、その後、反ナチス運動の一環をなしてゐる「國際的ナチス犧牲者救援委員會」の名譽

會長として、世界の平和論者と提唱した最近に於ける博士の行績をかへりみるに、アインシュタイン博士は、世界大戰以來、終始一貫したところの徹底的な平和主義者であり、國際平和への一革命家であることが理解される。

アインシュタインは科學的革命家であと云ふ人があるが、まことに、その通りである。何とならば、博士の感激的思考が、自然科學の講壇から街頭に投ぜられたときに、其處に蠢く社會的矛盾や偏執さが、彼にはあまりに鮮やかに映じたがためである。『戰爭の再來は、人類の全文明を破壞するものである』(竹内時男氏著、アインシュイインとその思想)と絕叫する時、彼はまた透徹した眞の意味に於ける平和欣求者に見へる。

我々が、アインシュタイン博士に關して闡明しなければならないものは、單に彼の相對律の法則に止まらずして、博士の純眞な內觀の世界を展舒し、現代社會との聯關に於いて、アインシュタインの世界觀を檢討することではなからうか。かゝる意味に於いて、我々は、戰爭を當面の問題として、アインシュタイン博士と彼の世界觀を明らかにす可く、試みた次第である。

ジークムント・フロイドの戰爭批判

戰爭に關するアインシュタインとの論爭

——"Warum Krieg?"—Ein Briefwechsel Zwischen A. Einstein und S. Freud. 1933.

ジークムント・フロイド

【註】本稿は、フロイド博士が、一九三二年七月、アインシュタイン博士より、戰爭に關する質問を享けたのに對して、同九月、アインシュタイン並びに學藝協力國際協會に對して、回答した、精神分析學から見た博士が戰爭を取扱つた覺書の飜譯である。フロイドの戰爭に關する論文は、嘗て、歐洲大戰當時、フロイド學派の機關雜誌 Imago（成蟲、IV. 1915.）に所載されたところの「戰爭と死の精神分析」なる論文があるが、それは、戰爭と死との必然性及びそれから生起される失望、興奮等を取扱つたものであるが、當時のオーストリイの社會狀態が、少しく、フロイド博士の所論を拘束してゐ

ると見られ得る個處があるので、我々は、最近のフロイド博士の戰爭論を掲げて、アインシユタイン博士の平和論と併せて、研究す可き必要を感じたのである。

一九三二年九月、ウヰーンにて

【註】ウヰーンは、下部オーストリー州にあるオーストリイの首都で、フロイド博士は、四歳の幼時から今日まで、この地に住んでゐる。

アインシユタイン教授に應答する。

戰爭と言ふ當面の問題に就いて、意見の交換をしたいと言ふ貴君からの書翰に接したが、このことに就いては、小生、心から賛意を表する次第であるか、もともと、同問題は、貴君のみが興味をもつ問題ではなく、一般の社會人にとつても、緊急的に多大な興味をそゝるところであらうと信ずる。

物理學者と心理學者といふ我々兩名が、自分自身の觀點に立つて、この難問題にメスを下すことは、各々見方こそ異なれ、要するに、終極では、共通の土臺の上に立つであらう一つの問

題を――貴君は問題を、今日のわれわれに知り得る範圍から選ばれることとわたくしは豫期してゐたのであるが――貴君が、提供してくれたことを、先づ、欣快に思ふ次第である。だが、貴君が提供された問題、即ち、どうしたならば、人類は、戰爭の危險から免除され得るかといふことは、わたくしにとつては、意外な問題であつた。

さらに、斯かる大問題に對しては、私の（否、敢へて、我々と言ふ）無能にも等しい思索を顧りみて、實は啞然たらざるを得なかつた。何となれば、右の問題は、我々科學者の爲す可きものではなく、宜敷く、政治家が、當然、取り扱ふ可き性質のもので、それは、實際的な國家政策に屬する問題であるからである。

しかし、貴君が、單なる科學者乃至は物理學者としての學識を振り廻すことなしに、この難問題を社會人として、取り扱つてゐることの態度には、私も同感であるが、貴君が人類の友として、國際聯盟の求めに應じて、早速戰爭論を記述されたことは、ノルウェイの北極探險家フリードヨフ・ナンセンが、救はれぬ故鄕を失ひ、餓死に瀕してゐる世界大戰の犧牲者等を救助し

たことに等しいものと考へる。

【註】フリードヨフ・ナンセン（一八六一年十月十日生—一九三〇年五月十三日死）は諾威人で、北極検險家であるのみならず、有名な政治家である。ナンセンは、一九〇八年英國へ諾威國使節として派遣されて、その外交的手腕を見止められ、また、一九二三年には、ローザンヌ會議へ、民族問題解決の試案を提出してゐる。その主著、左の如くである。

The First Crossing of Greenland. 1890.
Farthest north. 1897.
In Northern mists. 1911.

更らに、また、私は、實際的な諸問題を公式化することは出來そうにもないが、たゞ、この「戰爭を如何に防止す可きか」といふ大問題が、心理學者を如何に悩したかといふことの白告は出來そうである。

この點について、貴君が書翰のなかで、同問題の基調をなす骨子について、詳細に述べられてあつたことは、謂はゞ、貴兄がわたしの裏をかいて、わたしの御株を奪つて了つた感があ

る。

而して、貴君のこれらの覺醒刺戟に對して、厚謝するとともに、また、貴翰に現はれてゐる戰爭に關する結論に對して、大いに好感をもつてゐる。

斯くて、私は淺學菲才も顧みず、たゞ戰爭問題に對する貴君の學識洞察をその儘應用して、また、わたくしの知る限り、あるひは、假定の及ぶ限り、貴兄の戰爭理論を、以下さらに敷衍して行くにとどめる。

戰爭に就いて、貴兄は、先づ、「權力」(Macht, might)と「權利」(Recht, Right)との關係から說き起してゐるが、これは、同問題を、研究する場合の、一般的な出發點であると、信ずる。が、しかし、「權力」(Macht, might)といふ言葉に對して、もつと、嚴格な意味に於いて、また、より通俗的に、「强力」(Gewalt, violence)といつた方がよいかも知れない。

從つて、われわれは、この「强力」と「權利」とについて、徹底的に、分析をこゝろみて行かねばならないが、兩者は、他の一つより抽出される概念であつて、また我々は、その何づれ

かの起原なり、原始的狀態なりを檢討して行けば、强力や權利が何であるかは、案外、容易に解決され得るのである。

【註】フロイドは、權利「正義」(Recht)(Right)といふ語の代りに、これより一層烈しく生硬な、「暴力」(Gewalt)(Violence)といふ語を用ひてゐる。であるが、この場合に於いて、正義、不正義といふことは、全く曖昧なる常套語であつて、今日では、正義は濫用されてゐる觀がある。プルードンの云つた通り、「正義といひ、義務といひ、貞操と云ふ、これらの坊主や教師どもによつて云ひふらされた言葉は、今や單なる臆說、空疏なるユートピア、そして樣々の不確かな偏見を擁護するにすぎない。」(George Sorel—R'eflexions sur la violence. 1908. 小野十三郎譯、暴力の倫理四—五頁)即ち、既成宗教と倫理とは、惡德の源泉たるにすぎず、また、社會改革の傳導者、空想主義者、民主主義者の徒は、あまりにも、正義の觀念を濫用しすぎたために、此等は、最早、唯、修辭學の練習か、或は勞働運動に關心をもつてゐる人達を、迷はすための詭辯としか考へられなくなつてゐる。かゝる意味に於いて、ジョルジュ・ソレルは、ブルヂョアと社會民主主義者の暴力忌避の倫理觀を排擊して、「暴力の倫理」に哲學的社會學的是認を與へてゐるのである。正義と暴力については、ソレル「暴力の倫理」(小野十三郎譯)三—七〇頁參照。

だが、此處で、貴君の宥恕を乞ひたいことは、私が新しい論據として、記述するであらうことが、既でに、一般的に既知のことであるかも知れぬが、ものの順序として、先づその事實から記述する。

人と人との間に於ける利害衝突は、原則から云へば、暴力に訴へることに依つて、解決されるものである。それは動物界の現象と同一であつて、なにも、人間だけが、それから除外されるべきものではない。

【註】クラウゼウキッツ將軍は「戰爭とは全くカメレオンの樣なものである。具體的な場合々々については、その性質に幾分かの變化が生ずるが、その現象の全體について、その傾向を見る時、戰爭を遂行せしむるには、三つの重要なる目的がある。第一は、敵の武裝勢力を破壞、征服すること、第二は攻擊の物質的元素及び敵軍存在の資源を占領すること、第三は、輿論を我物にすることである」と言つてゐる。（註、Crausewitz—vom Kriege. 馬込健之助譯三五頁。Murray—The Reality of war. 荒木武正譯、三三頁）即ち、戰爭とは、クラウゼウキッツ將軍が、これに絕對戰爭の名を冠してゐるやうに、その本來の目的は、敵を全く殲滅するにあつて、そのためには、暴力を行使することが必要となるのである。

クラウゼウキッツ將軍が、戰爭は、暴力の無限的行使であるといつたことは、また、將來の戰爭に於いては、最大の廣さに於て、また、深さに於て、この言葉は、實現さるべきものである。(註、小泉丹氏、戰爭の原始形態、四頁)

それにも拘はらず、人間は、强力に訴へることをせずに、理論鬪爭に走つたり、ある場合には、抽象的な思想の最尖端をとりあげて、微溫的な方法で、その問題を解決するやうに見へる。しかし、こう云ふやうな上品な手段が、採用されたのは、ずつと、後のことであつて、原始的には、群小社會の間にあつては、所有權や人間意志行爲の問題は、野蕃な暴力を行使することに依つて、決せられた。だが、やがて、道具が、使用されるやうになるとともに、暴力は更に强められて、且つ、道具を以つて、腕力の代りにするやうになつたのである。即ち、戰爭に際して、勝利者となるためには、武器が一番有利な方法であると考へて、それを最とも、巧みに使ひ廻すことが必要となつて來たのである。

從つて、武器の出現に依つて、直ちに、智惠のあるものが、强力あるものの地位を奪ひ、精

神の優秀といふことが、最後の勝利を招致するやうになつたが、といつても、人類の闘爭の窮極の意圖は、やはり以前と同樣である。すなはち、智惠が强力に代つただけで、戰爭に於いては、やはり、敵に損失を負はせ、戰鬪力を奪ひ、餘儀なく要求を撤回せしめ、反抗を放擲せしめることにあつたのである。そして人間同士の戰爭が、有効な時に終了するためには、敵をして決定的に戰鬪能力を消滅されること、他言すれば、敵が全滅することにあつたのである。

【註】この點に關して、クラウゼウヰッツ將軍は、「吾々は、作戰計畫を論ずるに當つて、一番緊要なことは、一國家の抵抗力を奪ふといふことであつて、一般的に、(一)戰鬪力の壞滅、(二)敵の國土の占領、(三)敵の意志の屈服である」と言つてゐる。(クラウゼウヰッツ、戰爭論、馬込健之助氏譯、三八—三九頁)即ち、かゝる意味に於て、本戰に於て、敵に打克つことを勝利といふのである。而して、戰略的成功の中、もつとも重要なことは、かくして、獲得したところの勝利を利用することに存する。(マイヤース著、戰略論、關根郡平氏譯、五三—五四頁)

即ち、戰爭の第一の目的は、敵の軍隊を破壞するにある。第二次的にのみ、はじめて、敵の資源や戰略地帶へ完全なる打擊を加へ得るのである。(ニヤリング著戰爭論、中川龍一氏譯、三一頁)戰鬪はあらゆる他の努力を吸收する。敵の軍隊を破壞或は制壓することは、敵の資源に打擊をあたふることに比べて、より有効であると立證された。戰鬪が決定的の行動であり、軍隊が決定的要素である以上、

戰鬪に於いて、一方の軍隊が擊破され、永久に行動力を失つた場合に於てこそ、完全なる決定である。(Constance—Study of war. 八五頁、六頁)

而して、この種の戰略には、二つの利益が伴つてくる。

第一は、敵が捲土重來することが出來ないことである。第二は、すなはち、他の敵をして、自分等もあんな目にあつては、たまらないと云ふ氣になり、戰鬪することを斷念せしめる利益があるからである。加ふるに、敵を殺戮することに依つて、味方は、ある種の本能的慾望——例へば、征服慾にともなふ好戰的本能——を充足せしめ得るからである。

【註】すなはち、大勝利によつて、味方の好戰的本能を滿足せしめることに依つて、輿論は、全く味方のものとなるが、戰爭の目的の一つとして、この輿論をわがものとすることの重要性について說いたのは、クラウゼウキッツの戰爭論である。彼は、これが主要なる作戰であると云つてゐる。(クラウゼキツツ著戰爭論、馬込健之助氏譯、三八—六二頁)

であるが、この場合、敵を殺害するといふ意志とは、正反對の考察が、識者の內に想起され

やせぬかといふことである。即ち、敵軍の戰鬪力を壞滅せしめ、敵の意志をくぢくよりは、敵を捕慮として、拉つし來たり、奴隷の境地に陷し入れて、利せしめた方が、さらに有効であるといふ見方である。

【註】戰爭に依つて、奴隷、即ち、搾取手段を獲得するといふことは、古くから行はれてゐる方法であつて、それは、(一)分捕品、(二)土地移讓、(三)賠償金獲得、(四)貢物納入とともに、戰爭から生ずる直接的な經濟的利得を構成するものであるが、今日の戰爭は、さらに、多岐をきはめ、戰爭からの利潤については、少くとも、經濟的、政治的、また社會的に、これを考察せねばならぬ。是等を一括し、表にして、示せば、即ち、左の如くである。(ニャリング著戰爭論、中川龍一氏譯、三九―六一頁參照)

戰爭の利得

- 經濟的利得
  - 直接的經濟利得
    - 分捕品
    - 土地移讓（資源獲得）
    - 賠償金
    - 貢物
    - 奴隷獲得（搾取手段獲得）
    - 權益確保（食料・鑛產・燃料開發權獲得）
  - 間接的經濟利得
    - 通商上の利得（過剩生產處分）
    - 過剩人口處分
    - 軍事インフレーション
      - 國內需要增加
      - 國內物價騰貴
      - 軍事企業活況
    - ブロック經濟完成
- 政治的利得
  - 輿論の統一（言論機關統制）
  - 支配者階級の權力强化（帝國主義徹底）
  - 植民地獲得に伴ふ軍事的裝置擴張
- 社會的利得
  - 民族混合に伴ふ社會交涉の擴大
  - 慣習並傳統打開に依る新文化發展
  - 社會團體統制化
  - 革命的情勢の絞殺
  - 科學の發達（發明・發見）（國防合理化）

これを要するに、暴力を行使することとは、敵を殺戮することではなく、敵を沈壓させるものであることが判明しやう。從つて、戰爭の根本義は、敵の戰鬪力をくぢき、これを四分五裂にするにあるのではあるまいか。

【註】 敵の武力の破壞、これが戰爭の主要原則であると、クラウゼウヰッツは云つてゐる。(マーレイ少佐著戰爭論、クラウゼウヰッツへの手引、荒木武正氏譯四九頁)

が、しかし、勝利者は、應々にして、戰ひに勝つた際に、敵を全滅す可きであつたと云ふ一種の復讐心が擡頭して來ると、敵を生かして置いたことが、勝利者自身の身の安全を、或る程度まで、危ふからしめるやうな心理作用が生ずるものである。

斯くの如くであるから、原始時代にあつては、戰爭には、超越的な力、すなはち、野蠻な强力行使が必要視される。だから、野蠻時代では、到る處で、是等强力の行使が行はれたのである。

御承知の通り、進化の過程に於いては、事象はすべて環境に應じて、變化するもので、その

事象は、强力から秩序あるものへ、推移するものである。

【註】人間相互の間に於いて、必然的な聯關と、事實的な聯關とが、存することは何人といへども否定する者はないであらう。此の場合、問題となる點は、果して諸關係が、相互鬪爭と相互扶助との孰れに最とも能く適合するものであるが、愛か憎惡か、利他主義か、利己主義か、正義か强制力（暴力）か、世界に於いてその孰れが支配して居り、また支配す可きものであるかにある。（ニコライ著、戰爭の生物學、山本宣治譯、一九五頁）

しかし、この事象の推移とは、何を言ふものであるか。勿論、その推移とは、すなはち、如何に纖弱な力の無いものでも、多數集つて結合すれば、强者を打ち倒すことが出來るといふ、單純な眞理性から生じたものである。換言すれば、結合することが、すべてのものに、力をあたへるのである。（註、L'union fait la force）

この論理を以つてすれば、野蠻な强力に對しても、團結して、これに向へば、容易に、打ち倒すことが出來る。云はゞ、微弱な力であつても、一と度び、一致結合すれば、單獨の强者に對することが出來るのである。だがら、これらの團結者の權力が、とりもなほさず、單獨の强

者（專制力）（强力）に對峙して、「權利」といふものになるのである。これを要するに、權利といふのは、かゝる微弱な團結者の「社會的な權力」にほかならないのである。從つて、權利なるものも、やはり、强力（專制力）であることには、かわりがないものであつて、單獨の强者が使つたと同一の手段を用ひて、同じ目的に從ふものであつて、それを妨げる如何なる單獨の强者へも、この權利を振り廻すのである。その兩者の相違といふのは、實はわづかに、その强力（專制力）を振り廻すものが、一方は單獨の强者であり、他方は、微弱者の結合團體であるといふ點にすぎないのである。

しかし、野蠻な强力から、時代を、秩序あるもの（權利）（正義）へ、轉向させるためには、先づ、心理的な條件が必要である。そして、大多數者の結合については、その心理的條件として、確固としたところの存續性を必要とするのである。が故に、若しも、結合團體が、一つの覇權に對して戰ふためにのみ組織されてゐて、その覇權を獲得すると同時に、解消してしまう程度のものならば、秩序（權利）なぞあつたものではない。といふのは、そこには、存續性と

いふ心理的條件がないからである。だから、そう云ふ際には、强力に自信をもつものが、早速霸權を唱へて、彼の强力（專制力）を行使しはじめる。そして、霸權を繞つての勝敗は、限りなく、繰返され、秩序なぞ、權利（正義）なぞは、出現しないものである。從つて、結合團體はその存立のために、不斷に努力して、巧みに組織を作り上げなければならないのである。そして、また、結合團體は、組織を破壞する反逆（反對勢力）を防止するための掟を設定してその掟——法律——を遵守せしめ、合法的に、强力（專制力）を行使せしめる機關部を設けなければならなくなる。このやうな利害關係を、その結合團體が認めるといふことは、その構成員の間に感情的結合統一や、友愛的な連帶を作り出すものであつて、かゝる感情結合のなかにこそ結合團體の眞實の力があるわけである。

以上で、既でに、わたくしは、言はんと欲したところの問題の要點については、すべて、述べてしまつたやうに思はれる。すなはち、より大きな結合團體へ、權力を移すことによつて、野蠻な强力（專制力）を克服することが、權利（正義）（秩序）（法律）への道であるといふこ

とである。而して、この結合團體といふのは、各構成員相互間の感情の連帶に依つて、互ひに結合されてゐるものを意味するのである。さらに、これ以上、それ以外のことについて言ふことは、凡べて、同語反覆であり、すべて細説であると考へる。

【註】 フロイドは、社會的結合について、個人はそのなかにあつて、自由を缺くものであることは、彼の『群集心理と自我の分析』(massenpsychologie und Ich-analyse. 1921)のなかで、屢々、論ずるところであるが、この場合に於いては、彼は、社會的結合を、その心理的條件から說明してゐる。卽ち結合に對して、之を愛の關係又は、情緒的連帶の存在から、强調しやうといふのである。だが、この社會的紐帶は、決して單一なものではなく、それは指導者への紐帶と、社會構成員の紐帶との二つに分けてゐる。かゝる紐帶が成立して、初めて、社會的結合が發生するものであると言ふのである。(フロイド著、集團心理と自我の分析、長谷川誠也氏譯、五五頁、春陽堂フロイド精神分析學全集第三卷)

これを要するに、社會(結合團體)が、同格の他人の結合から形成されてゐるならば、問題は、きはめて、簡單明了である。もしも、そうであるならば、かゝる集團の法律といふものはたゞその集團の安全を保證するために、構成員たる人間に對して、人がその力を强力として行

使することの人間的自由を、如何なる程度まで、斷念すべきであるかを、決定すれば、よいわけである。しかしながら、かゝる結合狀態（社會構成）は、理論的には、正しいが、現實的には、事態は、さらに複雜多岐に亘るのである。すなはち、實際は、何よりもこの一つの社會群は、多くの不均等な力から出來上つてゐるからである。例へば、男と女とか、老人と、幼年、のやうな、力が違つてゐるものが含まれてゐるのであつて、さては、戰爭や、勝利があるたびごとに、現はれてくるところの、勝利者と敗戰者、これを一言につくすならば、征服者と奴隷の關係を生ずるからである。

【註】フロイドは、かくして、階級論を取扱ふのに、情緒的な紐帶や、愛の關係を以つてしてゐるが、これは、研究を要すべき個所である。
Sigmund Freud; massenpsychologie und Egoanalyse. 1921. 參照。（長谷川誠也、大槻憲二譯、社會・宗敎・文明——集團心理と自我の分析、三一—一三三頁）

從つて、一般的な法則に就いては、先づ、かゝる權力の不均等と言ふ事實を注目しなければ

ならないのである。この權力不均等の關係に於いて、われわれは、法則（法規）は、征服者のために、征服者に依つて作られたものであつて、奴隷階級（Servile classes）は、從つてかゝる權利なぞ、もち合すものではないことを、知らなければならないのである。

從つて、一つの結合團體は、二つの要素の作用に依つて、法則上、不安定な狀態に置かれてゐるわけである。その二つの要素といふのは、左の如きものを言ふのである。

第一の要素は、支配者階級の組成員が、自らを、法則の作用範圍外に、置かうとすることである。

第二の要素は、被支配者階級の組成員が、權利をさらに擴大して、その擴張された權利を、法律化（合法化）せんとして、つまり法律上不均等な權利を、すべての人々に均等な權利に置換しやうとする不斷の努力である。

そして、この第二の要素（傾向）といふのは、社會群のなかに、權力のバランスが、積極的に、變化し出した時に、重大な意味を有するものであつて、それは、言はゞ、歷史的な發展過

程に於ける所産であると、見做す可きものである。

かゝる場合に於いて、法律（法規）は、漸次に、四圍の狀況に應じて、推移するものである。といふよりは、そのやうに變化することについて云へば、屡々、支配者階級は、この權利の新しい發展（社會的な發展）をみとめやうともせず、この發展は、暴動や動亂を招致する、そしてかゝる場合にあつては、その社會の法律（法規）は、一時的に全く無能化して了ひ、遂に、停止され、更らに、別の强力行使を經て、新しい發展が、新しい法律を生むのである。だが、又、他面に於いて、平和手段を發動せしめるところの立法上の別個の變化（正義變化）が、惹起される。社會群の文化的發展が、それである。しかしながら、この要素は、全然、異つた種類のものであるから、この要素（立法上の別個の變化）については、後に、考察することにしてもよい。

扨て、このやうに、社會群の機構內部にあつては、利害が、相剋する時には、强力の行使もまた、避け難いことは、事實である。しかしながら、同一地域內に、共同生活をいとなむこと

の必要からも、また人間の一般的な慣習から申しても、このやうな闘爭は、可及的速かに、終熄せしめることが、得策であるのであつて、また、事情が斯くの如くであるならば、平和的な解決方法が發見される場合が、ますます、多くなつてくるものである。であるからして、世界歴史に現はれた、すべての出來事は、一社會と他の社會との間の、または、一結合團體と他の結合團體との間の絕えざる爭鬪の連續であつて、他言するならば、それは、規模の大きい單位と、小さい單位との間に於ける、或は、都市、國家、民族、種族、王國、それら相互間に於ける不斷の爭鬪の歴史である。そして、かゝる幾多の爭鬪は、凡べて、戰爭（武力）といふ我探湯に依つて、解決されて來たことを示してゐるのである。

【註】これを要するに、フロイドが言ふところの世界歴史（Weltgeschichte）すなはち、從來のあらゆる社會の歴史は、爭鬪の歴史である。マルクス・エンゲルスの言葉を以てすれば、それは、階級鬪爭の歴史である。（Die Geschichte aller bisherigen gesellschaft ist die geschichte von klassenkämpfen）例へば、自由民と奴隸、領主と農奴、ギルドの親方と職人、この二つの、公然と、または、隱然たる絕えざる爭鬪の歴史である。（大思想エンサイクロペディア、第二十三卷二七五―二七六頁。春秋社版）しかし、エンゲルスは、「但し、それは、正確に云へば、文書として傳へられた歴史のことである」

と、註釋を附してゐる。（堺利彥譯、ブルジョアとプロレタリア、一八四七年、白揚社版六十九頁）

エンゲルスは、言ふ「この編（マニフエスト）の書かれた一八四七年には、社會前史、すなはち、總ての書かれた歷史より以前の社會組織は、まだ、殆んど、知られて居なかつた。その後、ハクストハウゼンか、ロシアに於いて、土地共有制を發見し、マウレルが、それを、全ドイツ民族が、歷史上に出發して來たところの社會的基礎であると論證し、それから、段々に土地共有の村落團體が、インドから、アイルランドに至るまでの、社會の原形であつた事が分つてきた。そして、結局、この原始共產社會の內部組織が、モルガンの冠絕的大發見――すなはち、氏の眞性質と、それの種族內に占める地位との發見――の結果、標本的の形態を以つて、明示されたわけである。そして、この原始的の共同生活の崩壞とともに、この社會が始めて個々の、そして、遂には、相對立する所の、諸階級に分裂するのである」と。

また、コンパルタ・マニフエスト・ロシア版の編者、リヤザーノフは、右に揭げたる、エンゲルスの註釋をさらに、左の如く、解說してゐる。

「ハクストハウゼン（一七九二―一八六六年）はプロシアの男爵であつた。ニコライ一世より、ロシアの農業制度及びロシア農民の生活狀態を、研究する目的を以て、ロシアに入る許可を得た。（一八四三―一八四四年）彼の著述の最初の二卷（ロシアに於ける民衆の生活の內部的狀態及び土地問題について）は、一八四七年に出てゐた。併し、彼が主として、土地共同體に關する問題を、審査した第三卷は、宣言の現れた後に於いて、一八五二年に至つて公表された。ロシアに於いて、ヘル

ツエンと會見したハクストハウゼンは、ロシアの土地共同體を、非常に重要視し、ロシアをプロレタリアートの禍害から免れしむる方法を、そこに見出した。マウレル（一七九〇—一八七二年）は、ドイツの大歴史家にして、また、大法學者であつて、數多の著述をあらはしてゐる。これらの著述は、五十年代及び六十年代に出版された。そのなかで、彼は、農村及び、都市の共同體の歴史を研究してゐる。コンパルタ・マニフエストのなかにも、その痕跡を殘してゐる古い見解に反對してかれは、最初の中世都市の都市住民は、中世的城塞より形成されたものでなく、その反對に、都市は自由な農村共同體（中世的マルク）より發達したものであることを指摘した。モルガン（一八一八—一八八一年）は、アメリカの有名な、原始的制度の研究家である。かれは、その生涯を、インデイアンの習慣や、風俗の研研にささげた。かれの意見によると、歴史的發展の根本的因子は、技術の領域に於ける發見及び發明、物質的諸關係の發達であつた。家族及び特に、血縁的制度の發達に對するかれの見解は、エンゲルスによつて採用されてゐる。エンゲルスは、かれの著書「家族私有財産及び國家の起原」(Der ursprung der Familie, des Privateigentums und des staates. 1884)に於いて、歴史以前（歴史以前とは、ほぼ、人間が文字を知らなかつた頃を言ふ）の社會の發展過程及び、その階級社會への轉化を究めやうとこゝろみてゐる。」

さらに、河上肇著、社會問題研究、第十六冊、（大正九年六月）を參照せられたし。

かゝる戰爭は、世界歴史が示すが如くに、勝利品の獲得並びに戰勝といふ心理的な作用を齎らすが、敗戰者に對しては、それは、沒落（奴隷化）を齎らす。かゝる國家權力擴大强化への戰爭は、決して、單一な判斷を以ては、その理由を説明することは出來難い。例へば、モンゴリア族と土耳古族との間に開始された戰爭の如きは、單に、慘虐のみをこととしたが、他の場合に於いては、（その實例は多々あり）これとは反對に、戰後、統一された一大國家單位の出現に依つて、野蠻な强力時代から秩序ある統制時代に這入つてゐるのである。だが、その秩序統制ある時代にあつては、實は、强力行使は嚴禁され、新しい法規が、すべての內爭を裁決してゐる。

世界の歴史を觀るに、羅馬人の世界征服（註、アレクサンダア大王の世界統一、紀元前三世紀）は、地中海沿岸諸國の上に『羅馬的平和』（Pax Romana）といふ黃金時代を生んだ。また、フランス皇帝（註、ナポレオン大帝を指す。十八世紀末。）の國土膨張への欲求は、新しい平和と統一とをもつ、フランス大帝國を生んだ。

【註】 スコット・ニヤリングは、フロイドと同じやうな意味に於いて、世界歷史を取りあげて、羅馬人の世界征服、フランス大帝國、そして輓近に於けるフアッシズムの勢力を、數葉のグラフに作りあげてゐる。(Scott Nearing: —Fascism. 1933. P. 1)

戰爭と平和とは、外見上、如何にも、矛盾した觀念のやうに見へるが、少くとも、戰爭は、やがて、平和な樂土を建設するためのものである。從つて、戰爭も、平和獲得の一つの手段としては、滿更、不適當ではないといふことを、みとめないわけにゆかないのである。何となれば戰爭は、大帝國を生み出すからである。而して、その巨大な國家の領域內にあつては、戰爭や內亂は、すべて、强烈な中央權力に依つて、抑壓嚴禁され、戰爭は壞滅するからである。

(註) ポンソンビイ氏の『戰時の虛僞』に依れば、「戰爭の目的は、戰爭の原因ではない。戰爭の目的はいつも、後から製造される。味方は、常に、正義でなければならない。相手が如何に弱小であらうとも、味方は攻擊されて、止むを得ず、起つたのである。領土侵略のためではない。それは崇高なる使命を世界に宣布するためである。戰爭目的の僞造された例は、古來數へ切れぬ程に多い。過ぐる世界大戰に於いては、恐らく、何ダースと數へる位、戰爭の目的が僞造されてゐよう……。」(正木千冬譯、歪められた世界大戰の原因に依る) と言つてゐるが……。右に記されたフロイドの說に對比して、硏

究する必要があらう。

だが、しかし、現實には戰爭は、平和を招來しない。その理由は一般的に、戰爭で贏ち得た成果なるものは、平和時代を築くほど、永續性のあるものではないからである。そして、一般に強力でもつて築き上げたところには、眞の結着力が出來てゐないために、新たにつくりあげられた統一單位(unit)も、再び瓦解してしまうからである。しかのみならず、さらにかくして征服を遂げたところで、その侵略がはなはだ廣範圍にわたつてゐたにしても、征服による統一には限界があるものであつて、征服によるそれらの各部分單位(unit)の間の爭鬪といふものは、武力に訴へなければ、解決がつくものではないのである。

だから、すべてこれらの武力的な企劃の結果としては、概して人類にとつては、實に多くの絕え間なく繰り返される小規模の戰爭にも拘はらず、それは未だかつて遭遇したことのないやうな、さらに一般に大規模な破壞をよぶ大戰爭の誘因となるのである。

これを、今日の世界狀勢に適用して見ると、貴兄がもつと手短かに到達されたのと、全く同一の結論を示すことになるのである。たが、今日の戰爭を壞滅せしめる方法は、たゞ一つしかない。それは、常識から考へても、（註、戰爭學者ではない我々專門外の科學者の常識から判斷して）國家權力の上部に位する、あらゆる利害鬪爭に對して、判決を下す中央集權的な組織を確立することである。而して、この國家の上位に立つ最高機關を確立するためには、二つのことが、是非共必要である。

第一には、最高裁判所を創設すること

第二には、その國際機關に、最高の施行權を附與することである。

而して、この最高施行權を、その機關に委託しなければ、國際的最高裁判所の活動も、無意味となるわけで、機關の設立と、權力の附與とは、二つが合して、はじめて意味をもつてくるもので、一方のみでは、全く役に立たないものである。

申すまでもなく今日の國際聯盟は、最高法廷の役割を演じて、第一の要素である「國際的最

高裁判所の設立」としての趣旨を果してゐるが、それは第二の要素を、遺憾ながら具備してゐない。

國際聯盟は、その決議に對して、現在全く力をもつて居ないし、またこれに加入してゐる個々の加盟國が、これに權力を讓渡しないかぎりは、こう言ふ權力を、もつわけのものではないのである。

しかし、今日の狀勢から見て、かゝる國際聯盟の希望は、放擲されてゐるかたちである。また國際聯盟なるものは、われわれの從來の社會の歷史の過程に於いて、あまりその類例を見たことがないといふよりは、むしろほとんど前例のない程度にまで、敢行されたところの一つの試みであるといふことを、よく了解してゐなければ、この聯盟といふ組織を、ほんとうに承知するわけには行かないのである。ではその試みといふのは、何であるか。すなはち、權威、他言すれば、最高の强制力（これは、從來權力の有するところであつたが、）を、人類の意識のなかにある、ある一定の理想的な態度の上に、附與するといふことである。

社會は、成員の連接を行ふために、二つの紐帶が必要ある。それは卽ち、暴力的强制の逐行と、組成員の感情的紐帶のそれである。後者は、社會心理學上の通用語を以てすれば「同一視」することである。

【註】フロイドは、この群集紐帶について、他の個所に於いて「同一化」「戀愛狀態」及び「催眠狀態」を擧げ、これら群集組成の本質は、成員間に新しい愛慾の紐帶が存在するがためであると言つてゐる。(Freud, S—Massenpsychologie und Egoanalyse, 1921) 而して、この「同一化」は、他の人々との感情的結合の最も初期の表現であつて、エデイポス心型を組成する一つの基礎となるものである。猶エデイポス●コムプレクスについては、フロイド著「夢の註釋」(Die Traumbedeutung. 1900) 大槻憲二氏譯、卷末の「精神分析學語彙」を參照。

而して、この二つの要素（强制と同一化）のうちの一つが、作用し得ない場合には、他の要素が、必らずその社會の結合に役立つものである。この二つの群集組成の要素「理念」は、すべての成員がもつところの結合性、卽ち連接が、深く鞏固に關係してゐる場合に、もつとも重要なる紐帶を形成するものである。

従つて、それは群集組成員がもつ感情の効力性（强さ）を、必要とするものである。そして、この二つの要素（理念）が、有効的なものであることは、歴史上、屢々我々が知るところである。

例へば、かのアンピクトテイオニイス（註、古代ギリシヤ諸州に於ける同盟會議）や、オラクレス（註、神託）、乃至は祭式（註、ゲーム）等にあらはれてゐる汎ギリシヤ的觀念（Pamhellenic-conception）換言すれば、ギリシヤ人が、その隣國に對して有する一つの優越感は、ギリシヤ人の間に戰爭の諸方法を普及するに充分なものであつた。（註、これは、愛慾に依る同一化の場合）しかし、その優越感は、ギリシヤ民族内の異分子間の爭鬪を防止するを得ず、加ふるに、ギリシヤの都市國家や、都市集團が、ギリシヤ民族の仇敵であるペルシヤ人と融合交商することを、ギリシヤ民族の滅亡であるとして、これを防止することも出來なかつた。（註、これも愛慾に依る同一化の表現である）

更らに、中世ルネツサンス時代に於いて、巨大な國家權力を以てしても、當時もつとも有効

的な勢力をもつてゐたキリスト教徒等の傳播力を防ぐことすら出來なかつた。

そして、今日に於いては、どうかと言ふに、結合性は、不問に附せられ、社會的連接の觀念は、全く意味を喪失してゐる。それは何故かと言へば、今日、あらゆる國に於いて、公然と、また陰然と、一大勢力を占めてゐる國家主義者の思想が、全く、これら社會的連接とは、正反對の方向にむかつて作用してゐるからである。

また或は、ボルシエヴイスト等の理想を一般に徹底させることに依つて戰爭を終焉せしめ得ると豫言してゐる人々があるが、世界の情勢からこれを顧みるに、彼等の戰爭終焉の理想ははるか彼處にあるので、恐らく、これが達成されるのは、恐るべき市民戰爭を經てのうちのことであると考へる。

【註】 ボルシエビイスト等が、資本主義の安定及び危機の相對的問題の歸結について示してゐる態度は次の如く要約することが出來る。(註、東邦通信社調査部譯、次の世界戰爭と共産黨の軍事政策、九頁參照) 資本主義の發展は、ともに、その發展の傾向が伴ふ不可避の立場からして、侵略戰爭を伴ふであらうこと、そしてこの侵略戰爭(註、新資源及び新搾取地帶の獲得のための戰爭)は、先きの世界

戰爭卽ち、歐洲大戰の二の舞として、一少數國家間の戰爭に終らずして、世界列强をその渦中に捲き込んで、しまうといふことに於いて、正に重要なる意義をもつものであるといふのである。また、世界戰爭は今日では、資本主義列强間の單なる戰爭のみではなく、それは一方に於いて、社會主義國家たるソヴエート共和國聯邦を指導勢力とする社會主義的要素の層一層强化を切り開くであらうこと、及び、他方に於いて、それは益々、擴大する失業者軍（產業豫備兵）の不滿不足とプロレタリア階級の反抗を促進するであらうといふことによつて、交戰國をして、進退兩難に直面せしめるものであらう。要するに世界戰爭が起るべくして、容易に起り得ないこと、（註、或る識者の言に依れば、世界戰爭は、一九三五年の軍備協定を契機として勃發すると云ふ）及び各列强が互ひに腹の探り合ひをし乍ら、表面には、軍縮會議の成功的結果を覗しつゝある事實は、まさに、この反面の消息を物語るものである。

これを要すに、今日の狀態からして、（註、すなはち、同一化、連接に反對する國家主義者の反動的勢力の擡頭をさして言へば、さらに、適切であるが）理想の權威が、現實の權力に代はることは、未だ〳〵尙早であつて、まつたく實現性のないことである。たゞ、權利（正義）は原始的には、野蠻な强力（强制力）であつて、なほ、今日に於いてすら、權利（正義）を維持

するためには、強力（強制力）が必要であるといふ事實を無視せぬ限り、われわれのこの論理は、正しいのである。

扨て、私は、以下に於いては、貴兄の論文の他の問題について、所説を述べることにする。

【註】フロイドは、以下に於いて、人間の好戰本能の分析を試みてゐる。

アインシュタイン博士は、人間をして、戰爭熱に感染させることは容易であること、また、人間は、怨恨や破壞に對しては、實に、積極的な、本能を有し、怨恨や破壞に刺戟されやすいものであると所論を述べて居られるが、この點に就いては、私も全く同感である。私は、この人間の好戰的な性慾發動の存在は、確く信じてゐる。また、わたくしは、最近數ケ年、かゝる人間本能の現象について、可成り、努力して來てゐる。が故に、これを機會に、われわれが精神分析學に於いて、多年の間研積した結果、遂ひに到達したところの本能說の一端について述べることとする。

當該問題を取扱ふに際して、先づ、人間本能について說明せねばならない。蓋し、人間の本

能には、二種類ありと考へる。

すなはち、第一のものは、保存し、結合せんとする本能であつて、プラトーが彼の傑作的對話篇「シュムポジオン」(Symposium)――シュムポジオンとは、古代ギリシヤ人の間に於ける食後談笑會の意味で、この對話篇は、一般にプラトンの饗宴と譯されてゐる――のなかで述べてゐる。〔エロース(Eros)――エロースとはギリシヤ神話に於ける愛の神。(註、杉谷代水、中島孤島共譯ジエームズ・ボールドキン著希臘神話及北歐神話、六頁參照)一般には、キユピツトとしても知られてゐるが、希臘名はエロース。ヴイーナスの子にして、常に母に隨ひ愛を司つてゐる。〕

プラトーは、彼の『饗宴』のなかで、ソクラテスをして、デイオテイマから聽いた話としてエロースに就いて、語つてゐる。卽ち、エロースは、實は、神にして、神に非ず、人にして人でない。其の中間にあつて兩者の性を合せ有する、云はゞ、精靈(Daimon = daemon)である。神の如き知者ではないが、理性なき愚昧な鈍物でもない。また可死的であるが、不可死者のや

うに生命に充ち、死しても復た活きる。されば、此の神的完全と知とを求め憧がれ、之を全く有するまでは安んじない「エロース」こそ、眞理其者を愛慕する者、言葉の固有の意味での「愛知者」即ち哲學者と呼ぶに慣するものであると言つてゐる。要するに、プラトーの「饗宴」に從へば、「エロース」すなはち「愛」によつて象徴される「哲學」は、眞理の認識に於て全くないか、其の缺乏を自覺して全き認識を欲求し、努力して止まない「愛知者」の心に成り立つものである。(石原謙著、ギリシヤ人の哲學思想、拾一頁)(Windelband—Platon. 1896 出隆、田中美知太郎共譯プラトン)(石原謙著プラトン——哲學講座、拾、拾一、拾二、拾四各卷)と全く同じ意味に於ける、エロテイク(Erotic)と呼ばれるものであり、すなはち、一般的の概念よりは、さらに、擴張したものとして、(Sexual)と呼ばれるものがそれである。

【註】性に關する概念は、フロイドにあつては、非常に廣義に解されてゐる。彼のエロース說は、漸次受け容れられては來たが、この點は、また彼にとつては一つの躓きの石であつた。(中村古峽著精神分析學二三四頁)すべてのものを、ある觀點から、性的に解することは、不潔とか卑猥とかの概念により、多くの人々から拒絕され勝ちなもので、彼は、異常の場合ばかりを見てゐるものだと非難され

た。がしかし、彼の學説が實質的に有力なる眞理を示すことによつて、多くの肯定を得たようである。さらに、以下に示すが如くに、彼がエロースの觀念を分析してゐることに依つて、我々は、彼の本能に對する立場を知ることが可能である。

そして、他の一つの本能は、破壞乃至殺害の本能である。他言すれば、侵略的本能、あるいは、破壞的本能が、それである。

一般に知られてゐるやうに、この兩者は全く正反對の傾向をもつてゐるところの愛（Love）と憎惡（Hate）を云ふのであつて、それを科學的な通用語で表現したにすぎない。從つて、云はゞ、アインシユタイン博士の研究領域に所屬するところの永遠の極性とか、引力とか、斥力とか、云ふものを、他の觀點から見たものに、すぎないのである。

だが、この兩者の觀念を押しすゝめて、善と惡との觀念に持つて行くのは考へ物である。

而して、この二つの本能は、全く反對者の立場に置かれてゐて、我々の生活現象は、この二つの本能が、相敵對するか、又は一致するか、何づれかに依つて成り立つてゐる。

そして、このカテゴリイに屬する本能は、單純に、全然孤立して作用するものではなく、この二つの本能は、つねに、混合されて、云はゞ、その反對性質の一服量に依つて、合金化(Alloyed)されてゐるために、或る場合には、全くその目的を變更することすらあるのである。すなはち、自己保存の本能は、確かに、エロテイックな性質をもつてゐるが、その目的に到達するためには、エロテイックな本能は、もつとも積極的な排他的な本能(攻擊的本能)(破壞的本能)を必要とする。愛の本能もまた同樣にして、それが、特定物にむけられる場合には、その目的物を、有効に獲得するために、一つの獲得本能(支配的本能)が混入(合金化)して來る。が故に、われわれは、この二つの本能を、分立することは、出來ないのである。そして、そのために、われわれは、可成り、長い間、認識を妨げられて來たのである。

さらに、アインシュタイン博士よ、貴兄が、この人間本能の分析について、今少しく我慢して、われわれの研究に、つきあつて下さるならば、人間の行爲といふものは、複雜多岐を極めてゐることを、知ることであらう。

要するに、人間のある行動は、單に、一種類の本能的感情に依つて、動かされることは、極く、まれなもので、その行爲には、すでに、すなはち、それ自身に於いて、エロースと破壞的本能とが合金化され、關係してゐるに、きまつてゐるのである。一般的に、行動を可能ならしめるためには、同一の要素からなつてゐる幾多の動因（契機）が、必らず、これを支配してゐるのが、つねである。この事實は、貴兄と同じやうに、物理學者である、リヒテンベルグ教授に據つて、すでに、是認されてゐることである。

【註】ゲオルグ・クリストフ・リヒテンベルグ教授はドイツ有數の物理學者でまた諷刺家。ゲッティンゲン大學教授。一七四二年―一七九九年。

既知の如く、リヒテンベルグ教授は、ゲッティンゲン大學の物理學教授であるが、物理學者としてよりも、心理學者として、著名な人である。すなはち、教授は、『動因の計角法』（"Motivnrose" "Compass-card of motives"）と稱する、獨特の見方を展開して、次のやうに、述べてゐる。

「人間の行爲（行動）を支配するモチーフ（註　動因、動機）には、三十二の方角がある。天文學上風向を、北北西とか、に分類するやうに、人間の行爲の根據となるべきものも、例へば、食物―食物―名譽（Food-Food.―Fame）とか、または、名譽―名譽―食物（Fame-Fame-Food）とかのやうに分類されるのである。」

斯くて、一國が戰時狀態に置かれる際には、人間の動因の全音楷は、躊躇逡巡することとなしに、國家の動員令に應へる。高い音楷に於いて、戰爭を鼓吹したり、或は低い音楷に於いて、公然に、また隱然に、國家總動員に參加して、人間の動因は、その國民の上に、華々しくも合奏を開始する。

攻擊的本能や破壞心も、確かに、この音楷のなかに織り込まれる。歷史に現はれた無數の狂亂怒濤や、人間の交戰下の日常生活なぞも、またその戰爭の强度に、迫車を加へ、敵愾心を煽り立てる。

【註】國家總動員令下の國民心理狀態について、姉崎正治博士は次の如く言つてゐる。
「世界大戰の當初に於いては、戰爭の動機は、主として國家利害の衝突から起つたに違ひなくとも、

二年三年の戰爭繼續延長中には、利害といふことにも、種々の新問題を生じて來たと共に、交戰國民の思想、自信、希望、理想等、總て心理狀態にも、新局面を生じて、各國民共に、今までは、自分にも意識しなかつた觀念、意志、努力を發生し來つたことは、驚くべきものである。單に社會生活の狀態のみならず、感情の興奮、思想の趨向、意氣の力に於いて、新な運動を促進して、力を發揮したことは、測るべからざるものがある。イギリス人の耐久力は、遺憾なく發揮せられたと共に、將來の社會的改革に仰と結びつきつゝある。フランス人の愛國心は、國民精神の域を超えて、人道的宗敎や信對する硏究討議は、有識者の間に非常なる緊張を示しつゝある。アメリカ人の義憤は、終に參戰となつて現はれたが、それは單に加はるといふだけでなしに、世界の將來の運命に關する自家天職の意識となつて現はれて來た。これら交戰國民の意氣精神は、これを一つ〳〵に觀察してもまた聯絡して見ても、世界の將來に對して大なる意義をもたらすに違ひない。」（註、歸一協會編、交戰國民の心理狀態大正六年八月刊、序言より）

なほ、邦文で書かれた國家總動員に關する著述には、次の如きものがある。

資源局編、國家總動員
陸軍省整備局、歐米列强の國家總動員
森武夫、戰爭準備と戰爭經濟
森武夫、米國戰時計畫經濟論
森武夫、戰時統制經濟論

森武夫、英國の戰時經濟
宇垣一成、國家總動員に策應する帝國陸軍の新施設
田中義一、國家總動員の要素と軍事訓練の意義
川崎克、國民總動員に立脚する軍事教育問題
慶應大學日本經濟事情研究編、日本戰時經濟論
松本直亮、國家總動員の大觀
永田鐵山、國家總動員準備施設と青少年訓練
高屋三郎、國家總動員講話
調査資料協會、國家經濟總動員準備資料
松井春生、資源調査法令義解
東洋經濟新報社、日本戰時經濟の全貌
東洋經濟新報社、經濟封鎖問題座談會（東洋經濟、昭和七・二・二〇）
山田俊一郎譯、軍事科學概論
正木千冬、戰爭經濟學
歸一協會、交戰國民の心理狀態

而して、是等破壞心の興奮に對して、刺戟をあたへるものは、理想主義であつて、斯くして

エロテイックな本能が、擡頭して來るのである。

歴史の上に示された暴動を顧みるに、理想的な動因が、屢々破壞的慾望を指導することがある。或る場合には、また、異端糺問（Inquisition）が狂暴なるために、理想的な動因が意識に先行する際には、その理想的な動因は無意識化してゐる破壞的な本能の影響をうけることもある。而して、この理想的な動因の兩樣の解釋は、それぞれ、有り得可き可能性をもつてゐるのである。

さて、貴兄の所説をきくに、貴兄は、戰爭の心理學的な分析や、理論の究明よりも、戰爭防止の對策の方に、多くの關心をもつてゐるやうであるが、わたくしは、むしろ、戰爭の本質を形づくつてゐる人間の破壞的本能の動因について、今少しく、論述することとする。だが、破壞的本能を、好んで、とり上げるからと言つて、わたくしは、必らずしも、破壞を重要視してゐるわけではないのである。

われわれは、多少、人間の本能に對して、抽象的な思辯をこゝろみた結果、あらゆる生物の

うちに、この本能は活動してゐるものであつて、そして、その本能は、生物を壞したり、また
は、生命を不活潑な無機物の狀態へ還元せしめやうと、努めてゐるといふ、結論を得たのであ
ります。

實に、この本能そのものは「死の本能」(Death.—Instinct)とでも、稱す可きものであつて、
他方、エロテイックな本能(色情的本能)(愛の本能)は、生命への努力、生存せんがための
爭鬪の姿を代表してゐる。そして、この死の本能は、破壞に對して、一種の刺戟をあたへるも
のであつて、ある機關(特殊の器官)の作用をうければ、その本能は、外部のものに對して、
目的を遂行し、行動することが出來るのである。かくして、それが、外部へ向けられたときに
は、破壞本能となるのである。云はゞ生物は、本來、それが生存せんがためには、異質物を破
壞し去る性質をもつてゐる。

【註】多くの猿の種類は、異なつた種類の猿とは反目するのが常であつて、特にバブーン、ハマドリア
ス、ゼラダに於いて著しく、此等の猿が會過すると、互ひに吠え叫び合ふ。(註、小泉丹、戰爭の原始
形態、一九—二〇頁)

しかし、この死の本能は、また生物の內部にも作用するものであるから、我々は、この死の本能を研究するためには、破壞本能を深く堀り下げて行つて、正常の現象や病理學上の現象にまで、立ち至つて究明せねばならなくなる。我々は今や、人間本性の起原を說明するに當つて攻擊的本能のかゝる轉向性を述べて了つた。而してこの內部的傾向が、廣範圍に亙つて、作用する場合には、それは、旣でに、正常の狀態を離れて、病的なものに變つてしまふのである。否、むしろ、かゝる破壞的本能が、外部にしむけられる場合には、病的現象を展示するが、また他面に於いて、それは、破壞にともなふ有効な成果を招來するものである。

而して上述せる人間の好戰本能乃至破壞性が、一般的に有害な下劣な本能であることに就いて、生物學上、釋明す可きものであると考へる。從つて破壞的本能の生物學上の釋明は、次の如く要約することが出來やう。

しかし、以上のやうに述べると、我々の理論が、如何にも神話的で、見方が暗すぎるやうに思はしめるが、自然科學のすべての部門にあつても、窮極に於いては、かゝる神話的要素に到

達するのではなからうか。今日、貴兄の研究領域に屬する物理科學に於いても、そうではなからうか。

要するに、問題となつてゐるこれら議論の結論を云ふならば、我々すべての人類のあらゆる性質を以てしても、人間の攻擊的傾向性を抑壓することが出來ないといふことである。

【註】フロイド教授は、近代の戰爭愛好者の一群、例へば、ドイツ自由黨の代議士カール・ブラウンと同じやうに、戰爭は一つの疾病であつて、それは病理學上の一現象であると言ふのである。(註、Karl Braun:—Während des krieges. Leipzig bei Dunker. 1871. S. 17)

而してその病的現象たる戰爭は、人間の破壞心が具有化したものであつて、われ〳〵のあらゆる本能の努力を以てしても、この破壞心の發動を抑止することは出來ない。これがフロイド教授の戰爭本質論の要旨である。

世間には、一般に、この地上の一角には、樂土が存在してゐて、大自然は、人間が慾求するものを豐富に生產し、その樂園には、掠奪とか拘束とかを知らぬ種族が、やすらかに居住してゐると、言ふものがあるが、これは、取るに足らぬ童話にしかすぎない。以下、この多幸多福

な種族のことについて、論じてみる。

【註】 フロイド教授は、この地上には、所謂「戰爭」を好まぬ、また搾取のない國はないと言ひ、ボルシエヴイスト等の世界は、全く意味をなさぬものであるといふ。更らに、フロイド主義者ヘッセは、彼の種族心理學的研究「カラマゾフ兄弟或はヨーロッパの沒落」(一九二〇年刊)のなかで、ボルシエヴイズムは、ヨーロッパのプロレタリアートと「ロシヤの魂」との間の過渡的なタイプ乃至はロシア特有の現象と解釋して、それは、アジアの故鄕へ、原始共產體といふ母錯綜への還元の表現乃至退行の表現であると言つてゐる。

(戶坂潤氏、イデオロギー概論、二七二—二七四頁)(Jurinetz-psychoanalyse und marxismus. 陶朔郞氏譯、精神分析學とマルキシズム、一〇六—一〇七頁)

また、ボルシエヴイスト等は、つねに、物資の充足を保證し、そして、人と人との平等を實行することに依つて、人間の鬪爭性を根絕防止し得るとの空想的な希望をもつてゐるが、私には、それは、全く意味のない幻想だとしか思はれない。といふのは、彼等ボルシエヴイスト等は、寧日なく、武器を補充し、武裝することに、忙殺されてゐるが、彼等の追隨者等は、かれら以外のあらゆる人々に對する憎惡によつて、團結することは出來ないからである。

また、御承知の通り、ある場合には、人間の攻擊的な爭鬪心を全く抑止させることは、そう難しいことでもない。卽ち、かゝる場合にあつては、その國民の攻擊的興奮を戰爭に集中させずに、他の異る方向にしむけることである。かくして、我々は、人間本性に關する以上の神話からしても、容易に、戰爭を回避するための直接的な方法を見出すことが出來るのである。

戰爭を發生させるものが、人間の破壞的な本能から來てゐるとするならば、我々は戰爭を回避するためには、それに對して、つねに、破壞とは、反對の要素である「エロース」なるものが、われわれの本能のなかにあることを、想起せねばならぬ。また、人と人との間の感情の連帶を生ぜしめる要素も、また、戰爭に對する一服の解毒劑の役割をつとめることも、忘れる譯には行かない。

凡そ、人間感情の結合には、二種類ある。第一の感情連帶といふのは、例へば、性的意識を取り除いて、すべての愛玩物に對するところの關係を云ふのであつて、この場合、精神分析學者にとつては、「愛」(Libe)の觀念も、同樣に分析の對照となる。またこの點について、聖書

は、巧みに左の如く表現してゐる。「汝を愛するが如く、汝の隣人を受せよ」と。

【註】「己の如く汝の隣人を愛すべし」なる語は、聖書のうち、利未記十九章十八節、馬太傳十九章十九節、同二十二章三十九節、馬可傳十二章三十一節參照。

また愛とは何であるかについては、聖書に依れば、「是れ天然に人にそなはる情の一つにして、其の目的とするところのものを樂しみよろこび、之を助け、之に益せんとてはたらくものなり、心をつくし、精神をつくし意をつくして、主なる神を愛し、また己の如く人を愛するのは、キリスト教徒の本分なり、神はキリストによりて、そのすぐれたる愛を世人にあらはし給へり」と解してゐる。（J. C. Hepburn—Dictionary of Bible. ヘボン、山本秀煌共編、聖書辭典、一頁）

であるが、敬虔な命令といふものは、言ふは易いが行ひがたいものである。たゞ、感情の他の連帶は、同一化の方法に依つて、これを結合させることが可能である。即ち、人間の相互關係の上に於いて、類似點を見出すことか、社會の感情を同一化し、以つて、人間社會の全構造をつくり上げることが出來るのである。

また、貴兄は、權威の濫用を甚しく罵倒して居られるが、私をして言はしむれば、その權威

の濫用のなかに、戰爭興奮の直接的な他の暗示を、見出すのである。要するに、人間が支配者と被支配者に對立して存在してゐることは、先天的な矯正し難い不平等の表現に他ならない。そして、それは、先天的であつて、取除かうとすれば、除去し得る不平等のためではないのである。

【註】フロイド主義の階級論については、戸坂潤氏著イデオロギー概論、二五六―二六六頁、三〇七―三一八頁參照。

而かもこの被支配者階級は、その數が夥しく多く、そしてその被支配者階級を支配するためには、高い位置からの命令が必要になるのであつて、この最高命令に對しては、大衆は、通例異議を差し挾むことを許されてゐない。社會構成が、以上の如くであるからして、彼等被支配者階級は、大衆のよき指導者である思想家の一群――暴歷に抗して、而かも、眞理の追求のために身を挺して闘ふところの――をつくり上げるまでには、幾多の苦闘を續けなければならないわけである。また、歷史を見れば、彼等大衆に對する政治家のつくつた最高命令（法律）や

または、教會（註、主として中世の教會を指す）が、新時代を翹望する自由主義思想に對して行つた多くの破門行爲なぞが、如何に微力なものにされたかが明白となる。そして、それらはこれに味方をせず、却つて、これに、干渉し禁止し來つたことは、事實である。

而して、社會をして理想的な狀態たらしめ、戰爭や爭鬪を除去するためには、その社會を組織してゐる各成員が、その本能的生活を、すべて理性のもとに、置かなければならないのである。從つて、この理性を除いては、たとへ、社會的感情が相互的に結合しても、人間相互間に强固な徹底した連帶を作り上げることは、至難と言はなげればならない。

しかし、理性を基調とした社會建設への希望は、現在のやうな狀態のもとにあつては、單なる空想にすぎない。

また、直接的に、戰爭を防止する他の方法が考へられるが、これは實行は出來そうにあるが好成果は期待出來ないものである。丁度、それは、人間が飢饉に陷入つた際に、小麥は豐富に目の前にあるが、肝心の水車が、遲々として廻り兼ねてゐる悲愴な狀態を想像して見ればよ

い。依之觀之、現實の社會狀勢とは沒交渉に見へる學者に、戰爭防止についての意見を訊てみいたところで、肝心の水車が廻り兼ねてゐては、結局、得るところは少いと言はねばなるまい。だから却つて、戰爭防止といふ緊急な問題に對しては、我々は、あり合せの從來の理論や方法で、直接的に、この問題を取り扱つた方が得策かも知れない。

貴兄の論文は、この戰爭防止に關しては、具體的に、これを取扱つてゐなかつたやうに思はれるが、戰爭をどう結末するかについては、私は多大の感心をもつものである。

また、社會正義は、或る場合に於いては、戰爭を生活の醜い一側面として、是認してゐるに拘はらず、貴兄や、その他多くの反戰リーグのものが、戰爭に對して、熱烈に異論を說へねばならぬかについて、私は大いに了解に苦しむものである。

【註】アインシュタイン教授が、徹底的な戰鬪的反戰論者であることは、別稿を見れば判るが、フロイド教授は、右に示されてゐる如くに、贊戰論者であり、アインシュタインとは、全く反對の側に立つところの個人心理學者であることが、了解出來るではないか。

精神分析學の立場から考へるに、戰爭は一つの自然的な行動であるやうだ。生物學的にまた現實に、これを照して見ても、そう思はれる。

【註】「萬國の勞働者、團結せよ」といふ階級的合言葉は、フロイド主義から云へば、同性愛の階級的表現であるといふのであるから、現代の所謂「戰爭」——帝國主義戰爭——は、精神分析學の立場からすれば、極めて、「自然な」一つの表現であるのかも知れない。

私が戰爭に關して、こんな意見を提供したところで、貴兄には、一驚もされないだらうと考へる。何となならば、「戰爭とは何ぞや」といふ問題に對して善處するには、我々は、現實をもつと、冷淡なる眼を以て、觀察し直さなければならないからである。

また私のこの解答提出に對して、更らに、自問自答して見やう。

蓋し、人間はだれでも、生活擁護のための權利をもつてゐるが、戰爭はかゝる前途に光明とむ我々の生活を根底から破壞し、加ふるに、また、悲慘窮乏の淵に立たしめ、自己の意志に反して、同胞を殺害する。また戰爭は、人間の勞働の所產や、その他多くの物質的生產物を壞

滅せしめる。さらに、現今我々が見る如き戰爭は（註、帝國主義戰爭を指す。）古い傳統的理想にもとづくところの英雄主義的な行爲とは、申されぬ。現代の戰爭は、すなはち、最新式武器（註、一つの商品）を一〇〇％に利用することであつて、また、敵味方のうち、何づれか一方が、全滅することを意味するものである。

【註】「ナポレオンは、戰術は、十年毎に變ると言つてゐる。がそれは、無論、技術的の事物の進歩によつてゞあつて、武器は、成る程變化してゐる」とマーレー少佐は、述べ、彼の著「戰爭の現實性」に於いて、武器の變化について論じてゐる。（Muray—The Reality of war. chapter. XI. 荒木武正譯、戰爭論、九五—一二四頁）（尾池義雄選、戰術から見たナポレオン、春秋社版、昭六、）

だが、まことに、一般の輿論が、今日、戰爭の行爲を否定してゐないのは、どう云ふ理由に基くものであらうか。この問題について、二、三論及して見る。

思ふに、一つの社會にあつては、その成員達は、彼等の個人的な生活に對する權利を要求することが、出來ないからではないのか。加ふるに、戰爭は、その社會の組成員の上に、區別な

く、平等に課せられるからであらう。すなはち、國家や帝國が、存在する限りに於いて、その國民は、敵國と冷淡に、理性を超越して、戰はねばならず、また、戰爭のためには、國家總動員令に服從せねばならない。しかし、この點を、更らに、細論する必要はない。といふのは、この點については、貴兄は、私に解答を要求してゐないからである。

依つて、さらに、すゝんで、私がもつとも感心をもつたところの戰爭の基礎理論、すなはち戰爭に對する我々の共通的な憎惡性について、精神分析を試みる。

扨て、我々は戰爭を嫌ふ以外には、戰爭を取扱ふことは出來ないものであらうか。

元來我々人間は、その生物的な性格から言つても、戰爭反對の平和主義者である。この點から云へば、貴兄等一群のものが、主張する平和論を正當づけることは、甚だ容易なことである。しかし、この點は一應、說明をせねばならぬことではないのか。私が主張するところは、全く、この點に他ならないのである。

申すまでもなく、人類の文化的發達（Kulturenentwicklung）（Cultural development）は（一

般的に、これを「文明」と稱してゐるが）遠い古代から、急激でなしに、漸次、時の流れと共に、發展して來たものである。我々が今日の進んだ文明組織の餘恵に對して、感謝せねばならぬのは、この文化の發展であり、また、我々人類の苦惱を、つくり出したものも、また文化の發展のためである。文化の起源や原因は、不詳である。文化が、何日頃からあるか、判明しないが、その文化の特性については、我々がよく知るところである。

或は、文化は、人類を消滅せしめると謂はれてゐる。何となれば、文化は、人間の性的機能を不完全化するからである。すなはち、今日に於ける文明諸國の增殖率は、未開種族や、乃至は、文化程度の低い國民よりも、甚しく少いということを見ても、それは領首されるであらう。

この文化的發展の實驗については、またある動物を飼育することに依つても、窺知することが、出來やう。すなはち、文化的發展は、動物の生態や、構造をも、物理的に、變化させることに、多大の影響をもつてゐることが判る。であるが、文化的發展が、法則的に、動物を變化

させるとは、云ふことが出來ない。

たゞし、文化的變化過程に伴ふ肉體的な變化は、また、驚く可きものであつて、この點は、一般的に信ぜられて居る。

而して、この肉體的變化は、また、生物の本能的反應の一表現であつて、積極的に、本能の窮極目的を否決する場合に現出するものである。

嘗て、我々の祖先を、驚歎せしめ、快感をあたへた諸感覺(Sensations)なるものも、今日の我々には、何等の刺戟物とはならない。そして我々の倫理的な耽美學的な理想が、根抵から變つて了へば、その尺度の變化に從つて、感覺の諸過程も、全く變更され、組織化する。

先づ、心理學的な見方から、言へば、この重大な二つの文化現象は、左の如きものを指すのである。

第一は、我々の本能的生活を支配する知力の强化である。第二は、攻撃的な衝動の内省である。卽ち、危險な凡ての結果をともなふ攻撃的傾向が内面化して來て、有利な結果や、または

危險な結果、が伴つて來たことである。

従つて、戰爭とは、文化の發展が、我々に、齎らす物理的傾向とは、全く正反對のものである。が故に、我々は戰爭に對しては、怨嗟の情をもち、その戰禍を呪ふのである。戰爭は、我々のやうな平和論者にとつては、單に、知的な効果性に富む排撃であり、また、感情的な否定である、ばかりでなく、それは、思ひ切つた形に於ける我々平和論者に對する立法的な迷信であり、特異性の表現である。そして戰爭の審美的な醜行こそは、全く戰爭の猛威の一つの予盾の現はれに、すぎないのである。

我々、人間すべてが、平和主義者になるまでには、果して、何日かゝるであらうか。戰爭のない時代が、何日出現するか、それは、私には判らないが、その日を待つことは、恐らく、幻想にすぎないかも知れない。

と云ふのは、この人間の文化的傾向と、未來の戰爭が採用するであらうところのおそる可き恐怖とは、近い將來に於いて、戰爭を惹起せしめる可能性を具有し、戰爭が絶滅したとは、申

されぬからである。

また、戰爭がどんな道をとつて進むかに就いては、それが本道を通るか、さては、横道を通過するかは、われわれ門外漢の卒斷をゆるさぬところであらう。しかし、文化の發展が、戰爭とは、正反對の方向に、むかつて、すゝんで居ることは、言へるであらう。

以上記した所論（Exposé）は、まことに當を得てゐないもので、さぞかし、兄貴を失望させたことと存じますが、不惡、御諒察の程、御願ひ致します。

ジークムント・フロイド

〔附記〕本章に就いては、左の邦文文獻を參考せられたし。

伊東豊夫氏譯（フロイド）何故の戰爭か、昭八・一一
岩倉具榮氏譯（グラヴー）戰爭心理分析論、昭八・一一
石中象治氏譯（フロイド）戰爭と死の精神分析、昭七・一二
菊池榮一氏譯（フロイド）文化の不安、昭七・一二
大槻憲二氏譯（フロイド）文明と不滿、昭六・六
久保良英氏著　精神分析法、昭五・七

ジークムント・フロイドに就いて

アルバアト・アインシユタインと同じやうに、ジークムント・フロイド（オーストリイのウヰーン大學精神病學者、一八五六年五月六日生れ――）は、また、ユダヤ人の子であつて、生れはオーストリイの寒村フライベルグであるが、三歳の時、首都ウヰーンに移り、爾來今日までそこに定住してゐる、極めて謹嚴な學者である。巴里醫學界の巨匠、シャルコーの門に學んだ、當時の若いフロイドは、たゞ、一介の神經科の醫師であつたが、しかし、あらゆる人間の行動、疾患の有らゆる表現を、ひたすら、精密な、器械と實驗とに依つて、說明し、理論づけやうとする努力に對して、限りない絕望が生じ、パリからウヰーンに歸つたときの彼は、牢固

として、正統醫學に叛逆して、多くの同僚と袂を別ち、先人未踏の曠野へ足を向け、斯くて、自由聯想を應用して、彼は自らの精神分析學を創始したのである。

すなはち、彼は、精神病學の立場から、人間精神の發生的因果性に對して、病理學的な心理解剖を試み、種々な、精神現象に關し、その發生條件、加工狀態の原因を、明確にしやうとする新學說を創唱して、意識生活に於ける理性の抑壓や、或はそのための精神的缺陷等よりして全く不可解なる心理狀態に、一つの發生論的な解釋をあたへたのである。卽ち、フロイドは、文化意識の各部面を取り上げて、これらを性慾または慾望の作用化であると說明するのである。

例へば、精神分析學の立場から、一切の社會現象やそれらの社會關係を批判したフロイドの顚才オーレル•コルネイの所論に從へば、社會主義實現への努力は、いはゞ、社會を原始的要素に還元せんとする退行的行爲であるから、一切の社會主義的運動は、退嬰的な運動であると言ふのである。フロイド派の說に依れば、國家は父錯綜の投射現象で、資本主義は男色の表現

に他ならない。

アナキズムはこの父親に對する憎惡の表現である。アナキズムの擡頭は、父の殺害のシンボルだと言ふ、而して父親に對する憎惡は、やがて、母親に對する近親相姦的な衝動を伴ひ、斯くして、これがアナキズムの第二の成員である共產主義を構成する。即ち共產主義は、母親と融合せんとする一つの努力の具體化である。共產主義があらゆる人間を一つに鍛へ直さんとして、分割されない一つの綜合體に膠着させやうといふ努力は、宛然、父親を殺害した後、兄弟達が、まだ母親の體內で、溺れやうと藻搔いてゐる象徵である。

マルクス主義はプロレタリアートがその歷史的役割を果すことを以て、特徵づけられてゐる實踐的なものであるが、このマルクスの信仰は、要するに、若い息子乃至は取るにたらぬ「心貧しい」人格の全く救世主的な役割を云ふ廣く流布した動機の表現法の一つにすぎないもので、云はゞ、この動機は、子供等の「願望の想像」と見做す可きものである。これは、子供等が、彼の纖弱さや、性的無價値をも顧みず、母親に關する性鬪爭に於て、父親を打ち倒そうと

望むことに類似してゐる。勞働者階級が、ブルジョアジイの壓迫を絶えず訴へ、呪咀することは、一種の迫害症の昇華作用である。マルクスの唯物辨證法もまた、痴呆症の象徴である。それは、プロレタリアートの役割を神祕的に盲信することと結合して、宗教的痴呆症の形式を持つてゐる。彼等マルクス主義者が言ふところの「萬國の勞働者よ、團結せよ」（註一）といふ合言葉は、すなはち、同性愛の階級的表現以外の何ものでもないのである。（註二）

【註一】「萬國の勞働者よ、團結せよ」(Proletarier aller Lünder vereinigt Euch!) (Proletarioj de ciuj Landoj unuigu!) (Prolétaires de tous les pays, unissez-vous!) (Workingmen of all countries, unite!)—(大原社會問題研究所雜誌昭・五・三—昭・六・六・所載、森戸辰男氏、Das kommunistische manifest の成立に關する若干の史料) 參照。

【註二】W. Jurinetz—Psychoanalyse und marxismus (Unter dem Banner des marxismus. Jahrgang I. I.) 陶朔郎氏譯、精神分析學とマルキシズム、九九—一〇五頁。

以上に見るが如くに、フロイド陣營內のものは、科學的な適用語を驅馳して、巧妙に、一切の社會現象を說明して居る。

戰爭とは、何であるかに對しても、同樣に、フロイド博士は、科學的な通用語を使用して、戰爭の精神分析を試みてゐる。

『戰爭は、人間本能の闘爭性から生ずる憎惡の象徴で、あらゆる文化人を原始人に還元する。然しながら、戰爭は、人間、諸民族、及び諸國家の大個性間の倫理的な關係の發展を壞しはしない。』

『我々が信じたくない戰爭が、今や勃發した。(註、今の戰爭とは歐州大戰を指す) そして、この戰爭は、我々に失望を齎した。今次の戰爭は、攻擊や防禦のための武器が完備してゐるために、從來の戰爭よりも、更らに、殘忍で、損害が莫大であるのみならず、少くとも、その殘虐で、激烈で、無慈悲なことは、從來の戰爭に劣りはしないだらう。今回の戰爭は、平常時に於いて我々が義務を課せられてゐるところの、所謂國際法なるものの拘束をすべて無視してゐる。負傷者や醫者が當然もつところの權利を否定し、國民の非戰闘員たると、戰闘員たるとを問はず、これを戰亂の渦中に捲き込み、加之、私有財産の權利を認めてゐない。

戰爭は狂暴に荒れ廻つて、戰後、人間のあいだに、何等の平和や將來性も殘存させないかの如くに、すべてを否定し去る。戰爭は、敵對して、抗爭をつゞけてゐる諸國民相互間の、すべての社會的連關を切斷する。』

『今次の戰爭（註、歐州大戰を云ふ）は、また、殆んど理解し難い現象を呈してゐる。卽ち、文化的諸國民が相互に理解を持たずに、他國民に對して憎惡や嫌厭の念を以て、相對立してゐることが、それである。嘗ての文化的國家も、戰時は、相互ひに野蠻的國家なりとして、對立國を文化社會から排擊しやうと試みてゐる』と。

【註】 Sigmund Freud—Zeitgemässes über Krieg und Tod. Imago. IV. 1915.）（石中象治譯、戰爭と死の精神分析、二四四―二四五頁）（久保良英譯、精神分析法、戰爭に就いて）

これを要するに、フロイド陣營內のものは、或る個々の觀察や、また、それらの觀察を通して得られた主要なる結果を、一つの一般的世界觀にまで擴張しやうと努めてゐるやうに思はれる。すなはち、フロイド等のそれらの努力は、「科學的神秘主義」的な一つの努めとしか思はれ

ない。と云ふのは、彼等が社會現象や社會關係を說明するためには、勢ひ、社會心理學や社會學の問題に常面しなければならない。ところが、社會心理學に對するフロイド陣營は、非常に混亂してゐるからである。

例へば、フロイドは、その著『集團心理と自我の分析』に於いて『個人心理學と社會乃至集團心理學の區別は、一見するに、極めて、明白なやうであるが、しかし、一層詳しく考察すると、その區別は、判然しなくなる』と言つてゐるが、同著の他の個所に於いては『心理學的立場から見られた個體は、集團となると、全然異つた法則に從ふ』、といふ事情を指示することによつて、個人心理學を集團心理學から分離してゐるのである。

これらの所說は、明らかに、多くの矛盾撞着をもつてゐる。フロイド派の人々は、躊躇するところなく、精神分析學を個人心理學的な一方法と見てゐるのであつて、彼等は、集團心理學の方法論を問題として取り上げてゐない。にもかゝはらず、彼等は、實際的には、個人心理學の方法を、そのまゝ、社會現象や社會關係の上に移してゐるからである。

フロイド派の頴才を以つて聞へるオーレル・コルネイさへ、その著書『精神分析學と社會學』（一二頁）に於いて、『精神分析學は、それが直接の社會學的傾向を採るところよりも、それが、其の範圍内に立てこもつてゐるところに於いて、より多く社會學に對して役立つてゐる』と言ひ、精神分析學は、社會學的研究に對しては、餘り役に立たないことを裏書してゐる。

ことさらに、フロイド派の社會心理學の特徴とでも云ふ可きものを擧ぐれば、それが、形式主義的社會學に立脚してゐるといふことであらう。（陶朔郎譯、ユリネッツ、精神分析學とマルキシズム、七二頁）これは、フロイドが、あるゆる時代や時期に共通であるところの、若干の集團的過程の形式のみを取扱つてゐることであつて、その內容には、少しも關知しないことを言ふのである。この點に於いて、フロイドは、全く、ジンメル等の形式社會學の流派に所屬するものと言ふも大過ないであらう。

【註】マルクス社會學に於ては、社會現象の全體、より適切に言へば、經濟現象を重點としての他の社會現象との關係を考察して、以て普遍的なる法則を確立せんとするのであるのに對して、その對象を特定の現象、即ち、人間關係、集團に限定して、これに關する定型傾向性を發見せんとする所に形式

社會學の第一の特質がある。（井森陸平著、形式社會學研究九八頁）而して、その第二の特質をなすものは、分析法の特殊なる種類に存するのである。さらに、形式社會學の第三の特質は、マルクス社會學と異り、何れの階級、黨派の上にも、立脚せざる純粹理論であつて、階級イデオロギイ、政黨の綱領の如きものでないことである。卽ち以上の特徵は、要之、その形式的な抽象に於いて、他と區別される可きものである。（新明正道著、獨逸社會學、二二一二三頁）

バアナード・ショウの戰爭批判

帝國主義戰爭に就いて

バアナード・ショウ

若しもわれ〳〵の英帝國が、この地上に一つしかない國家であつたならば、世界はそのまゝ永久に、平和狀態のまゝ進展して行つたであらう。治安のための行政的な普通の警察的强制行爲は別として……。そして全世界は、悉くイギリス帝國の旗の下に文化が榮へることであらう。

〔註〕イギリスの國旗が、全世界を隅から隅まで包んだかの如き時代はあつた。それは、十七、八世紀に

於ける、所謂「商業資本」の運動の時代であつて、英傑クライヴや、ヘースチングスが活躍した時代である。今日のイギリスの富の基礎を築いたのは、その時代の結果であるが、「大英帝國」の著者アルベール・ド・マンジョンは、それは、全く「破廉恥的な掠奪經濟」の時代であつたと言つてゐる。(Albert de mangeon—Das Britische Weltreich. S. 291)

これが英帝國主義の夢想であつた。だが世界の推移は、そう云ふ風に進まなかつた。英帝國以外に、この世界には、大小さまざまな多數の國家が、それ〴〵素ばらしい帝國主義的幻想を抱いて、敏腕な貿易業者がどしどしと海外諸市場を開發し、その背後には、何づれも、相應な陸軍や海軍が黑幕となつてゐて、それらの市場を掠奪してゐたものである。

試みに、アフリカ大陸を見よ。アフリカの地圖を開いて見るならば、そこに、われわれは、列强が試みた帝國主義的掠奪のみにくい食ひ散らかしを見るであらう。地中海沿岸のすべては、既でに、バケツ一杯の土もあますところないほどに、英吉利、伊太利、佛蘭西、西班牙のものになつて居る。この地中海沿岸の背面地(註、背面地(ヒンテルランド)とは一定の市場へ集散を行ふ原料生產

地、所謂「被搾取地帶」)は、ことごとくイギリスか、フランスかに所屬してゐる。今日、われわれが、アジアへ旅行するには、英吉利領のスエズ運河によるか、または、遠く喜望峰を迂廻して行かなければならない。が、その行程に於いて、到るところに、われわれは、列强の植民地を見るのである。かつて、獨逸のカイゼルが、獨逸にはもはや、太陽の照るもとには領地が殘されてゐないと嘆じたのも、無理からぬことである。かの一九一四―一九一八年の歐洲大戰は、要するに、その裏面には、英・佛・伊の資本家、他方には、獨逸の資本家があつて、相ひ互ひに、アフリカの市場獲得のために戰爭をはじめたのである。勿論、その表面の原因としては、例へば、オーストリイが墺國皇儲フェルヂナンド夫妻の虐殺(註、一九一四年六月二十八日)に籍口して、セルビアを蹂躙したからだとか、イギリスは三角同盟(註、英・佛・露間)のために、佛、露に味方して、獨逸に宣戰布告をしなければならなかつたとか、さまざまなことが數へあげられてゐる。

であるが、何づれにしても、英・佛・露の三角同盟とか、獨墺の二國聯盟がなかつたならば、

戰爭は起らなかつただらうし、そして、その同盟も亦、巨大な軍備をもつてゐなかつたならば、戰ふにも戰へなかつたわけで、殊に、獨逸が、海外諸市場や、獨逸國境を防禦するために備へてゐた海軍は、實に尨大なものであつた。これらの軍備は、元來、國家の平和のために設けたものであるが、それが却つて、國家の脅威となり、世界の何づれの國家も軍備なしでは安固として居ることが出來なくなつたのである。これらの軍備擴張——市場獲得又は維持のための——が戰爭を誘發したものである。

扨て、海軍をして戰ひに勝利を得せしめるためには、どうしてもその背後に强力な陸軍が裝置されて居て、海軍の行動を少なからず支援せねばならぬのであつて、かゝるが故に、世界各國に於いて、陸軍は海軍と併行してさかんに膨脹しだした。各國の軍擴競爭は、さながら、ダービイに於ける競馬熱のやうに流行しだした。その結果、白色文明國民に備はる友愛的感情は、にわかに、恐怖心を呼び、憎惡や、敵愾心や、無慈悲なものに化したのである。かくして、爆彈が破裂され、それと共に、何百萬の生靈が消え去つたのである。しかも、その大戰の理由と

しては、「アフリカ市場獲得のためだ」と言ふことは、持ち出されず、オーストリイとセルビアとの間の紛争といふことだけが、表面の理由として述べ立てられてゐる。こんな紛争ならば、人間が人間並の人情を以て相對したならば、決して、流血の慘事（註、戰爭を指す）を惹き起さずに圓滿に解決を見たものを、兩者が、（註、三角同盟と二國同盟とを指す）資本家的な敵愾心を以つてゐたので、あんな結果を生んだのである。

こゝで注意して置きたいことは、資本主義の端初的時代にあつては、資本家等は、何も市場獲得のための戰爭にわれわれ市民の手をかりずに、例へば、獨逸の傭兵とか、イギリスの志願兵のやうな職業的な軍人をして、この大喧嘩をやらせたものであるが、今日では、戰爭は、馬鹿々々しい程規模が大きくなつたので、そう云ふ軍人だけでは間に合はなくなつたのである。そのために、男と名のつくものはことごとく、亭主も、父親も、息子も、戀人も、弟までもが、鐵砲をかつげるだけの力と若さがあるものは、ことごとく引つぱり出されて、宛然、屠殺場に曳かれて行く哀れな家畜のやうに、塹濠のなかにほうり込まれ、妻子を棄て、家庭や職場を離

れて、全く人道なんてあつたものぢやない。只管、こうした行爲が英雄的で、後世にその名を殘し得るものだと、絶えず醋覺をいだかされてゐたのである。その實、彼等は戰爭が怖くて居たたまれず、戰線で敵と相對峙してゐながらも、敵もまた、われわれと同じやうな恐怖心をもつてゐるのではないかといふことを直覺するにちがひない。そして、こう云ふ直覺をもつことは、すなはち、植民地市場に於いて彼等資本家が抗爭をつゞけさへしなければ、われわれは、互ひに殺しあふのではなかつたのだと思つてゐることを意味するのである。

わたくしが、こゝにわざ〳〵歐洲大戰を引き合ひに出したことは、諸君の良心が、さぞや、この戰爭のために如何樣に苦しめられたかを考へたいからである。諸君はこのヨーロッパの市民たちが脅威す可き手段に依つて、何百萬と殺し合ひをやつたことを御承知であらう。或は諸君のうちには、十字勳章を拜領したものがあるやも知れないが、それは何のために貰つたものであるかと申しますれば、彼等は、飛行機に搭乘して、敵地深く飛翔し、無辜な村民が眠つてゐる部落に、空中から爆彈を投下し、いたいけな子供達はそのために、小さい身體を木葉微塵

にくだき、その兩親を傷死させたといふにすぎないのである。これは、あるひは、軍國主義者、國家主義者、乃至は、その他の利己主義的な愛國者から見れば、偉大な武勳とも考へられるやも知れないが、さて、これを宇宙の道義觀から見たならばどうであらうか。イギリス人、ドイツ人、フランス人、トルコ人、その他すべての人類を、愛兒のやうに慈しむ天地大神の眼から見るならば、かゝる行爲は、まるで、惡靈が地獄で暴れ狂ふてゐるといふより他に考へられないものである。こう云ふ行爲は（註、戰爭を指す）人々をして、人間の本性といふものに對して、絕望を感じさせるにちがいないであらう。

扨て、この歐洲大戰爭といふものの罪責は、われわれ人間の本性によるものではなく、資本主義組織の缺陷によるところが多いのである。といふのは、われわれが資本主義をして、自由勝手に、われわれを支配するまでにはびこらしめたために、遂に資本主義は、盲目の妖怪と化して、もう、われわれも、また資本家さへもどうすることも出來ないやうになつて了つたのである。如何にどうかしてゐるからと言つても、われわれのヨーロッパの青年たちが、何も自ら

すき好んで、山野に塹濠を掘つて、お互ひに人を殺すためにもぐりこむわけはなく、また、その塹濠に爆彈を投下して、お互ひに肉塊を飛散させ合つたり、乃至は、內地にゐる母親にしても、すき好んで、わざ〳〵他所行きの晴着を着飾つて、息子がよその母親の赤ん坊を殺害したことを、まことに光榮と思つて祝賀するはづのものではなからう。

しかるに、これを（註、殺人と掠奪とを指す）一種の光榮の如くに見せ掛けやうとしたのは、資本家の一群と、そして、資本家の部下である資本主義的な新聞紙とである。彼等資本家は、彼等自身を欺き、われわれを說き伏せて、戰爭は、假令、クリスマスカードや國際聯盟があつたところで、（註、宗教家が非戰論をとなへたり、國際聯盟が國際平和を主唱したところで、）絕對になくなるものではないと頑張るのである。だが、彼等の論ずるところには、眞理の片鱗だもない。その證據は、あげればあげることが出來る。第一に、われわれがそんな殺人的行爲を嫌がつてゐたことや、强制的に戰爭に送られてゐたことや、如何に、われわれが戰爭といふものの脅威をうけてゐたことやは、その戰爭が突如「休戰」布告となつた際に、われわれがさな

がら、頭から古帽子をぬぎすてるやうに、それまで抱いてゐたところの英雄的擬制行爲をふりすてゝ、如何に、何週間も、雀躍して、街頭にステップをふむであらうかといふことを見ても、わかることではないか。また、われわれは、勝利などといふ考へは何時の間にか忘却して、たゞく、休戰を希ひ戰爭の中止を望んだことか、また、各驛から、白いペンキで塗られた赤十字社の運搬車で悲慘な負傷兵が、陸續とはこばれてくる光景を、もうこれで見ないでもすむと考へるだけでも、われわれは、無上に救はれた氣がするのではなからうか。

だが、何故に、こんな慘めな怖る可き戰爭が惹き起されるのであらうか。理由は簡單である。これを要するに、單純に、國をあげて一握りの資本家のための利潤追求のために働かされ、支配され、そして、養はれ、着せられるにまかせたからである。そしてそれは「この地上にすむ全人類のため」の正しい繁榮を追求しなかつたからである。

事例をあげて申しますれば、つまり、一艘の船がはじめてアフリカの海岸に到着して、自國内で賣れなくなつた商品をアフリカの土人に、生産費よりも高く賣りつけたといふことが、今

回の大戰を勃發させた原因である。たゞに、それのみならず、なほも、われわれが生活や道德を現狀のまゝ資本主義にまかせて置いたならば、將來に於いて「所謂」戰爭よりも他のそしてもつと惡性な戰爭を惹起するであらう。すべてかゝる大きな怖る可き惡性は、そのはじめは至極些細な、害があるとは思はれぬ事柄から起つてくるものであることを忘れてはならない。

〔註〕「帝國主義戰爭に就いて」と題して、以上譯出したものは、Bernard Shaw—The Intelligent woman's Guide to socialism and capitalism. chapter 40. "Empires in collision" の一部分である。

戰爭の經濟的考察

バアナード・ショウ

千九百拾四年にわれわれは、世界大戰に參加した。戰爭といふものは、おそろしく、費用がかゝるもので、またおそろしく破壞的なものである。

〔註〕近代に於ける主なる戰爭の經濟上の費用は、大體、次の如く、評價されてゐる（單位百萬弗）

ナポレオン戰爭（一七九三―一八一五年）	六、二五〇
アメリカ南北戰爭（一八六一―一八六五年）	五、〇〇〇
普佛戰爭（一八七〇―一八七一年）	二、五三四
日露戰爭（一九〇四―一九〇五年）	二、五〇〇

歐州戰爭（一九一四―一九一八年）　一八六、三三三

しかし、これらの數字は、參加國の直接的費用のみを計算したもので、間接的經費、即ち、財産の損失、資本の下落、生産上の損失、貿易の妨害、中立國人の損失、戰時救濟費等の如きものを考慮に入れれば、さらに、尨大な數字に上るのである。また、一七九〇年から一九一三年の間に至る重大な九つの戰爭中に失はれた人命の數は、四百四十四萬九千三百人であつて、このうち、ナポレオン戰爭に於いては、二百十萬人、クリミア戰爭に於ては、七十八萬五千人、アメリカの南北戰爭に於いては、七十萬人を算し、殊に、一九一四年から同一八年までの世界大戰中に於ける人命の損失は、

判明せる戰死者	九、九九八、七七一
重　　傷　　者	六、二九五、五一二
其他の負傷者	一四、〇〇二、〇三九
捕虜及び行方不明者	五、九八三、六〇〇
合　　計	三六、二七九、九二二

以上の如く、約三千六百萬人である。

すなはち、金錢の關する範圍内に於いては、戰爭の結果たるや、丸損である。また、すべて

が、現物で支拂はれねばならぬものであつて、我々英國人は、約束手形や、抵當證劵、國債などでもつて、獨逸人をやつつけることは到底出來ない。敵をやつつけるためには、食料品、被服類、武器、彈藥、並びに、兵士、看護婦、自動車、そして、軍需品を製造する婦人勞働者なぞが入用である。われわれの軍隊が、被服を着盡して了ひ、食料は食ひつくしてしまひ、彈藥も種切れとなり、流血は合して、小河となつた際には、もはや、食ふものも、飲むものもなく、着るものも、その他一切の生活の必需品が、皆無となつて、すべてのものが、たゞ、荒寥たる廢墟となつて了ふわけである。英國政府は實に、千九百十四年から同十八年までの間に、軍需品のために、莫大な負債を負つてしまつた。また、そのために、英國の若者の血と職場は、奪ひさらはれたのは勿論のこと、有無を言はさず彼等を戰場にかりたてゝ、その仕事を破壞し、どんな仕事でも、何等の賠償もなしに徵收してしまつたのである。だが、御承知の如くに、英國政府は、資本家の政府であるが故に、資本家階級からは、兎角、必要とする程、金錢をとりたてず、わづかに、稅金として、若干を徵收したに過ぎなかつた。けれども大體は、借用した

といふことになつてゐる。

〔註〕世界大戰中に於ける英國の特別課稅、軍事公債の善後策については、ピグウの戰爭經濟學を參照せられたい。即ち、

Pigou, A. C—The Political Economy of War 1921. P189—232. (高橋淸三郎譯ピグウ戰爭經濟學一七二—一八四頁)

貧乏人からは、殘酷にも、生命と生活とを剝奪し、かれらを拘束してゐるのに、金持ちからは、たゞに、借金をするだけなのだから、英國の勞働黨が、極力これに反對するのも、何等不思議ではない。

〔註〕歐洲大戰中、英國の勞働黨は、自由黨の左翼として、所謂「擧國一致」內閣を助けたが、戰爭は、イギリスに於ける他の政黨の政策に多少の變化をもたらしたやうに、それは、英國の勞働黨のそれにも變化をもたらした。即ち、一九一六年一月二十六日から三日間、ブリストルに開かれた勞働黨の會議の決議中に、それを見るのである。

Report of Annual Conference of Independent Labour Party. Newcastle—1916. P. 20.

右の決議中には、財政事項について、次のやうに言つてゐる。

「現戰爭の齎した財政的負擔、それに由來する國民的貧窮、及び、之に基く商工業の不振に鑑みて、この會議は、政府の財政政策が不徹底にして、不健全なることを認め、現在の如く、借金を加重させて行くことは、徒らに、負擔を後世に殘すものであると認める。租稅の大部分を食物からとることは、不正にして、また、いたづらに、貧困者を苦しめるものである。所得稅の免稅點を引き下げることは、變則にして、不當、到底許すことの出來ないものである。自由貿易を棄て、保護貿易といふ不正の制度を復興するが如きは、その影響恐るべく、ひと度、其の端を啓かば、これを資本家の搾取の手段とする惡弊は、底止するところがないであらう。かゝるが故に、この會議は、戰費は、よろしく、大所得重課の方法によつてこれを調達し、土地に特別課稅を爲し、相續稅を特に重くし、資本に累進稅を課すべきことを提唱する。而して、鐵道、鑛山、船舶、銀行、及び保險は、これを國營とすべきことを主張する。」

この勞働黨の財政策に對して、ショウが屬するフエビアン協會の主張は、所謂集產主義の主張を、戰時財政にあてはめたもので、地方自治體の權限を著しく增さんとしたのであつた。

然しこの反對も、無視されてしまつた。從つて、兵士や、軍需品生產に從事してゐる一切の勞働者を支持するに必要な供給は、そのすべてを、無賠償で徵稅するといふやうなことをせずに、大部分は、資本家から借用したのである。而かも、その借用金は、百ポンドに相當する物

資に對して、年五ポンド宛の利子がついて居て、資本家は、何等勞せずして、彼等の政府に貸した資本が、再びその手許に歸つて來るまでは、毎年五分の利子を受けとるやうに出來てゐる。

わが英國は、千九百十四年までには、それ以前の戰爭のために、六億六千萬ポンドの借金を負つてゐたのであるが、それが、歐洲大戰のために、一躍七十億ポンドに增加したのである。だから、われわれは、此の借入金を完濟してしまふまでには、貸主に對し、利子として、毎年三億五千萬ポンドを支拂はねばならず、さらに、通常經費の三億ポンドが必要であるのみならず、陸軍、海軍、空軍の裝置、そして國家的な社會施設も行はねばならないのであつて、そのためにも、通常經費位（約三億ポンド）は必要であるし、今や、大藏大臣は、平均一日に、二百萬ポンドの豫算を編成せねばならないのであるから、あらゆる手段を弄しても、これをわれわれのポケツトから卷きあげるのである。ところが、その經費をプロレタリア階級から取り上げやうとしても、現在、プロレタリア階級には、實に、百萬人以上の失業者があるのであるからして、かれらから稅金を徵發するどころか、反對に、經費のなかから失業救濟資金を出し

て、保護をせねばならない有様である。そこで、かれらは却つて、金持ち階級から資金を徴收することになる。すなはち、所得税、超過税、家屋税の類がこれであつて年に三億八千萬ポンド以上を、斯くして、とりたてるのである。これを、一日に計算して見れば、百五十萬ポンド見當になり、英國の全税額の約半分以上に相當する。これがすなはち、復讐的に行つてゐる沒收 (Confiscation with a vengelance) 即ち、應酬的剝奪とも云ふ可きものである。

政府は年利三億五千萬ポンドを支拂ふといふ約束のもとに、資本家から七十億ポンドの大金を借りてゐるが、しかもその年利を支佛ふために、政府は每年三億八千二百萬ポンドを彼等資本家から、税金として徴收してゐるのであるからして、實は英國の資本家以外に、外國の金貸しにも利子を支佛つてゐる勘定になるが、これはまことに奇妙なことのやうに思はれる。要するに、英國の資本家は、每年ざつと、五十萬ポンド以上の差額を徴達されてゐるわけであつて、政府から國債の利子をもらうにしても、結局この差額だけは損をして居ることになる。政府は右の手で與へるが、それ以上のものをすなはち、約一割七分以上も左の手で奪ひとる

のである。だが、彼等資本家階級は何故に默々として、この無法に甘んじてゐるのであらうか。

その理由は、至極簡單である。もしも政府が軍事公債の所有者に對して、その利子として支拂ふ金額以上に、百ポンドに對して三ポンド六片の割合で、より多くを徴收したならば、軍事公債の所有者は、誰れでも、口を揃えて叫ぶにちがひない。『こんな馬鹿なことがあるものか。一層のこと、われわれは、軍事公債を棒引きにする。それで結構で御座いませう』と。しかし、事實は、そう巧くは行かぬ。軍事公債の債券所有者は、有産者階級のほんの一少部分だけのものであるが、納税者は、有産者階級のすべてに行き亘つてゐて、やれ所得税だ、葬儀税だ、所得額が二千ポンド以上だから、附加税だと言つた具合に、税金を拂はねばならない。歐洲大戰の際、軍事費として、政府に資金を出さなかつた連中は、現在、政府から一文も貰つてゐないが、軍事費として、政府に金を貸したものは、總計一年に、三億二千五百萬ポンドを收得して居るのであるが、税金は有産者階級の全般に賦課されるのである。從つて、有産階級全體とし

ては、この國家との取引きでは損失を蒙つてゐるのである。また、軍事公債を所有してゐる有産者だけは、それを所有してゐないところの有産者等を犧牲にすることに依つて、利益を得てゐるのである。すなはち、政府は資本家甲に利子を支拂ふために、資本家乙から金を捲き上げて居るのみでなく、資本家甲に支拂はねばならない利子額以上を、甲乙双方の資本家からまきあげて居るのであつて、甲乙兩者を併せて考へれば、資本家は政府のために窮迫されてゐる。甲だけの場合では、彼は儲けることになつて居り、從つて甲はこのからくりでは、政府を支持してゐるのであるが、また同時に、乙は稅金の重壓下に、不滿を抱いてゐるわけである。

事例を以て、これを示すならば、私の女房も、また私も資本家の一人でありますが、しかし、私は若干の軍事公債をもつてゐるに反して、わたしの女房は、金を銀行に預けるとか、鐵道、其他の株式の形で、財産をもつてゐるとする。

〔註〕バアナード・ショウの夫人は、シャロット・フランセス・ペイン・タウンセンドと言ふフエビアン

協會の婦人幹事で、また社會主義の信奉者であるが、有名なイギリスの大地主でもある。皮肉な批評家は、ショウが今日の地位をきづきあげたのは、青年時代に於ける母からの仕送りと、壯年時代に於けるシャルロットからの經濟的扶助があつたからだと言つてゐるが、或はそうかも知れない。が、何づれにしても、ショウ夫妻が金持ち階級に屬することには變りがない。

ところで、政府は、わたしへ、軍事公債の利子を支拂ふために、わたしにも、また、わたしの女房にも、同樣に課税をするのである。だが、政府は、私へは利子を支拂つてくれるが、私の女房へは、一文も拂つてはくれない。これは要するに、私は女房を犧牲にして、政府から利子を貰ふわけである。他言すれば、私達は夫婦といふ共同的な關係にあるので、利害の點では、喧嘩をせずに居られますが、これが夫婦でなかつたならば、到底衝突は免れない。が、幸ひ、世間の資本家等は、この間の事情にうといために、政府に依つて巧みに、操られてゐるのである。しかしながら、この事情に通じてゐる者があつたにしても、政府のからくりに反抗するに

は、意見が不一致であるのであつて、總選擧に際して、よくその結果が現はれて居る。かやうな妙な事情が、遂に英國の勞働黨をして、國債の棒引きを叫ばしめたのである。すなはち、一切の國債を帳消しにした方が、却つて、有產者階級全體にとつては、利益ではないのかと言ふのである。そして、國債をすべて、棒引きすれば、英國民が國民自身に借金をしながら、それを償却するために、重稅に苦しめられるといふやうな不合理が解消して了ふと言ふのである。國債の棒引きとは――外國人に支拂ふ小額は別として――畢竟するに、總體としては、國家に何等の損害を與へずに、國民に所得の再分布（Redistribution of Income）を行ふといふことである。

〔註一〕英國の勞働黨は、千九百十九年ニユー・ポートの第十九回勞働會議に於いて、次の如き議案を決議してゐる。

『戰爭は、國民に巨額の債務を殘したので、この債務の元利を拂ふためには、每年巨額の歲入を得なければならない。そして、この過重な負擔は、當然に產業的社會的復興の妨げとなるものであるから、財政を、根本的に改革し、課稅の方法を徹底的に改めることは、現下の急務である。戰時中、巨額の

資産を作つたものが多いのは、それは、國家の地位を私利のために利用して得たものである。この故に、この黨會議に於いて、われわれは、次のことを宣言する。

(一) 從來政府が採つて來た戰時財政政策は甚しく不當である。不用の高利を支拂つて、巨額の借入金を爲し、信用を不當に膨脹させたため、その結果として、國民中に、租税から受ける永久的な收入によつて、生活する一階級を生じたことは、ともに不正といはねばならない。政府はよろしく、もつと、重税を課すべく特に、その租税は、戰時中に集積された富に對して課す可きであつた。

(二) 國債を償却して、それによつて、國庫負擔を可及的に速かに輕減するために、公平なる「富の徵發」(Conscription of wealth) の制度を實施する必要があることを認める。たゞし、この場合一千磅以下の財産を除外し、それ以上の財産には、累進的に、課徵すること。

(三) 歳入は主として、土地及び集積された富、すなはち、所得及び利潤より徵收する可く、且つ、その負擔の公平を期するために、所得税の賦課法を改め、相續税の根本的改正を行ひ、所得の大なる收入については、その税率を加重することである。——(以下省略)——

われわれは、この綱領に示されたところによつて、英國の勞働黨が、過去の財政政策を排擊して、公債政策を非とし、一部財産の沒收たる「富の徵發」(Conscription of wealth) を、その中心的な旗印としてゐることを知るのである。

〔註二〕バアナード・ショウは、玆に於いて、「國家財政の御破算」の要を主張してゐる。要するに、それは國債を棒引きにすることに依つて、全體としては、國家には、一文も損害をかけないで、國民に、收

入の再分布を行ふといふことである。夫が如何に非常手段を意味するにしても、なほ、且つ收入の再分布なくしては、英國が、絕對に立直らない、殊に歐洲大戰後の非常時に於いて然りであつたことを意味するものである。

また、最近一九三二年頃より、各國に、幾多の經濟的對策、例へば、購買力補給案、德政、財界救濟會社設置案、インフレーション、平價切下論、モラトリアム、商品ドル裝置、經濟參謀本部設立案、等々が叫ばれてゐるが、バアナード・ショウが、歐州大戰後の英國財界に對して、「收入の再分布」(Redistribution of Income)の要を主張してゐたことは、ともに、非常時對策の意味に於いて、機を一にしたものであるやうに思はれる。また、われわれは、この點に於いて、ショウの財界に對する非常時對策なるものを知ることが出來る。

資本家に對して、直接的に課稅して、金錢を捲き上げないで、間接的に、言はゞ、借金を設定して、國庫金をつくり出す計畫といふのが、「公債募集」(Funding)と稱されて居る。だから、資本家が政府に一時融通することが、公債應募といふわけになる。從つて、政府が資本家から

借用する條件として、借入れ金を還却するまでは、彼等に利子を支拂はねばならないのであるからして、茲に、金貸業者にとつては、奇妙な現象が起つて來る。すなはち、金貸業者は、政府に金を融通しても、元金が不拂ひとなる心配が無く、政府へは、信用して、金を借しても良いことになる。また、政府側としては、實際上、その支拂期限以前には、償還を行はないといふ契約が出來るのであつて、その結果、支拂期日を延長しても、結構だといふことになる。一般に、金持ちといふものは、元來、利子（貸した金が返つてくるまでの損料の意味である）だけで、うまくやつて行くのが、本道であつて、それを、利子は申すに及ばず、元金までも手をつけることは、資本家的な道義觀に照せば、言はゞ、倒産者浪費者と見做すことが出來るのである。

〔註〕以上の意味に於いても、明白であるやうに、金持ちといふものは、利子浪食者、ブハリンの言葉を引用すれば、「金利生活者」（Rentners）といふことである。（佐野學編輯スタリーン・ブハーリン全集第四卷、金利生活者の經濟學、參照。N. Bucharin—Die Polilitsche Oekoromie des Rentners. 1919）

だから、資本家は、彼の餘剩物資を自分だけで消費することはせずに、假令、世間が不況であつても、彼が飢餓するまでは斷じてその餘剩物資を失ふまいとする。そして、必ずその餘剩物資を、何か所得になるもの（利子を生むところのもの）に振り向ける。そして新たに購入したものが利子を生まなくなつたり、または元金を償還するかすれば、その金貸業者はその餘剩物資の總額をそのまゝそこに放還せずに、これを他の方向に「投資」（Investing）するのである。

〔註〕ショウが茲で指摘してゐることは、正當なことである。申すまでもなく、事情がノルマルに進行するかぎり、實際においては、生産されたる剩餘價値は、その全部が金貸業者により、消費されるのでなく、その或る部分は、必ず資本化され、從つて、元本たる資本は增大され、それゆゑにまた資本家的な生産は、次第にその規模を擴大してゆくものである。しかし「簡單なる再生産」は、いつでも「擴大されたる再生産」のうちに、一つの要素として含まれてゐるものであることは、注意する要がある。

だが、このことは、たゞに物資を節約するといふことではなく、實は金貸業者にとつてはそれは必要缺く可からざることなのである。といふのは、金持ちにとつては投資することは、物資が無駄にならない以前に消費してくれと言つて、その物資を貸し出すことであつて、その消費された物資は、再び投資者の手許に歸つてくる筈のものではない。

〔註〕われわれは、こゝで言ふ餘剩物資を偶像禮拜的に考へず、その偶像禮拜的特質をさらに、分析する必要がある。

既でに御承知の通り、餘剩物資を投資するといふことは、勞働者の一群に對して、その餘剩物資を食ひつくしてくれと言ふことであつて、その內に、彼等投資家は、更らに新規に所得を生むところの、例へば、鐵道とか工場とかの株を買つてゐるのであつて、一度消費された餘剩物資は、決して、再び元通りにはならぬものである。今假りに、諸君が友人とかまたは會社乃至政府とかに、諸君が本年中に餘剩し得た物資を貸したとしても、その友人や會社や政府は諸

君が彼等に貸したものに相當するだけのものを、今後二十年間に諸君に返却するとか、または其の損料として、若干の利子を支拂ふだけのことであつて、彼等は諸君に對して、以前に借用した物資と同一のものを、そのまゝ返却することは、到底出來るものではない。

扨て、戰爭は、われわれの餘剩金を、生產的方面に使用せずに、破壞的な方面にばかり浪費するものである。英蘭銀行の帳簿を見ると、大勢の人が資本の所有者として、政府に金を貸して居り、その國債總額が約七十億ポンドに達してゐるのであつて、世間では一般にその七十億ポンドに相當するものが、現在あるやうに申されてゐるが事實はその七十億ポンドは價値がないのである。彼等が誇るその七十億ポンドは、旣でにその昔飮み食ひされ被服として着破られ、あとかたもなく霧散して了ひ、別口の生命財產とともに、世界中のあらゆる戰場に於いて、粉破微塵になつて了つてゐるのである。以上の如く、我が英吉利は、誠に變つた姿になつてゐるのであつて、表面は、七十億ポンドの財產をもつてゐるやうに見へるが、その內情は、一文の財產もなく、而かも、每年約三億五千萬ポンド宛を、勞せずに遊んでゐる公債所有者に支拂

つてゐるのである。すなはち、公債所有者は、かくして、何等生産に直接に參加することをせずに、完く寄生的に、巨額の富を消費してゐる。これは、丁度破産を宣告された者に對して、何か若干の貯蓄があるかと問ふたに對して、破産された者が傲然として、『いや、なあに、私は財産をすつかり湯水のやうに遣ひ果して了つたので、殘つてゐるものは數へきれない借金の證文だけだよ』といふのと同樣である。英蘭銀行の元帳に、公債所有人として記入されてゐる七十億ポンドの資金は、富ではなくして、いはゞ、借金である。さらに、これを判り易く言へば、これらの軍事公債の所有者が、利子を政府から貰へなくなつたために、やむを得ず、金持ちたちが、勞働をしなければならなくなつた場合に、政府には年三億五千萬ポンドの利益があがると同時に、金持ちが生産に參加することに依つて、莫大な富を收めることが出來ることである。從つて、國家財政、殊に戰後の非常時財政にあつては、軍事公債を棒引きにすることが國民の利益になるのである。だが軍事公債の棒引に反對することは、その帳消しに依つて、英國民が窮乏化するといふのではなく、たゞそれは、契約の破棄を意味するし、そんなことをす

れば、將來、政府に金をかすものがなくなるからである。加之、そんなことをすると、われわれに約十億も貸しゐるアメリカ合衆國が、戰債支拂要求のために、武力に訴へてくるかも知れぬからである。であるが故に、軍事公債を帳消しにするやうな如何にも皮肉な不正直は、どうにも實行しかねると申さねばならない。と申しても、これは對外的の意味合ひに於いてゞあつて、對內的に、英國の資本家に對しては、正直さうに右手で支拂をしてやつて、左手では、その支拂額にさらに、一割七分の利子を加へただけのものを、奪ひかへすことをしてはいけないといふ理由はないわけである。

この機會に一寸申し述べたいことは、このわたくしの發案を非難する人が現れて、諸君に次のやうなことを言ひふらしはせぬかといふことである。例へば、わたくしが以上に揭げた數字は不正確であるとか、ショウなんて男はてんで、信用が置ける人物でないとか、そんな數字は概數であるからどうだとか、公債總額は年々の償還によつて、刻々變るものだとか、ポンド相場は動いてゐるとか、或は、英國がアメリカから借りたところの約十億の戰債は、われわれが、

るにしても、或る國は、少額でも支拂はうとしてゐるではないかとか、或は、軍事公債や戰債の殘高を調査した方法たるや、意地のわるい統計學者をして、實際われわれが消費した額よりも二倍も借り入れてゐるかのやうに、英蘭銀行を通じて僞瞞的な統計をつくらせたものであるとか、乃至は、剩餘金の市場價格が騰貴したために、資本家がうけつゝある利益は、充分に、戰時課税でしぼりとられる以上に償つてゐるとか、等々、言ひふらすことである。上述の軍事公債については、問題は簡單であつて、徒らに、不必要な雜多のものを持ちだして來るので、却つて、說明の目的が不鮮明となるのである。わたくしの議論は至極簡明であるから、雜多な事情は一切すてゝしまひ、諸君に籬を見せず、巢だけを見せやうとしてゐるのである。

要之、わたくしの戰爭に對する考察は、次の通りである。戰爭は徒らに莫大な資本を濫費するものであるといふことである。戰爭に依るかゝる濫費は、その跡に、われわれの產業組織の擴大化とか交通機關の發達とか、その他、富の生產物を增加せしめるやうな諸計畫を殘したの

ではなくして、まさにそれとは正反對に、それらのものを根抵から破壞し去り、戰前よりは世界をして、分配すべき所得額を、おそろしく消滅させるものである。現に歐洲大戰に際しては、戰爭はまた三つの帝國を衰亡させた。そして、ヨーロッパに於ける國家政體としての君主政體に換へるに共和政體を以て代置せしめ、ヨーロッパをして、アメリカと同樣な、共和政體の大陸たらしめたのである。或は諸君は、この政治組織の變更を以て、巨額の戰費に償するだけのものであると、なすかも知れないが、この結果については、英國は勿論、どの交戰國も、かう云ふ風に計畫したのではなかつたのであつて、或は、その結果たるや、見やうによつては、誹謗すべき一大破碇とも云へるであらう。然し何れにしても、これは、道義上のことであつて、經濟學上の問題ではない。また諸君がかうした政治的結果について、これを滿足に思ふが思ふまいが、戰爭の經費には、變りがあるわけでなく、また、われわれの國民所得を分配するにあたつて、幾多の影響があることは事實である。われわれは、皆一樣に、重稅を課せられ、それがために、資本家の一部、すなはち、五分利軍事公債を所有してゐるものを助けてゐるのであ

つて、(まことに、五分利とは高すぎる利子であつて、また、安全第一の投資ではないか)軍事公債所有者を救濟するために、爾來、一日に百萬ポンド見當を、われわれの勞働の所産のなかから、提供してゐるわけであるが、それが、何の役にも立つてゐないのである。

だが、實は、われわれはそれを課税によつて取りかへしてゐる。資本家階級に税を課することによつて、それよりも多くのものをとりかへしてゐる。云はゞ、資本家階級に對して『所得の再分布」(Redistribution of Income)をやつてゐるのであつて、それによつて、プロレタリア階級は、多少は良くなつて來てゐるが、不幸にして、この「所得の再分布」は、所得を平等にするとか、または、勞働しないものを排撃するとかには役立つてはゐない。

以上がわたくしの戰爭の經費に對する所說であるが、更らに一言すれば、若し政府にして、國家的な事業として、男女無數のプロレタリアに對して、就職の道を講ずるとしたならば、よしそれが破壞的な事業であらうとも、無制限に職業をあたへ得るならば、政府が、何十億の巨額の資本を國家の手に沒收しようとも、それは道義的であり、まことに望ましい次第である。

更らに、こうしたことが、（プロレタリアに職業をあたへることが）破壞的な仕事ではなく（戰爭の形式によらずに）血を流さずに爲し得られたならば、まことに、結構なことではなからうか。

〔註〕ショウの戰費に對する所説を、以上譯出したが、これは、Bernard Shaw—The Intelligent woman's guide to Socialism and Capitalism, 1932. Chapter 63. "How the war was paid for" の一部分を收錄したものである。

〔附記〕本章については、次の如き文獻を參考せられたし。

加藤朝鳥氏譯（ショウ）解説社會主義と資本主義　昭四・九
槇義衞氏譯（ムジユリエ）社會主義の修正、バアナード・ショウ氏に答ふ　昭五・五
隆章閣譯（ショウ）時局に立つアメリカとロシヤ　昭八・四
改造社、改造（バアナード・ショウ特輯號）　昭八・四
石田賢次氏著バアナード・ショウ眞髓　昭八・五
生形　要著「ショウ」を語る　昭八・六（不動書房版）
Bernard Shaw—What I really wrote about war. 1931.

Bernard Shaw—The Political Madhouse in America and Nearer Home. 1933.

G. Chesterton—Bernard Shaw. 1927.

A. Henderson—Bernard Shaw, playboy and prophet. 1932.

Frank Harris—Bernard Shaw. 1931. [P. 300—325]

バアナード・ショウに就いて

ヂョーヂ・バアナード・ショウは、一八五六年（安政三年）の七月二十六日、ダブリンに住む新教徒の子として生れたアイルランド人である。彼の系圖を辿ると、先祖はスコツトランド人の血を交へて、八代ほど以前に、イギリスからアイルランドへ移住して來た、といふことになつてゐるが、彼の先祖が誰であつたかといふことよりも、彼自身がアイルランド生れであるといふことの方が、重大である。

と言ふのは、チエスタアトンがこれを指摘してゐるやうに、彼は、母國アイルランドから二つの特質を植付けられてゐるからである。すなはち、アイルランド人の特質としての「智的潔

癖性」と、「闘爭的精神」とがそれである。ショウの智的潔癖性は、何よりも、彼を、清教徒として現はしてゐる。清教主義者は自分と神との間に生きた何者の介在をも許さない。ショウはこれを、智的なあらゆる方面に押しひろめて、持前の烈しい闘爭的精神でもつて、これを闘ひ取らうと努めてゐる。彼の作品の多くが他に類例の少いほど、議論がましいものになつてゐる所以が理解される。

〔註一〕彼の作品を見るに、議論がましい序文の方が本文よりも、量的に質的に多いのである。
〔註二〕野上豊一郎氏、バアナード・ショウの表現本質、(改造、昭八・四　三七〇頁)。Chesterton, G. K. G—Bernard Shaw. 1927. (武部達雄氏譯、バアナアド・ショウ　大・一四)

ショウは、清教主義者である。ショウが少くとも、カトリツク教團に於いて受けた新教的教育が、彼の精神に影響を及ぼしたことは、疑ふ可くもない事實であるが、しかし、ショウは、カルヴイン主義者であると同時に、他面、宗教から獨立した一個の人間でもある。イブセンは、ノラの名を借りて、因襲や道德といふ偶像を破壞したが、ショウは、この「偶像破壞主義」と

いふ偶像を破壞しやうとしてゐる。だから、彼は淸敎主義者ではあるが、カルヴィン主義がもつ因襲や傳統に對しては、何時も、破壞的に見るのである。例へば、彼の最新作である「神を探す黑人娘の冒險談」を見ても、如何に、彼が、宗敎に對して、反逆的であるかゞ判る。この『神を探す黑人娘の冒險談』の內容が、神を冒讀するといふ理由で、一九三三年四月、ケンブリッヂの公衆圖書館では、ショウ翁の著作の閱覽を、禁止した位である。

〔註〕ショウはカルヴィン主義者であるが、また他面に於いて、無神論者であることは、彼がアイルランドに住んでゐた少年時代からのことである。一八七〇年、ショウはウエスリアン商業學校を卒業した拾五歲の頃である。ダブリンのあまり有名でない、或る土地管理會社の雇員となり、面白くもない仕事を五年間もつゞけてゐたことがある。その頃、米國からダブリンに來たムウデイとサンキイと呼ぶ二人のクリスチャンの講演を聽いて、彼はそれを、罵倒し、「あれが基督敎なら、僕は無神論者になつてやる」と豪語した。そして、宗敎に關する短い論文を、ある雜誌に投稿して、彼の叔父達を驚嘆させたものである。だから、ショウが、宗敎に對して、反逆的であることは、彼の少年時代から既に萠芽へてゐたものと思はれる。

清教主義者であるが、宗教に對して反逆的であるやうに、また、ショウは哲學に對しても、政治に對しても、同様に、反逆的である。尤も、ショウは哲學者であつて、哲學者ではないと謂はれてゐるのは、ショウには、これと言ふ思想體系がないからであるし、また、これと名附く可き哲學論文がないからでもあるが……。

〔註〕Frank Harris—Bernard Shaw. An unauthorised Biography based on firsthand information. 1931.

しかし、ショウは、進歩的である。であるが故に、街頭で社會運動に從事したり、或は歐洲大戰に際して、聲を大きくして、非戰論を提唱したりした。彼は、時流に棹し、小說家、戲曲家としては、たしかに、一歩前進してゐるところがある。

〔註〕野上豊一郎は、バアナード・ショウが藝術家の一群中にあつて、しかも、その群より一歩前進してゐることについて、左の如く述べてゐる。
「ショウは、前世界の遺物である象よりも、進化的である。また、思想が常に新しく見へるのは、彼

がつれに世界の思潮の流に乗つて、その本流から離れないやうに、自分を保つてゐるからである。彼は二十歳の春、郷國アイルランドを見棄てて、セント・ヂョーヂ海峽を横斷し、ロンドンの人となつて以來、今日に至るまで五十七年間、恐らく一日といへども、世界の動きを感知することを怠つた日はなかつたであらう。ラマルク、ダーヴヰンの進化論的世界觀は、先づ、彼の思索機能の基礎を形づくつた。次いで、少しおくれて、ショーペンハウエルの意志說、フォイエルバッハの反神學的(唯物)思想、ニーチェの超人說、少しおくれて、ベルグソンの活力說、イブセンの性劇、トルストイの人道主義、チェーホフの人性觀そして世界大戰、ソヴエート・ロシアの建設、世界的經濟恐慌また何々、これ等すべての事象と思想とは、つれに、日附おくれになることなく、彼の思索の對象となつて、彼の表現本能を休止させない。

その結果は、彼をして、最とも進步した思想家たらしめたのである。(野上豊一郞氏——哲學者的、豫言者的、諧謔者——バアナード・ショーの表現本質、改造、昭八・四　三六一頁)

而して、彼の哲學、殊にかれの倫理的思想は、いかにも、進步的である。彼の倫理的思想の根本は、本能を習俗の代りに、おきかへるところから來て、道德は固定的なものではなく、暫定的なものであり、また、進化的なものであるとするところにある。であるが、扨て、彼の社

會主義は、進步的であらうか。

カール・ヴイツトフオゲルは、嘗て、バアナード・ショウを論じて、左の如く言つたことがある。

『英國の論客である劇作家バァナード・ショウは、決して革命的なマルクス主義者ではない。彼は、フエビアン協會の長老で、また、永らくその會員であつたところのフエビアン社會主義者である。歐洲大戰後、殊に、バアナード・ショウは、戰術上、誤謬ありとなして、共産主義の暴力的革命主義を極力排撃し始めたが、これは、要するに、ショウ翁にあつては、マルクス主義の理論も實踐もともに採用するに足らないものであるからであらう。彼がロンドンでくすぶつてゐた文學青年時代には、嘗ては、ショウも、マルクスの使徒として、「資本論」を愛讀したこともあつたのだが、今は、さにあらず、マルクス理論に對して、今日の彼の思想は、混沌として、何等把握してゐるところがないやうである。社會主義がわれわれの死後百年目に現出するものならば、何等恐るゝに足らずとなす、世の社會改造論者なみに、

ショウ翁は、自分は「社會主義者」であると自稱してゐるが、一體、ショウは、如何なる毛色の社會主義者なのであらうか。

ショウの「メトセラへ還れ」といふ長篇戲曲に現はれた社會主義者は、「所謂」社會主義者の信條を擁護してゐるが、その人物は、ブルジョア社會の古き習俗と因襲を墨守してゐる。ショウの言ふところを聽くに、ブルジョアの風習は、兎角、紳士氣取りで、決して、ほがらかなものではないが、傳統がないよりはましであるし、また、ブルジョアの體面なるものは、虛僞かも知れないが、體面なるものは、事實存在してゐると言ふのである。これが、ショウの社會主義觀である。要するに、斯う言ふ見解は、ブルジョア社會主義とも稱す可きもので、或は、僞りのない彼等の社會主義觀かも知れない。

畢竟、これは、英國有數の文豪、バアナード・ショウのほんの政治的藝術家的な人格の一面たるにすぎないが、ショウの幾多の作品を通じて、われわれは、ショウの他の一面を窺知することが出來る。ショウは、ブルジョアの最後の論客である。だが、彼は、ブルジョア的

生産社會の崩壞を認めもするし、その崩壞過程を促進せしめもしてゐる。こゝに、彼の政治上、並びに文藝上の意味があるのである』と。

〔註〕一九二六年十月十七日附のベルリン發行「デイ・ローテ・ファネ」に掲げられたヴイツトフオゲルの論文。

すなはち、ヴイツトフオゲルは、ショウを論評して、彼はブルジョア社會主義者であると言つてゐる。他言すれば、ショウは、英國流の自由主義者である。ジョン・スチュアート・ミルの自由思想と、シドニイ・ウエツブ等の社會觀をとり入れた、漸進的自由主義者である。そして、彼の自由主義といふのは、ブルジョア社會の習俗と因襲に對しては、これを、極力破壞しやうと試みるが、例へば、帝國主義戰爭に對して、贊成であるか、反對であるかについては、さつぱり旗色が鮮明でない程度のものである。或る論者が、ショウを評して、彼は、社會ファッシストであると言つたのは、こう云ふ點を指摘して、評價したものであらう。

とは云へ、ショウのブルジョア・イデオロギイ破壞主義は、一應支配者階級の精神的權力を

弱めることには、役立つてゐる。この意味に於いて、バアナード・ショウは、レーニンが、既でに、評價したやうに、ブルジョアジイの一分子ではあるが、而かもその最とも怖る可き敵である。

戰爭に對するバアナード・ショウの所論も、要するに、ブルショアの一分子として戰爭をとりあげて、これをシエクスピイア的道化を以つて、反對してゐるにすぎないものである。

かつて、ソヴエート・ロシアの詩人、小說家、そして、劇作家たちが、

『帝國主義諸國が、ソヴエート同盟に對して宣戰した場合に、貴下は、如何なる態度を取るゝか。』

との質問を、ヨーロツパ及びアメリカの作家たちに、宛てて發したことがある。

これに對する回答は、樣々であつた。例へば、プロレタリア作家たちは、直ちに、赤衞軍に加盟して、社會主義の祖國を護らうと言つたのに反して、或るブルジョア作家たちは、如何にも、平和主義者らしく、氣取つて、意味もないことを饒舌したにすぎなかつた。だが、バアナ

ード・ショウは、シエクスピイア的道化役者の臺詞を以て、巧みに回答を表現してゐる。すなはち、

『この前の戰爭では、奴等は、おれに腐れ卵を投げつけたが、今度の戰爭では、奴等はおれを絞首するであらう。』

以上の言は、ショウの戰爭觀なるものを、よく要約してゐる。そして、ショウは、「今度の戰爭で、絞首されない」やうに、ロシア、日本、アメリカを巡禮して、世界諸國に於ける現在の力關係を洞察し始めたやうに考へられる。

一九三一年八月、ソヴエート・ロシア訪問より歸つたショウは、倫敦にある獨立勞働黨日曜學校で、ロシアの印象について、講演をしたが、その席上、戰爭について、次の如く語つてゐる。

『わたくしは、ロシアを訪問して、ソヴエートの要路の人達と、戰爭問題について、語つたことがある。わたくしの見るところでは、ロシアの指導者達は、彼等のいはゆる帝國主義戰

爭をよく理解してゐることは、明らかであつた。また、わたくしも正直なところ「戰爭の危險は絶對にない」と彼等に斷言は出來なかつた。そして、たゞわたくしは、彼等に、「民衆は戰爭を欲してゐない」といふことを附言し得たにすぎなかつた。これに對して、ソヴエートの指導者は、「民衆の力ではチャーチルや、そしてその一派が戰爭を決意した時に、これを防止し得るやうには思はれない」と、わたくしに、應酬して來た。果して、諸君は、將來戰爭があるかどうか、若しあるとするならば、チャーチル一派の好戰主義に對して、諸君は、どう言ふ態度をとるであらうか、わたくしが、諸君に聞きたいことは、實に、この點である。

而して、戰爭問題について、わたくしは、スターリン氏に對して「ソヴエート・ロシアは、今重大なる危機にあると、わたくしは考へないが、クロムウエルが、嘗て云つたところの、諸君よ神を信頼せよ、だが、諸君の火藥も充分に干して置き給へ、といふあの忠言を、貴下も、率直に、受けいれた方がよいやうに思ひますよ」と、他事ながら、諫言して來てやつた。すなはち、「備へよ、常に!!」(註ロシヤ語で、ガトフ・フセグダア)と、わたくしが、スタ

ーリンに忠告してやつたのである。ところが、クロムウエルに、多大の關心をもつてゐるスターリン氏は、やゝこれに近い立場にあるものの如くに、それこそ、正に彼が現在行つてゐるところだといふことを、ほのめかしてゐた。ロシアは、此の次の戰爭がどんなものか、よく理解してゐることが、わたくしには、よくわかつた。』

バアナード・ショウが、戰爭に關して多くの論文を發表したのは、一九一四年、歐洲大戰が勃發して、英國が三角同盟の一員として、獨逸と戰つた頃である。その當時、ショウは、敢然立つて、イギリス帝國主義に反對して、非戰論を唱導し、ともすれば沈滯し勝ちな英國の論壇に、センセイションを捲き起したことがある。そして、また、實際に於いて、彼は、偶像の破壞者として、徹底的に、イギリス帝國の軍國主義を攻擊したが、それは、何等建設的な効果を發揮せずに了つたので、そのためか、歐洲大戰後、ショウ翁の意氣は、やゝ銷沈の形で、一九二五年、「セント・ジョーン」を發表するまで、これといふ偉作がなかつたやうである。

ところが、最近に於けるショウはどうであるか。一九三一年七月、保守黨の領袖アスタア子

爵夫妻や、アスタア子爵の令息ロスアン侯等と共に、ソヴエート・ロシアの五ケ年計畫を拜見に出掛け、一九三三年三月、支那や日本――極東地方――を巡遊し、さらに、アメリカを訪問してゐる。老いぼれの西歐文明に關心をもたなくなつたショウは、今日に於ける世界のトリオについて、すなはち、ロシア、支那、アメリカについて、考へ直して見たいのではなかつたのだらうか。

一九三三年の世界一週に於いて、バアナード・ショウは、戰爭について、次のやうな言葉を、支那や日本にのこしてゐる。今日の戰爭や戰鬪について、ショウが、如何なる見解をもつか、一應窺ふことが出來やう。

軍縮會議とは何であるか

一九三三年二月十一日、香港にて。

軍縮會議といふのは、要するに、たゞ、節約して安上りに戰爭しやうとするための會議である。各國民は、軍備の負擔には、本當に弱り切つてゐる。少しでも、軍縮が成功すれば、將來われわれは十六インチの砲彈に殺される代りに、十四インチの砲彈で殺される事を光榮とせねばならぬ。ジュネエーヴに集合してゐる各國の代表は、表面鹿爪らしい會議の代表だが、內容は軍事探偵なのだ。かれらは、相手の考へを探知するために、ジュネエーヴに集つてゐる。けれども、一ケ所で長い間互ひに接觸してゐる間に、彼等は國際的な狀態へと馴致される。また聯盟部內の人が、目下眞實に、國際化された意義の上に働いてゐるのはうれしい現象の一つではないか。

一九三三年二月十一日、香港にて。

經濟封鎖に就いて

最初、このボイコットといふ問題が起ると、各國の人々は、日本だけを經濟封鎖した方が得策か、または日支兩國に武器を賣込んで、互ひに儲けた方がより得策か、それについて、考へたものである。そして、結局眞劍な戰爭が折角極東に行はれつゝあるのだから、われわれは、儲けた方がよいといふので、どうやら、その方をやつてゐるやうである。

戰爭と學藝協力國際協會

一九三三年二月十七日、上海にて。

アンリイ・バルビュスやロマン・ローラン等が、會つて、わたしに、反帝會議を援助してくれと申込んで來たことがあつたが、わたくしは、回答しなかつた。それぐらゐの人が集まつて、帝國主義戰爭反對のために、幾何程、會議を開いたところで、戰爭を停止することが

出來るものではない。現在のやうに、戰爭を以つて、戰爭を防止しやうとしてゐては、いくら經つても、問題は解決されるものではない。たゞ、各國が眞實になつて、平和に生存するの決心を固めれば、戰爭は、容易に停止するものである。また國民といふものは、元來、戰爭は嫌いなもので、國民自身は、決して、進んで、戰爭をやるものではない。歐洲大戰があつて以來、それに參加した諸國は、皆ことごとく、以前のやうにはうまくやつて行くことが出來なくなつた。恐慌といふ怖しいものが各國を襲ふて來た。そして各國の經濟組織や文化は、ことごとく、破壞されてしまつた。こんな事實が國民をして、××を嫌忌せしむるのである。幸ひ、國際聯盟の一分派として、巴里に本部を置く「學藝協力國際協會」といふのがあるが、國際聯盟の外交機關がすつかり面目を失してゐるに反して、この協會は、聯盟の社會的文化的事業を協力的に支持してゐるやうだ。若し世界のインテリ層が、好く、この協會を利用して、大いに戰爭に反對するならば、別に一つの會議を組織するよりも、有効ではないかと考へる。

戰爭に就いて

一九三三年三月七日、東京にて。

われわれの戰爭に對する考へは、世界大戰以來、全く一變した。昔は、軍人同志で戰爭をやつたものであるが、世界大戰以後にあつては、戰爭は、國民と國民との間に行はれるやうになつた。これが、所謂「國民戰爭」である。そして、今日の戰爭では、飛行機や、毒瓦斯なぞを使ふやうになつた。何づれにしても、戰爭はいかん。殊に、現在の戰爭はよくない。近代の戰爭は、昔のそれとは違つて、その計畫者の期待とは、全く反對した結果を招致するものである。現に歐洲大戰の結果、三つの強大な帝國が倒壞してゐる。……………………。この點について、相當に考へてゐる人があるかどうか、わたしにはわからん。……………………。今日の戰爭は、空中戰が、主になるから、男が戰場で戰死するよりも、飛行機の爆

撃によつて、男ばかりでなく、女までも殺してしまうことになる。これは、如何にも殘酷だ。大昔から、なぜ、女を戰爭に出さなかつたかといへば、女を殺せば、その國は、當然、滅亡してしまうからだ。男だけ殺すのなら男が、三人も殘れば、また、澤山の子供をこしらへて、次の世界が造り出せるではないか。だから、今日の戰爭は、國家の自殺行爲だと言ふのだ。だが、戰爭のしたい者には、戰爭をやらせておくさ………。尤も、戰爭で厄介になるのは「戰爭」論者である。死ぬのは、兵隊で、彼等「戰爭」論者は、死なないで、甘い汁をすつてゐる。

それから、また今日の戰爭では、わたくしは、個人的な勇氣なぞは、問題にされなくなつたと考へる。昔は體力が、絕對に、必要欠く可からざるものとされてゐたが、今日では機械力を第一とするやうになつたのだから、力のある若い者は、あまり、戰爭には重要ではなくなつたのである。だからして、今日の戰爭では、先づ、七、八十歲位の老い先きの短い者をつかひ、次ぎに、六十歲、それから、五十歲と、漸次、若い者を、後から、つかへば、よい

わけである。戰爭が勃發したならば、まづ、わたしなぞのやうな先きの無い者を、第一線に送つてやれば、よいわけになる。飛行機なぞは、ボタン一つ押せば、われわれ老人の手で、容易に動かせるのだから…………。

日米戰爭問題

一九三三年三月二十四日、米國サンフランシスコにて。

どこの國へ行つても、第二の世界大戰が起るだらうといふ懸念を抱いてゐるが、愚の骨頂である。第一、日米戰爭なんてことを考へることが、間違ひである。アメリカは世界大戰で、大戰爭のもたらす慘禍を、いやといふ程知つてゐる。日本人も、元來が、戰爭嫌ひな國民である。現在、日本は、やむを得ず、戰つてゐるのではないか。また、滿洲問題も、アメリカ人が考へてゐるやうなむづかしいものではない。この問題のために、夜中、眼をさますアメ

リカ人もあるまい。だが、國際聯盟は、この問題のために、えらい目にあつたものである。

國際聯盟は、問題なく失敗した。國際聯盟の主要部分は、外交方面の事務局ではなく、國際勞働局の方だといふことを、支那に悟らせただけである。

今後、世人が、ジュネーヴに行つたら、國際聯盟は、全くノック・アウトされて了ひ、單なる舊外交の殘骸として横はり、國際勞働事務局のみを發見するであらう。

（終）

昭和九年二月二十日印刷
昭和九年二月二十五日發行

定價壹圓

飜譯者　生形要

東京市神田區駿河臺二ノ四
發行者　小川治男

東京市麴町區飯田町二ノ五〇
印刷者　猪木卓二

發行所
東京市神田區駿河臺二ノ四
振替東京二七〇六五番
株式會社　同人社



[illegible]
[illegible] -

¥1.00